

第26回
自治労
文芸賞

散文の部

審査委員紹介

第26回自治労文芸賞の小説・ルポルタージュ・紀行文など散文の部審査員は次のみなさんをお願いしました。



鎌田 慧さん

社会派ルポライター。近著に「さ
ようなら原発の決意」「狭山事件の
真実」など

増田みず子さん

86年「シングル・セル」で第14回
泉鏡花文学賞受賞。著書に「月夜
見」など



道浦母都子さん

歌人。歌集「無援の抒情」で第25
回現代歌人協会賞を受賞。近著に
エッセイ集「たましいを運ぶ舟」



自治労文芸27

もくじ

写真

第27回写真コンクール受賞作品……………5

自治労文芸賞

第26回自治労文芸賞・入賞者一覧……………16

散文の部

本選考座談会・散文の部審査……………17

規律……………(入選) 橋本 春樹 自治労市豊岡労働組合……………36

あんちゃん……………(佳作) 浅香 恵 小矢部市職・退職者……………54

組合ヘルパー日誌……………(佳作) 桐原 則介 全国一般福井地方労働組合……………65

私の父……………(佳作) 道添 美枝 宮崎・都城市職 家族……………82

散文の部・予備選考を終えて……………86

散文の部・作品短評……………91

詩歌の部

詩

詩の部・審査員 山田隆昭 選評

嘘 …… (入選) 米谷 茂 自治労泉佐野市職 退職者 …… 97

知覚 …… (佳作) 和泉まさ江 川崎市職員労働組合 …… 100

傷跡 …… (佳作) 齋藤 新一 宇都宮市職労退職者 …… 103

短歌

短歌の部・審査員 森川 多佳子 選評 …… 107

日常 …… (入選) 米谷 茂 自治労泉佐野市職 退職者 …… 109

旅 …… (佳作) 山崎 俊定 自治労都庁職 退職者 …… 111

鴻鵠の声 …… (佳作) 鈴木 照夫 東京都清掃労働組合 …… 113

予後 …… (佳作) 和泉まさ江 川崎市職員労働組合 …… 115

ふるさと …… (佳作) 中川 潔 福井県庁職員 退職 …… 117

雑詠 …… (佳作) 道添 美枝 都城市職 家族 …… 119

俳句

俳句の部・審査員 小沢信男 選評 …… 121

瞬発の発条 …… (入選) 瀬角 龍平 垂水市職員労働組合退職者 …… 123

ギター少年 …… (佳作) ※あさがお 枚市職員関係労働組合 …… 124

終生 …… (佳作) 山崎 俊定 自治労都庁職 退職者 …… 125

想い …… (佳作) ※風 凜花 長野県職員労働組合 …… 126

無題 (選外) 和泉まさ江 川崎市職員労働組合 127

無題 (選外) 南出 孝次 松阪市職 128

無題 (選外) 道添 美枝 都城市職・家族 128

無題 (選外) 川崎 岳史 奈良市職・家族 129

川柳

川柳の部・審査員 小金沢綏子 選評 130

里帰りく長い老後が目にしみるく (入選) 中川 潔 福井県庁職員組合退職 132

無題 (佳作) 田中 良積 釧路市役所三オン退職者会 133

時刻表 (佳作) ※柳谷たかお 外ヶ浜町職員組合 134

自画像 (佳作) ※木立 慈雨 宮城県職員組合 135

まんが

2016まんが大笑・入笑作品

池上晃／園部信哉／高橋誠／澤井康樹／井家利之／ヨッシー・イリエ／
阿部正介／相澤まさ子／大西英剛／川口のぞみ／吉本和弥／和泉まさ江
／大植賢



「初めての微笑み」

原田 昌彦 (山口県本部・岩国市職)

この世に生を受け、息子さんにとっての初めての微笑みを父親の原田さんが写真に記録しました。本人の生まれた喜びと親にとっての生まれてきてくれた喜びのふたつの喜びがひとつになったような作品です。写真を見ていると大げさかもしれませんが、生物としての人間が本来持っている強い生命力を感じ、そして、なんとも言えない幸福感に満たされます。まさに、一瞬のアルカイックスマイルを撮った秀作です。



「いい顔み～つけた!!」

室井つな子（福島県本部・湯川村職労）

満開の桜の下で子供たちが欄干に沿って一列に並んでいる様子を下から見上げるように撮った作品です。構図が無駄なくシンプルなので写真の印象を強くしています。そして、その単純さを補うように、桜の色、子供たちの帽子や洋服の色、欄干の焦げ茶色など様々な色が写真にメリハリつけています。真ん中の一段高い位置にいてこちらを見ている女の子の帽子のつばの赤色と微笑む表情がさらに写真に変化を与え、印象を強くしています。



「はじらい」「家族と一緒に！」

三木 雅也 (香川県・観音寺市職労)

おそらく、これらの作品は撮影者が額縁を用意して、被写体の人たちに持ってもらい撮影したものでしょう。それぞれの写真にタイトルを付け、単写真として応募されましたが、仕掛けが同じなので、ひとつのシリーズとして捉え、二枚の写真を一組としました。この場合、仕掛けによってより明確になるテーマ性が必要です。写真は視覚的面白さだけでなく内容も重要です。額縁を使うことで何を表現したいのかを考えてみてください。





「つかまえた！」

島村 優（福岡県本部・筑後市職労）

シロツメ草畑で小さな甥が、シャボン玉を追いかけている様子を撮影した一枚です。エピソード欄に書かれたものによると、シャボン玉を捕らえた瞬間だそうです。逆光ぎみの光が、無数のシャボン玉に反射して、その存在感を増しています。一面のシロツメ草と後景の樹木の緑色が画面全体を落ち着いた雰囲気にし、左上の太陽の光跡が、アクセントになって、写真全体が幻想的な印象になります。



「鼻笑—hohoemi」

野中 翔太（自治労北海道・深川市職労）

凍ってしまった鼻水とそれを見て笑う友人の表情をとらえた作品です。作者は北海道在住で、エピソード欄に、鼻水は拭う間もなく一瞬で凍った、と書かれています。マイナス何度なのか実際の気温はわかりませんが、冬の北海道の寒さを視覚的に理解できるような写真です。手前の凍った鼻水にピント合わせているので難しいと思いますが、欲を言えば、奥の笑っている人物のピントがもっと合っていたら、より強い印象になったでしょう。





「一服の安らぎ」

渡邊 一寿 (新潟県職労・三条地域整備部)

農作業中の休息の様子を撮影した作品です。何の農作業かは分かりませんが、近所の人たちが集まり、お互いに手伝いをするのでしょう。エピソード欄には、一服中には笑顔があふれます、と書かれています。全体を写す意識が強すぎ、それぞれのひとの表情が分かりにくくなっています。この場の雰囲気さをさらに良くとらえるために、一部の人の顔が写らなくても、その表情がもっとよく見える位置や距離、露出を捜し当ててください。



「ファミリー」

宮地 敏雄（自治労佐賀県本部・佐賀県職連合）

コスモス畑の中で子供を抱く母子とそれを撮ろうとしている父親を被写体にした作品です。幼い子供がお母さんの口を押え、それを見ているお父さんは笑いながらシャッターを押しています。ほほえましい瞬間をとらえ、この若い家族の温もりが伝わってくるような作品です。ローアングルから撮影したことによって、手前のコスモスが画面上大きくなり、花々に包まれている感じが強調され、写真全体に暖かさを加えていると思います。



「大役を終えて」

須田 勝彦 (福島県本部・福島県職連合)

エピソード欄によると、福島県南会津町の田島の祇園まつりで、花嫁さんたちの記念撮影が終わった直後のホットした表情をとらえた、ということです。記念撮影とは異なり、それぞれの顔の向きがバラバラで面白くまとめられていると思います。また、女性たちの笑顔も印象的です。上段の花嫁さんたちの髪飾りが見えないぐらい（白い角隠しだけにする）の位置で撮れば、さらにそれぞれの表情が強い印象になったでしょう。



「食べ過ぎたかな？」

植木 薫 (神奈川県本部・自治労横浜)

成人式の姪御さんを撮影した作品です。エピソード欄によると、彼女は未熟児で生まれ、ご両親は心配して、大きく育てようと苦心していたそうです。姪御さんが、たくましく健康であることを強調しようとしたためか、広角レンズで近づいて上から撮っているのが、上半身が大きくなりすぎて誇張しすぎになっています。カメラを真ん中ぐらいいして撮影しても、姪御さんの健康的なたくましさは表現できるのではないのでしょうか。



テーマの解釈を出発点に

「第27回写真コンクール」の審査が9月28日に行われた。テーマは「笑・スマイル」。

今回のコンクールでは77作品の応募があり、そのうち9作品が受賞。残念ながら、今回のコンクールで特選は選ばれなかった。

総評

応募作品を見て感じたことは、赤ちゃんや子供を撮った写真が多数で、面白味に欠ける作品が多かったということです。残念ながら、特選はありませんでした。コンテストの審査で、いつも感じるのが、類似の被写体を撮影する人たちがなんと多いことかということです。どのようなコンテストの審査員も、多数の写真に限られた時間の中で見て、良いと思うものを選びます。このような条件で作品を吟味すると、当然、似たような被写体の写真は、比較してより良いものを選びます。そのため、類似の被写体の写真は、どんどん選外になってゆくこととなります。つまり、被写体が他の人と異なるだけで、かなり目立つということです。当然、被写体だけで選ぶわけではないので、最終結果はそんなに単純ではありませんが、そして、何を撮影するかを考えることは、テーマを考える

こととなります。今回のテーマは「笑・スマイル」でしょうと言われそうですが、これは募集をする側が設定した大きな枠組みのようなものです。ここからあなたが考え感じたことを出発点にして、被写体を選び、撮り方を考えてください。このようなプロセスで撮られた写真には、被写体を通して、撮影者が現出してきます。良い写真は、結果論では撮れません。

写真を構成する要素を大別すると、Subject (主 題) Composition (構図) Light (光) の三つになります。これら三要素の中に被写体の選択やシャッターチャンスや色の選択などは含まれています。皆さんの写真をこの三点から見直してみてください。自分の写真に足りないものが分かってくるはずです。次回は自分なりにテーマを解釈して、あなたらしさを表現した作品を是非見せてください。

審査員
鈴木 邦弘さん
(写真家)

雑誌を中心にフリーの写真家として活動。自治労通信および『世界』などにドキュメンタリー写真を発表。93年「森の人・PYGMY」で第18回伊奈信男賞を受賞。日本写真芸術専門学校主任講師。日本写真家協会 (JPS) 会員。自治労情宣セミナー分科会講師。

自治労文芸 第27号

第26回

自治労文芸賞 受賞作品集

第26回自治労文芸賞・受賞者一覧

散文の部

入選 『規律』 橋本 春樹
 佳作 『あんちゃん』 浅香 恵
 佳作 『組合ヘルパー日誌』 桐原 則介*
 佳作 『私の父』 道添 美枝(家族)

短歌／審査員・森川 多佳子さん

入選 『日常』 米谷 茂 自治労泉佐野市職・退職者
 佳作 『旅』 山崎 俊定 自治労都庁職・退職者
 佳作 『鴻鵠の声』 鈴木 照夫 東京都清掃労働組合
 佳作 『子後』 和泉まさ江 川崎市職員労働組合
 佳作 『ふるさと』 中川 潔 福井県職
 佳作 『雑詠』 道添 美枝 都城市職・家族

詩歌の部

詩／審査員・山田 隆昭さん
 入選 『嘘』 米谷 茂 自治労泉佐野市職・退職者
 佳作 『知覚』 和泉まさ江 川崎市職員労働組合
 佳作 『傷跡』 齋藤 新一 宇都宮市職労退職者

俳句／審査員・小沢 信男さん

入選 『瞬発の発条』 瀬角 龍平 垂水市職員労働組合退職者会
 佳作 『ギター少年』 あさがお* 枚方市職員関係労働組合
 佳作 『終生』 山崎 俊定 自治労都庁職・退職者
 佳作 『想い』 風凜花* 長野県職員労働組合
 川柳／審査員 小金沢 綾子さん
 入選 『里帰り』 中川 潔 福井県庁職員組合・退職
 佳作 『無題』 田中 良積 釧路市役所ユニオン・退職者会
 佳作 『時刻表』 柳谷たかお* 外ヶ浜町職員組合
 佳作 『自画像』 木立慈雨* 宮城県職員組合

*はペンネーム

散文の部審査

出席者

鎌田 慧 さん

増田 みず子 さん

道浦 母都子 さん

司会 佐藤 環 樹

自治労文芸代表幹事

2016年11月10日 自治労本部

佐藤 2年前の前回がちょうど自治労60周年という記念の募集を行っておりましてので、応募本数が55本。今回は約半分の28本。ただ、レベル、水準の高い作品があったので、最終選考に残った8本は何か皆さん方にご議論いただける、そのような水準になったかと思いません。

幹事会としては、全国の組織、自治労ですので、何とか50本を目標にいろいろとすそ野を広げてピアーナルしていきたいと考えています。最近は守秘義務関係の部分がかなり問い合わせも来

ておりまして、この部分を書くことや差し障りがあるのだろうか、そのようなところでかなり悩まれながら作品を仕上げている方が多いかと思えます。

この後は、鎌田先生中心に選考の部分を進めていただければと思います。よろしくお願いいたします。

「遠道」 北乃 遥人

鎌田 「遠道」からですね。これはやはり小説家の増田さんから口火を切ってもらうのが一番いいので、よろしくお願いします。

増田 これは私は一番初めに読んだものですから、標準点というようにして、あとの作品を読んで点数の増減をしていきましたら、最終的にはこれが最下位になってしまいました。公務員の方が読むのと、私たち民間の人間が読むのと、町づくりという感覚が多分違うのだろうなと思うのですけれども。一番初めにびっくりしたのが、一人の人間の考え方で町づくりが随分左右されるのねと、そのような驚きがありました。これは少々釈然としない感じがありまして、どこかでストップをかける人や協力する人というものが現れてこないままにどんどん偏って行って、うまくいったり、いかなかったりという小説になっているような気がしました。これは一般市民としてはちょっと落ち着かない気分になる作品で、少し理解しにくいということもあります。一番初めに市民の思いや意見というものの前提がないなど。そこに少し引っ掛かってしまいました。



鎌田 慧さん

します。

道浦 ほぼ同じなのです。文体は読みやすくすらすらと読めますし、テーマも本格的なのですが、全体がシンドレラストロリーなのですね。このようなこと、もちろん小説ですから、あるかないか作ってもいいわけですけども、あまりにもうまくいきすぎて現実感がないという感じがしたのですね。一度出た人が、また戻って、それがまたとてもいい役割に取り立てられたというように、本当にそのようなことはあるのかしらというような気がして。面白く読ませるところはあるのだけれども、夢日誌という名前も付いているように、何か夢を見ているような現実感がない話だなと。もっと飛躍的なものにしていたら面白かったのになという感じが、私はしました。その辺が、小説なのだからもう少し飛んで、とんでもない結果になってしまった方が面白いのに、うまく安定着陸のようになってるので、どうなのかなと。

鎌田 自治労の組合員は行政のプロですが、この人は実際は、そこに関係する職場とは思えないですね。やはり一公務員の地方公務員の「夢想」という感じがして、夢想しすぎと思うのです。

ただ、文章や話の流れなどというものは読みにくくはないと思いますし、人間性も表れているという意味では、きちんとした文章になっっているとは思いますが。ただ、小説としてはあまりにも一本仕立てという気が

道浦さんがおっしゃるように、前のところを辞めて違う自治体に行って、またそこが行き詰まって、帰って来たら、きちんと迎え入れられるという、このようには行政の職員はやはりいかにないでしょうね。やはり無試験で入れるのですかね、このように。

佐藤 いや。この小説のスタイルが少し夢物語のような、結構ご都合主義なところがあるのですが。

鎌田 普段は少し屈折しているのかな。一方ではとても能天気である性格が現れていて、でも、やはりもう少し現実の行政で苦労した話を書いてほしいなと思います。

増田 夢想という形でサブタイトルに何か分かるようにしておけばいいのですかね。「とおいみち」、「えんどう」と読むの？これは。

佐藤 「えんどう」と、少し私たちも議論になったのですが、「えんどう」だろうなど。

増田 「とおみち」でもいいような気もしますけれども。

道浦 でも、夢のようなことがなかったのだから、少し違う感じのタイトルでも良かったのではという気がするのですけれどもね。

増田 そうですね。

『エッセイ』の『5編』 野川 義秋

鎌田 これ、エッセイはノンフィクションにも該当するので、僕がやらせてもらいましょう。

これは不忍池のほとりといいますが、上野の。これは初めて分か

ったけれども、再任用から再雇用という道があるのだということがよく分かった。定年になったあと4年間再任用があって。それから、再雇用があって嘱託になるという、そのような感じなのですね。再任用は65才までやるのかしらね。

佐藤 はい。基本的には雇用と年金の接続で、各自治体は65までは職員として。

鎌田 それから3年ぐらい再雇用というものをやるのでしょうかね。

佐藤 体の動く方は、やはり働く道を選んでいきますね。

鎌田 75ぐらいまでは働けるのですかね。

それで嘱託員になるのですけれども、この人は建築といいますが、そのような仕事をしていて、上野公園をよく歩いていて、ここで見ている細かな情景がよく出ていると思います。オムニバスといいますが、短編を何編か集めて、この「ほとり」や「ゴリラ」など、そのような短編をオムニバスふうになっているのですけれども、僕はゴリラという動物と、それから、何か公園でよろよろ歩いている老人がだんだん元気になっていく姿など、そのような印象的な風景が出ている。このように定年になって何年かしてから、日常茶飯をとらえた小説で応募してくるという。それがこの自治労文芸の一つの特徴だと思ふし。この人は前にも佳作になっていたのではなかったかな。

増田 前回は入選したと思えますね。

道浦 名前は何となく覚えてる。

佐藤 かなりさかのぼるのですが、第18回、2000年の時に入選ですすね。

増田 入選ですすね。でも、毎回多分応募してください。私はこの人に呼ばれて行ったことがあります。

道浦 お話しに？

増田 研修会のようなもので、小説を書く人たちに話をしました。

鎌田 野川さんは、もうずっと書いているから手堅い小説で安定性がある。それで、老人の薄日が差しているような、そのような生活、淡い感じがよく出ている。老人文学ですすね、これは。

増田 そうですすね。

鎌田 なかなか安定性がある。これ、増田さんから。どうですか。

増田 そうですすね。何か少しさみしくて活気がないのですけれども。これがやはり自治労文学の特徴の一つでもあると思うのですが。公務員の一生という、個人ではなくて役職で仕事をする存在というイメージが強いのですね。役職から離れると、自分の個人的な意識も薄れてしまうような感じがします。実際にこの各エッセイの中で、そこにいた当時の自分と、そこから離れて他の仕事に行った時の自分との自己意識が随分違って、役職の中にいる時は役職の顔になるという、興味の持ち方もそのような感じで、それが移ろっていくと、「本当の自分はどこにあるの？」というような感じはしてきますね、読んでみると。ただ、そのような全体を非常にまじめな文章で淡々とまとめているので、感じは悪くないなと思えましたね。うまいと思えますし、でも、どのように希望を持たないのかなという気はしました。

鎌田 うん。このように暮らしているのだらうな。そのような安定感のようなものが感じられますね。それから、やはり物を書く姿勢があるから、普段からよく観察しているものを書いていて、

そのようなやはり上野公園のことを書いてみたかったのでしょね。それでゴリラや銅像など、そのような象徴的なものを表している。弟のがんばりは仕事とあまり関係ないごく家庭的な話なのですけれど、あとは増田さんがおっしゃるように、仕事と自分の変化というものが、そのようなものがよく出ているなど。

増田 趣味でも何でもいい、ずっと若い時から追いつけてきたもの、小さくてもいいのですけれども、そのようなものがあるとか一つ、人としてつながるかと思つて。それが無いのが何かさみしいのかなという気はしましたけれども。

鎌田 なるほどね。

増田 要するに物を書く源流といえますかね、なぜ書くかということなのですけれども。一つ何かつながるものがあるのがあって追いかけていくのが、結構書き続けるということに近いような気がするのですけれども。この作品の場合だと、行ったところで見たり経験したりしたものを書くという。次に行ったら、また次のものを書く、そのようなあまり自分の意識との関係のないところで書き物が続いていくので、そのようなことを作者はどう思っているのだろうかということは少し気になりますね。

鎌田 ここには、連作という意識があまりなかったのではないですか。

増田 そうですね。

鎌田 書いたものを集めています。だから、連作にしてキーワードなどでつなげておくというようになっていない。同じ体験が何度か現れていますね。だから、そのとき書いていて。だから、連作としてつなげて書いていくという、そのようには構成されて

いないのだと思いますけれども。道浦さん、いかがですか。

道浦 そうですね、前半の動物園の話は面白いので、私はこれをもっと深く中心のテーマにして、長くならないで短いもので仕上げる方法はなかったのかなと思つました。足の悪い老人と弟さんの重なりなどをもう少し深く自分に引き付けて書いてほしかったと思います。春の章などは、一番何が言いたかったのかな。だから、上野でエッセイが5編ですね。その必要はなくて、例えばゴリラでもっと膨らませて1本にできなかったのかというような気がします。

それと、小さいことなのですけれども、少し誤字や変換ミスが多いのが気になりました。

鎌田 誤植がありましたね。

道浦 ええ。誤植なのか、ご本人が間違えているのか分からないのですが。

それから、突然、政治の話が出てくるでしょう。民主党はどうのこうのというような。それは、やはり自治労文学の特徴なのだと思う。ただこれが効果的に使われていないという気が少ししました。だから、一番言いたいこと、この人の良さというものは対象をきちんと見て、例えばゴリラのことを、どこか上野の雰囲気を描写して、そこを自分の今の心境と重ねるといふ、そのようなところがこの作者のよいところなので、その辺がもう少し引き出されたらよかったです。ただ、悪い点数は出ませんでした。

鎌田 はい。ゴリラの世界というものが、やはり飼育係などのかかわりによって、個人的に聞いた話であつて、作者の関心に合

っているのでしょうか。それはすごく面白い。ゴリラのところが一番僕には面白かったですね。

「明日はまた来る」 菅原 香理

道浦 割合、若い年齢の方でしょうか。

佐藤 35歳ですね。

道浦 35歳ですか。恋愛をテーマにした散文で、気持ちのいい文章なのですが、嫌なことの内容、職場で何か嫌だったので、京都に来るといふ設定なのですけれども、その嫌の内容が書かれていないのですね。だから、その動機が、多分職場での何かなのだろうから、そこをきちんと書いて京都に来たというようにしないかと、少し説得力がないなと思いました。インパクトをもう少し持つためには、旅に出るまでの自分の日常生活がどのようなものであったか、そのようなことをもう少し詳しく書いた方がよかったです。ではないかなと思います。ただ、京都という舞台で、旅の途中で会った人と恋をしたというのはとてもきれいな話なので、夢がまだある世代なのだなと思って救われる気がして読みましたけれど、物足りないところはあります。

増田 嫌なことというのは多分後半の方に、上司にしかられたこと、上司と決定的に切れたということだとは思いますが。ただ、私もこれだけでは少し物足らなくて、この切れた時のことは書いてあるけれども、それ以外の普段もっと日常の平均的な上司はどのような人なのかということが分かる程度には、一言欲しかったな

と思います。それと同時に、自分がその職場でどのようなタイプの人間なのかということが、読者には少し分かりにくいですがね。だから、その上司の怒りが正当なのか理不尽なのか、その辺が少し判断がしにくいかなと思いました。自分寄りになりすぎています。だから、その間に立つ人間の意見のようなものを少し入れるような客観性があれば、随分分かりやすくなるかなと思います。そのようなことを書きたくて書いたわけではないだろうということとは分るので、それ以外を抜くとなかなか読みやすきれいな文章で、心温まるタイプの文章かなとは思いますが、やはり一番必要なものが少しスルーされているという気はします。

道浦 せっかくこのような恋愛小説といいますが、散文なのですけれど、「明日はまた来る」は少々、もう少しロマン性があるタイトルがよかったですかと思いましたが。今、増田さんがおっしゃったように、嫌なことがあって、京都に来て、それでまたいいことがあって、また明日は来るということなのでしょうけれど、これは書いていることは恋愛の話でしょう。だから、違うタイトルが欲しかったなという気はします。

鎌田 このようなストレス解消にむかう、自分の気持ちを収めに行く旅なのですけれども、何があったのかを書くことがないと、僕はやはり小説として成立しないと思うのですね。導入部分で京都に行くのですけれども、でも、やはり何があったのかということを引きちゃんと見つけていく。見つめると日常生活の中で精神的にだんだん落ち込むのだったら書けないわけで、その時はやはり書かなくてもいいでしょうが、書けるような状態になったら、やは



増田 みず子さん

りそのところは書かないと。自治労という運動の中で小説を書くということに対する、僕らの期待には応えられないと思いますね。

それで、僕が引掛かったのは、21ページに、正確には知らないが年のころなら40代前半だろうと書いているのですけれども、これは自分の上司なのでね。自分が毎日接する上司を、年のころなら40代前半などと、そのようにはならない。入ったばかりの派遣労働者だったら分らないでしょうけれども、そういう設定でもないわけだから、この辺の具体性がやはり少ない。決済をもらいたい文書といったら、かなりの責任があるような仕事だと思うのだけれども、それを机の上に置いたからということと批判されているわけですから、その辺の具体性が、小説でも職場を書くのだったら具体性がやはり必要だし、意識的に抽象的に書いてもいいのですけれども、よく分らないところがあるのでですね。

もう少し、やはり現代的に職場のストレスのようなものときちんと向かい合わないと書く意味がないのではないかなと思います。

増田 5ページの最後の方面ですけれども、3行です。特に嫌なことがあった時は癒やしを求めてふらりとやって来る。習慣になっっているという。このような書き方をしていると、な

かなか小説になりにくいという気はするのです。この旅も習慣の中の一つでしかないのです。

道浦 大したことのように思ってしまうわけ。

増田 何かちょっとあるとすぐこうやって来てしまうというだけの話だから、もう読まなくてもいいということになってしまおうのですね。

鎌田 そうなのだね。

増田 嫌なことはいつももあるわけだし。

道浦 習慣になっている。

増田 うん。嫌なことの受け止め方ではなくて、逃がし方といますか。だから、解決も考えていないし、というようになっていると、小説の緊張感が一挙に崩れてしまうのです。少し残念かな。

鎌田 小説の緊張感ということでしょうね。書く必然性ということですね。

増田 はい。そういうことですね。

鎌田 少し何か嫌なことがあって、それを小説に書いて敵討ちをしているのではないですか。

道浦 ただ、この人は文章が結構書ける人。だから、書くきっかけを作りたいということだとは思いますが、それでも。

鎌田 この人は初めてでしょう。

佐藤 そうですね。

鎌田 このような若い方が現れてきたということなのではないかな。

佐藤 30代ですからね。



道浦 母都子さん

鎌田 今までは自治労文芸という、大体、年配で、組合運動と深い関係のあった人たちが書いてきたようですけれども、このような全く関係ない人たちが現れてきているという。

増田 いいですね。多分、書くきっかけのようなものつかみ方を少し変えてみたら。面白い展開になるのではないかなと思いますね。

鎌田 そのような職場のことを書くというときのものの見方、書き方というものは、やはり考えてほしいですね。自分の仕事を見詰めるということでしょうかね。

佐藤 この方の小説を見ていると、今の先生方のいろいろなアドバイスを受けたら、もっといい小説になると思うのですね。28ページは少なめなので、今言われたところを工夫してもらえれば、ずっといい小説になってくる。

増田 見方で本当になんか変わっていくと思えますね。書く力はあると思うので。

鎌田 ただ、職場のことや仕事のことなど、なかなか書けなくなってしまう。自治労はまだ職場のことをそれなりに書けるのだけれども、民間企業だったらもうほとんど書けない。

増田 書けないですね。小説はフィクションだというお約束ごとはあるのですが、でも、小説に書くことはみんな本当のことを書くのだと言って書いていますので。その辺で面白いジャンルなの

ですよ。

鎌田 プロレタリア労働者文学の中には、現場のことをきちんと書くという伝統や制約がやはりあったわけで、やはりそれがずっと残っているはずですね。

増田 そうなですね。

鎌田 うん。よくも悪くも。

増田 肯定的に書くときれいごと小説になってしまおうし、否定的に書く問題が山積みになるという。とても難しいですね。

鎌田 肯定的なことでは御用作家になってしまう。批判的に書くとかビになってしまうという。

増田 そうですね。職場のことでなくてもいいというようになる元気になるかもしれないのですけれども、そうすると自治労文芸としてはあまり意味がないですね。

「あんちゃん」 浅香 恵

増田 これはなかなか面白く読んだのです。普通に、いわゆるベタではあるのだけれども、何かすごく素直で感動もしますという感じで、私は好きでした。ただ、これは調べていないので分からないのですが、中に軽トララックが出てくるのですが、昭和23年に軽トララックというのは多分なかったのではないかと思うのですね。

鎌田 三輪車しかなかったね。それはないですね。

増田 その辺は少し。気にはなりませんでしたけれども。あまり深く考

えずに、このような文章がたくさんあってもいいかなとは思いました。それ以上のはなかなか言えないのですけれども、いい点は付けました。

道浦 私も、すごく素朴で、その素朴さが自然に自分の心にわいてきたものを文字化している。そこが非常に読む者に試みてくれるものがあるなと思いました。

話は富山県の石動というところが舞台のようなのですけれども、満州のことと福井地震が重なっていて、テーマが少し二分しているかなという気持ちになります。東北の3・11もありましたし、やはりこのようなことというのは見逃せないというように読んだものです。

このような言い方をしていいかどうか分からないけれども、素人が一生懸命書いているというところが私は好きで、プロ意識で応募作品を書くぞというような感じではないところが、とてもいいと思いました。ただ、お母さんが楽隊の中で剣舞に入るなど、ちょっとそのようなところは。

増田 格好よすぎます。

道浦 どうなのだろうと。これは本当なのだろうなと。でも、フイクションだから想像かなと思ったりもしましたけれど、まあ、面白いなと思いました。

言葉の使い方です少し気になったのは、58ページに、「みんな、文化というものにうえていたのだ」とあって、文化という部分ではなくて芸……。

鎌田 芸能ですよ、これ。

道浦 芸能でしょうね。文化ではないな、という感じはしたので

すけれど。素朴がいいということに尽きる作品でした。

鎌田 素朴な人柄って、本人が聞いたら傷つくかどうか分からないけれども。

道浦 ごめんなさい。

鎌田 いやいや。僕もそう思ったから、そう言っているのですけれども。すごく穏やかな人柄がよく現れていて、どこかメルヘンチックなのですね。ご自分の周りに材料があったのでしょうか、きっと。それを基に小説にしたのでしょうけれども。「あんちゃん」が技術学校にいて、弟もそれをやっていくという、その時代の貧しい生活の中で懸命に生きていくという、それがよく現れていると思うのです。

それで、60ページのところに、日本に来たらすぐ米の飯を食べて、顔を見たらおばあさんも女の子もいなくなつたという、これはどのようなことなのか。幽霊のような人がおにぎりを食べさせたのか。ここのはどのようなことなのか。

道浦 突然出るおばあさんが分からないです。

鎌田 うん。食べさせてくれた人が急におにぎりを見て、それはいなくなるという、そこがよく分からなかった。その頃おにぎりは、田舎だったらあったかもしれないけれども、なかなかかったとと思うのです。そのようなごく自然にあの時代の生活、戦前から戦後にかけての生活というものが、そこが書きたかったのでしょうか。それがよく分かる。僕は好感を持っています。好感持っているけれども、それ以上にどうするかということは、それは皆さんで。

増田 他の作品次第ですね。

道浦 60ページに半狂乱というのがありますが、後ろの方に。私は、「狂う」「狂」という言葉は使ってほしくない立場なので、ここは直してほしいなと思いました。

鎌田 今は使わなくなっていますね。

佐藤 参考までに、浅香さんは98年に文芸賞に入選されています。

道浦 入選されているの。

佐藤 必ず他の詩や俳句のところにも投稿していただける方で。

道浦 ずっと投稿していらっしやいますか。

佐藤 私が知る限りでは皆勤賞です。

鎌田 ああ、でも、残ってこなかったのですか。

佐藤 そうですね。この水準がもう本当に久しぶりでして。

鎌田 なるほど。毎年一生懸命書いている、このような人がいるのは嬉しいですね。OBで自治労文芸に向けて、静かにずっと書き続けている人が。

「組合ヘルパー」 桐原 則介

鎌田 これは自治労文芸らしい労働組合のことを書いていて、僕は好感を持った。この人は今まで応募されていますか。この人はうまいですね。

佐藤 記憶にないですね。初めてだと思います。

鎌田 この人は、ご自分の体験を書いているのでしょうか。ヘルパーの組合員のことをよく知っている小説です。

そのような基礎というか基礎がしっかりしていて、安定といえますか、間違いない小説という、変な言い方、評価ですけれども。この小説のディテールはきちんとしていますよ。会話のやりとりや、辞めよう、と精神的に追い詰められて辞めるのですけれども、それをフォローする動き方や相談のしかたなど、これは実際にあった話を小説化したのでしょうか。いままでは組合小説として、どちらかという職場の中からあまり出てこないで、運動をやっている人が小説を書いていました。その運動の、いま一番矛盾が深くなっている介護やヘルパーなど、そのような職場のところから、このような小説が出てきているという極めて現代的な感じがして。僕は、「うん、うん」とこの経過がどうなるかということで、すごく関心を持ちながら読んで、きちんとしていますよ、それが。僕はこれは感心しながら読んで、うまいなと思った。

組合活動をやっているのと書けないわけではないですけども、練や何かがあった人ですね。

佐藤 予想するに、教宣活動をしっかりやっている方ではないかなと思うのですね。

道浦 文章を書き慣れている。

鎌田 小説的な評価としては、まず増田さんの方でどうですか、小説的には。

増田 非常に細かい、一つ一つの細かいところから始まって、終始それで進んでいるので、現場というものがよく分かるという意味ではとても評価します。ただ、一つだけ気になるのは、介護の話のだけれども、介護される人が出てこないな、ということな

のですね。

鎌田 うん。なるほどね。

増田 だから、それは介護のすごく難しいところだとは思いますが、それは逆に思

録田 それは正直なところで、彼は介護のことは全然分からないわけですよ。

増田 そういうことなのですね。

録田 うん。介護の組合の相談を受けていて。介護の職場、現場は知らないわけですよ。

増田 それでも、どのような相談を受けるかということをつないでいって分かれればいいわけですね。

録田 そうですよ。介護の職場の方ではなくて、その労使関係の、運動プロセスの、押されていた運動を押し返していったという、そのダイナミックな動きが中心で。介護までを書けない。

増田 介護は、すごく辞める人が多い職場で有名なもので、そのような事情もよく伝わるかなとは思いましたね、確かに。

録田 もし、プロの小説家だったら、やはり介護のことを見に行くと、話を聞くなどして勉強して入れますね。

増田 やはりどうしても書かないと、とは思いますがね。

録田 小林多喜二たちもそういう方法でやっていますね。あのころのインテリの作家は現場を知らないけれども、取材して勉強して書いていますね。この人は組合にいるので、忙しくてそのような勉強をできないわけ。それで書いてきたからこのようになった。

増田 そうなのですね。この辺の問題だけです。気になったのは。

録田 道浦さんどうですか。

道浦 そうですね、現在のいわゆる施設の問題というのはさまざまあって、このような作品が出てきたということは当然だろうと思いますが、やはり、どのようなことが施設で行われていて、この人のパワハラがあったのかどうか。その辺が少し分かりにくいので、私はその上司といいますか、この行政の人とその対象者とは分かるのだけれども、今の施設の従事者、職員の人たちは問題をたくさん抱えていると思うのです。その辺がもう少し出ていてもよかったですかと思えます。適応障害のことが出てきますが、これも、もう少しこのようなことから書いたらこのような病気になるのだということを説得力あるところで書いてもらうと良かったかな、というような気がしました。

録田 パンパーに子どもが自転車でぶつかったと言うけれども、ぶつかったのだったら、もう少し傷が付く。どうなのですかね。自転車にぶつかったらかすかな傷で済まないのではないかな。どうですかね。

道浦 この解決のしかたは私もあまり賛成できないというか……。

録田 ねえ。子どもがぶつかったのだったら傷になっているよなと思うのですけれどもね。短兵急にどんどんどんどん進んでいくということはあるね。やはり余裕のようなものが、まあ、50枚ですから、もう少し周りを見回すという、そのようなことが必要だったかもしれないですね。

道浦 介護離職ゼロと、介護士の離職をなくさないといけないでしょうと、スローガンのことを最後に言っているのですけれど

も、なかなか難しいことですよ、これはね。現実は大変な人だと思えますからね。

鎌田 介護は大変でしょうね。膨大な人たちが苦しんでいるのでしよう。介護される方も、介護する方も。

増田 大学生の就職活動でも、実際に就活は大変なのだけれども、介護なら仕事がある。でも、行きたがらない。なかなかそこからもう始まらないという感じはありますね。

道浦 重労働で低賃金なのでしよう。

増田 うん。要するに報われないということ。

鎌田 初めは理想でやっても、ねえ。

増田 若い人は大変な思いをして成長してこない。家事もしないで育ってしまう。それでいきなり福祉に入るのとても難しいということ。人の世話ができない。

鎌田 昔の子どもと違うからね。

増田 違いますね。

道浦 お母さんが子どもを面倒見られない時代だから、他者の面倒を見るということはありません。

増田 そうなのです。その延長で、例えば結婚もしないで、仕事もしないで、そのまま家で親のすねをかじった子どもが、今度は親の介護をしなければならぬ時に事件が起きるといふ、そのようなすごいサイクルになっているという感じはしますね。だから、このような小説を見ても、すごく余裕がなくて、いつも何か焦って動き回って、今度はこちらの問題、今度はこちらの問題と、短兵急とおっしゃられた、それは、もう現実がそのようなことなのだと思えますね。みんなが見ないふりをしている中で、働い

ている人たちの、その苦労は伝わってきません。このようなものは、もっとこのような形で出してもいいのかなと思います。人の目に触れるようにした方がいいのかもしれないです。という気はします。

「規律」 橋本 春樹

鎌田 僕はこれはすごく既視感がある小説で、前に読んだことがあるのだけれども、同じ小説を直してきたのですかね。

増田 図書館の話ありましたよ。本を入れ替えてしまう。

道浦 だから既視感があったのね。

鎌田 何年前ですか。

佐藤 2年前に。「本の海」という題で。

増田 書き直したのね。

道浦 これは私もとても評価したのですけれど、そのように前に似た作品を出して、また書き換えて再投稿した場合はどうなるのですか。

鎌田 それは僕らが決めなければいけないのですよ。別に自治労に規則があるわけではないから、僕ら3人で決めればいいのです。

道浦 面白い、とても、これは。

佐藤 応募者の方で、皆さん方の批評をアドバイスで参考にして、再投稿されるという方はやはり過去にもいらっしゃいます、そのような点では今回すごくよくなっているなという。再チャレンジを基本的に事務局側としては拒んではいけないです。

増田 前は入賞して？

佐藤 佳作ですね。

道浦 全く同じではないのですからね。舞台が一緒ということ。鎌田 前のことはきちんと覚えていないけれども、2人の方から描いてくるという方法ではなかったのではないですかね。

増田 1人ですね。

道浦 今回は2人しているから。少し感じが違う。

鎌田 変えたのですよ。変えた方がうまく、小説の仕上がりはうまくいっているのではないですか。増田さん、どうですか、この評価は。

増田 面白かったです。メモに「何かよく分からないけれども面白かった」と書いてあります。

このいたずらといえますか、それをやる気持ちということがよく分からないので、それは面白いのかもしれないし、そこが分からないうちからもうひとつ気に入らないのかもしれないし、自分がよく分からないところではあります。ただ、このような不思議なたたかいたいものは今、テーマとして面白いとは思いません。読んでいるうちにだんだん面白くなったので、いいのではないかと。だんだん面倒くさくなってきたりすると、読んでいて、不毛な感じになるかどうかの問題だと思うので。これはもう理屈ではなくてもいいかなというふうに、私は思いました。

鎌田 うまいですよ、これは。

増田 はい。文章力もあると思いますし。

鎌田 この中で一番文章などがうまく、だから飽きないのですね。

増田 飽きないですね。最後まで読めましたね。長いですがね。それ、私の個人的な考え方としては、作者が同じ場合、うまく直った場合はオーケーではないかなと思っています。前に取ってしまったら、なしですね。取ってなければ問題ないと思いますけれども。

鎌田 このような抽象的なやつで、自治労文芸にふさわしいかどうかというものはあるけれども、今はそのような堅苦しいことは言わなくても、僕はいいと思っています。

この十進法というものは、僕らの頭の中では本は図書館の十進法で整理はされてなくても、やはり、ここにあるように一人の作家だったら、そこまで厳密にはしないけれども、大体好きな作家だったら、発表順、若い年代の順番にやったりするかな。そのような本棚の作り方をするけれども、十進法は何が基準なんですかね。誰が考えたのだろうか。あれは僕らの頭とは全然違うのですね。

増田 そうですね。

鎌田 あの流れはよく分からない。これは図書館の司書の人の小説でしょう。

佐藤 そうですね。はい。

鎌田 本人の経験。

道浦 司書でないといけないですね。

鎌田 司書が本の中で暮らしているうちにこのようなことを考えたのですね。自治労枚方「市職員関係労組」だから、これは図書館の委託職員？今、図書館は…。

佐藤 ほぼ委託になっていますので。

鎌田 委託も組合員がいるのですかね。

佐藤 委託もおりますね。はい。

鎌田 では委託の組合員なのだろうな。正職員だったけれども、年配で委託になったのかもしれないですね。年齢的にどうなのですか。

佐藤 橋本春樹さんは51歳ですね。

鎌田 では、まだ定年になっていない人なのだ。

道浦 委託ではないところもあるのですか。もう全部委託ですか。

佐藤 直営のところも残っております。

鎌田 全部委託になっていたら大変ですね。図書館長まで委託だったりするでしょう、今。

佐藤 もう全部丸投げしているところがほとんどではないですかね。

鎌田 館長さんは名誉職だったのに、市の名誉職だったのにね。

増田 私は委託になってから図書館へ行かなくなりましたよ。なぜか分からないけれども。

道浦 何かが違うものね。

増田 行ってもつまらない。

佐藤 指定管理者制度が導入されてからは、もう特に自治体は指定管理者制度でも図書館というところがほとんどになってきていますね。

鎌田 経費は半分ぐらいになってしまおうのですかね。もっと安いかな。

佐藤 もっと安いと思いますね。

鎌田 よくないな。文化だものな、図書館はね。

増田 お金をかけていないという感覚が伝わってくるのですかね。図書館が何か落ち着かないですね。

鎌田 だって、同じ本を10冊買ったりなどするでしょう。10冊、20冊も買ったりなどするのではないですか。

佐藤 やはり行政側が、どれだけ本を回転させたなどということの評価して、また次にその事業者に任せるかどうかという判断基準にするものですか。

鎌田 ああ。そうか。本が回転したら腕前がいいわけなの？

佐藤 そうなのです。そのような評価にしているのですね。全部ではないのですが、そこは大きくやはり判断基準になっていきますね。

鎌田 本も回転率では。喫茶店と同じではないのに。

佐藤 極めて世知辛い方向に行っていますね、図書館は。

道浦 私もこれは今日の8編の中では一番高い点を付けてきました。既視感があったのですが、自信がなかったので分からなかったのですが、今日他の方からもそのような意見も出たし。私は、同じような場所ではあるけれども、書き直してまた再応募されたということに関しては、問題がないのではないかと思えます。

鎌田 これは規律をこわす側とこわされる側、その両方の視点から書いていて、ついにその2人が会うのですね。そこがなかなかスリリングでいい。

道浦 少しミステリアスな感じが。

鎌田 うん。いいですよ、これ。なかなか計算して書いているのですよ。

佐藤 幹事会の中でもこの水準の作品を残さないわけにはいかなかったというところでず。

鎌田 そうだね。これは図書館労働の中から生まれた作品だから。職場文学ですね。

増田 そうですよ。うん。そう思います。

鎌田 図書館の中でじっと働いていて、いろいろな妄想されていて、それで、このようなストーリーを組み立てて書いたという感じで、僕はうれいしいですよ。

増田 いいと思いますね。立派だと思えます。

鎌田 これはね、A Iのことが入っているのですけれども。A Iがまだ、どうなのだろう。図書館でこのようなロボットがもう入っていますけれども、そこは、これはフィクション。

増田 フィクションですね。

佐藤 ここは私、フィクションだと思うのですけれどもね。

鎌田 A Iはここまでは入っていないでしょう。

佐藤 はい。

鎌田 そのところなので。もちろん小説だからいいのですけれども。A Iのことを書いてしまうと、また大変だろうから。専門でもないから、この辺になっていたのだろうけれども。それと、なぜA Iにする必要があるのかということがありますね。A Iにしてしまうと時代が先に行ってしまうのですね。

道浦 ある意味で、ちょっと未来小説。

鎌田 未来小説になってしまふのですね。現代では本を並べ替えるというゲームで、それをまたやり直す徒労といえますか、労働。でも、それは眼に見えない、やっているやつに、ある種感動しな

がらまた一生懸命、消耗な直し方しても、それがまたこわされてくるという、そのようなゲームのようなものが、それでいいのですよね。別に人工知能の機械を入れなくても。そこに僕は少し引っ掛かっていたのです。どうして人工知能から始めているのかなというように。

道浦 いわゆる人工知能の導入で、職員室も以前の半分以下にまで減ったという。これをやはり言いたかったのではないのでしょうか。

「楓」 河野 美姫

増田 客観的に見ますと、話としては楽しいし、読みにくい話ではないし、基本的に優しい心というものが主人公なので、一般的には割と受け入れてもらえる話、書きやすい話、読みやすい話だとは思っています。ただ、そのためにいろいろ都合よすぎる話の作りにはなっているちょっといい話のタイプだと思えます。でも、これが一つの一歩初めのストーリーではないかなと思います。人類共通のといえますか。ただ、大賞にはしにくいけれども、みんなが書きやすく読みやすい話としては、ずっと流通していくのだろうなと思います。

小説はやはり、最近は何に思うのですけれども、特別な人のためのもではない。普通の人も書くものであって、普通の人の感性は普通に評価すればいいのかなというような気はします。そのような人たちが頑張って、いろいろなものを読んだり書いたりし

てくれるのではないかなと思うようになってきておりますが。と
いいますのは、学生がたくさんこのようなものを書くのです。普
通に書きたい。かわいい心といますか、優しい心といますか。
このようなものだと思っているところがあるのですよ。

ゲームのストーリーもそうなのですけれども、元々やはり王子
様とお姫様のラブロマンスと、それから、ナイトの冒険物語とい
うものが基本になってるので、そのような心に近いものがある
のかなと思います。

道浦 この方は幾つですか。

佐藤 29歳です。

道浦 29歳。若い人が応募してくれるようになったということは
喜び。

増田 そうですね。

道浦 だけれども、そのテーマがみんなこのような恋の話で、非
常に都合がいい、しかも。恋というものはやはり苦しいもの、昔
はね。それが今、恋の話はほほ笑ましいけれども、パンチ不足。
増田 苦しさは抜いて書きますね、今。現実はずらいから、せめ
て小説で癒やす。

道浦 そのようなところで生まれているのかと思って読みまし
た。シンデレラを、夢の話を描いている。それを小説化していて、
心を癒やしている。そのような作品なのではないかなと思いまし
た。だから、自治労文学なのに、20代30代が応募してきている。
全く関係ないところでこのような作品を作って応募してくるとい
うことは、やはりかなり現実にはそっぽ向いて、恋に逃げていると
いいますか、そのようなところはあるかなと思ったりして読みま

した。少しできすぎだし、きれいすぎる。

増田 そうですね。

道浦 先ほどおっしゃった王子様とお姫様の話なのです、どう
してもね。

増田 童話の世界です、どちらかというとね。

道浦 ほほ笑ましいけれども、少し物足りないということが印象
です。

鎌田 自治労文芸の場がそれだけ広がってきた、その現れだとい
うように評価しています。

佐藤 予備選考でも議論になりましたが、この方も先生方のアド
バイスで継続して、変わってくれるような力量は一定程度あるの
ではないかなという思いがありました。

増田 そうですね。このようなものと思いついて書いている可能
性もあるのです。でも、本当はもっと違うものが書きたいと思
っていたりするので。

鎌田 なるほど。

増田 このようなものを書きたいのだけれども、書いてはいけな
いと思つていたりするので。嫌なことは。このように書いて
おけば何かそれっぽくなる。遠慮がちな人が結構多いのですね。
やはり人と違ったことを忌避する世代。

鎌田 書いてはいけません。

増田 自主規制がとて多いいのですよ、なぜか。だから、私は
「一度でいいから本当に自分の書きたいことを書いてみよう」と
話をするのね。そうすると、どんどん変わっていくのです。ああ、
自分はこのようなことを本当は書きたいのに、それを書いてはい

けないかと思っていて、何か隣の道を通っているというような。「書いていいんですか」という感じにだんだんなっている。書きたいことを書かないで何を書く意味があるのかという話をしていくと。

鎌田 小説は書きたいテーマがあるから小説を書くのだけれどもね。

増田 そうです。読みたいものを読み、書きたいものを書くのが小説だよと言っていると、「はあ」「そうなんだ」と初めて気が付くといえますか。

道浦 美しいそういうストーリーで、美しい文章でないといけないかと思っている。

増田 そう思っている人が結構いるということですね。

鎌田 このような新しい人が出たということ。

増田 そうですね。書くことが好きになってくれるといいなと思います。

「私の父」 道添 美枝

鎌田 この人は、普段文章を書いていないのでしょうか。でも何となく読んでみると、最後の方は結構まとまってきたらんだな。変だな、これはこれできちんと通用しているという。字もそれほど下手ではない。

増田 きれいですよ。

鎌田 うん。きちんと書いていて、1字1字きちんとはまっています、こん身の力を込めて書いているという。

道浦 段落や一字下げ。改行が全くない。

鎌田 点など全然ない。

道浦 ないですね。

鎌田 うん。書いたことが、ほとんどなかったのだろうな。

佐藤 82歳の方です。

増田 でも、改行などはなくていいのですよ。それは。

道浦 82歳の人がその父を書いているわけだから、すごく古い話ですね。

鎌田 うん。これは満鉄の方でしょう。

増田 だんだん引き込まれていきましたね。

鎌田 うん。そうなのです、これ。やはり父親のことを書き残そうという思いがよく現れている。昔はこのような立派な人がやりたくさんいたんですね。

増田 たくさん応募しているのですね。

佐藤 はい。何点かありまして。その中では、これがやはり一番推薦すべき内容でした。

鎌田 これは、お父さんが満鉄で働いている時、ご本人が子どもで父親の姿を見ている。その記憶と、あとから何か父親の資料があったのでしょうか。それを見ながら、父親の伝記を書くほどの力もなかったけれども、書き残しておこうと思ったのでしょうか。

それで、圧巻はソ連軍が侵攻してきた時に、ソ連軍とのコミュニケーションがあったからきちんと家族をそのまま出してくれたという。シベリアに抑留されなかったわけですね。それはコミュニティションがあったから、というようになっていられるのですけれども、そこがよく分からない。

増田 そのようなことは、たくさんあったようですね。

道浦 鎌田さん、一番いいと思われるところはどのようなところですか。

鎌田 これがいいということは、改行も全くないところに現れていますけれど、とにかく、これでもか、これでもか、と父親のことを書いていくという。それも、お父さんがいかに頑張った人かということを書き残しておきたかったですね。それで明治の人間というものがここに現れてきているのです。今の自己本位ではない、このような自制的な精神の人というものはやはりいたのですね。この満鉄時代や、シベリア抑留などの年代。

増田 このような文書を書く機会というものはなかなかないから、いいかなと思いますね。場所があればこのようなことを書いてみたいと思う人は多いと思いますし。資料にもなるから。

鎌田 自治労文芸という応募する機会があったから書いたのではありません。

増田 そうですね。

鎌田 1回も改行していない、これ。驚いたなあ。

増田 1回も改行していないですね。読みにくいかもしれないけれども、でも、改行しなくてもいい文章だったような気がします。

鎌田 うん、そういうことですね。

道浦 4点投稿していますね。

増田 そうなのですね。全部、読みたいぐらい。

佐藤 幹事会では、非常に少数の推薦でした。ただ、今おっしゃったように後半を読むにつれて何か引き込まれるものがあったも

のですから。他の作品については、先生方に見せる水準に達していかなくて。この作品に関しては皆さんにお見せしても十分足りかなと。主張がきちんと読み手に伝わっているかなというところがございまして。

増田 これは読ませるための文章ではなくて、書き留めるための文章ですね。

鎌田 うん。息遣いと同じなですよ、これは。

増田 そうですね。

最終選考

鎌田 では、決めましょう。入選はどれですか。増田さんからどうぞ。

増田 入選はやはり「規律」ではないでしょうか。

鎌田 はい。いいです。道浦さんも同じでしたか。

道浦 はい。「規律」です。

鎌田 あと、佳作が若干。

道浦 鎌田さん、ノンフィクションでお入れになったらどうでしょう。

鎌田 ノンフィクションは、野川さんは前に入選したのですよね。

増田 野川さんですか。

鎌田 ええ。野川さんは。

増田 していますね。

鎌田 すると、入選していない人におけるしかないな。まず、では、「私の父」を佳作にしましょうか。

佐藤 はい。

増田 ヘルパーは？

鎌田 ええ。これは入れます。

増田 はい。

鎌田 これは文句なしで。

道浦 「うえの」「うえの」どうですか、ノンフィクションとして。

鎌田 「うえの」もいいのですけれども。前に入選している。入

選していてもいいかな。どうしよう。

増田 そうですね。文章力などはなかなかいいのですけれどもね。

佐藤 過去、同じ相談をされた時は、やはり入選している方につ

いては辛くなっています。

増田 それでは、野川さんの場合は、もう少しまとめてほしかっ

たという意味で遠慮していただきますか。

鎌田 うん。そうですね。だから、連作にする作りで、期待をかけて

こう。

増田 そうですね。

鎌田 うん。うまくくつつくように。手間暇かけて削ってくつつ

けるよう。

増田 それだけの力はある人だと思いますし、ということですね。

鎌田 浅香さんはどうしますかね。

佐藤 浅香さんも一度入選はしていますが。

増田 だいぶ昔ですね。佳作でいいと思います。

鎌田 うん。

増田 お願いします。

鎌田 はい。

増田 では、この三つで。「私の父」「あんちゃん」と「組合ヘルパー日誌」。

鎌田 はい。

増田 いかがでしょうか。

鎌田 野川さんには、今、言ったようなことが伝わるのかな。

佐藤 はい。

鎌田 ああ。では、それでいいでしょう。

増田 はい。小説を読ませていただきたいという気がします。

鎌田 次に期待しています。

まとめ

佐藤 それでは、最後にそれぞれ今回の自治労文芸の感想を、総評でそれぞれお願いして、最後は鎌田さんにまとめていただきましたと思うのですが。道浦さんから、お願いします。

道浦 今回一番うれしかったのは、30代、20代の方が、恋愛小説という形だったけど、この自治労文芸という場所に応募してきてくださったって、自分の表現を広げていってくださったというところ。大賞にはなりませんでしたが、嬉しく思いました。

それから、テーマとしてはやはり介護の問題などが前面に出てきていますし、図書館の機能の問題や、それから、やはり組合におけるパワハラの問題など、現在というものが浮き上がってくるようなテーマがすぐわかっていて、そこをきちんと書くこうという姿勢がある方が応募していらっしゃるなと思いました。

それと、全作品に共通しているのは、非常に表現力が上達して

いて読みやすい。それから、読ませるといような工夫がとても感じられましたので、応募数は減ったというように伺いました。レベルはとも高くなっているのではないかと思います。

20代、30代の人たちがもっといろいろなテーマに挑戦して、自治

労文学にふさわしい作品を応募してくださいことを期待します。

増田 全体に、いろいろな内容で書かれていまして、それぞれに書く分野は違っていても、書きたくて書いているという気持ち伝わってくる作品が多かったです。書く方向といえますか、いろいろな書き方、いろいろなものの方で話の展開も変わってきそうな作品が多かったので、少し違う角度から自分の作品を眺めてみて、別の書き方、別の展開ができないかというようにも少し考えていただけると、その作品世界がぐんと広がっていくのではないかなと思います。いくらでもたくさん書いていけるとい力を一番感じたので、読みごたえもあって楽しさが続きそうな気がします。

鎌田 これは労働組合が主催しているのですが、やはり基本的には職場の中でなが見えているのか、職場の中のコミュニケーションなど、やはり労働組合の組織活動とは違う、文化活動として職場に新たな光を当てる、職場の動きをつくり出す、職場の中からのものを出すなど、そのようなところがあくまでも職場文学の中心だと思えます。やはり職場というものは、そこにいる人にか見えないわけだから、たくさんいろいろなことがある。でも、職場のことを書くということは、今ますます厳しくなってきたから、難しいのですけれども、でも抽象化して書くことができるわけで、表現の可能性というものは広がっていくと思うのです

ね。

今回応募されたのでは、職場が図書館というところからユニークな作品が出たからそれでうれしいのです。もう一つは、やはり組合員の家族たちも、この自治労文芸に参加しよう、参加したいというように、そのような機運ができてきたという、これは僕らも予想してもいなかったことで、それがまた活動の幅を広げるわけだし、またそれが組織活動にも戻っているという、そのように広まったということをとでもうれしく思っています。職場の中と職場の外に両方へ広まって、職場の中はさらに深くなって、職場の外は広がっていくという、そのような自治労文芸の特徴が現れたと思います。

今は、職場でのこのような文学賞というものはなくなってしまうと思うのです。本当に労働者の表現、労働者の文化活動というものが、なくなっているのですね。そのような意味でも、自治労はまだ大組織だから頑張ってほしいと思います。

道浦 家族が応募してきたというものは初めてですか。

佐藤 子どもは初めてですね。少々びっくりしましたね。

道浦 うれしいことですね。
鎌田 子どもが出すということは、お父さんの組合活動が立派だということですよ。

佐藤 そうですね。お父さんも応募しているので。親子で応募していただいている。

増田 かわいいですね。



規律

橋本 春樹

「おはようございます」

ロボットの背面にある電源ボタンを押す。起動後の第一声である。

センサーで私を感知し、頭をゆっくりと下げる。身長は百センチメートルくらい。光沢のある白いボディ。

開館前、動作確認のために返却カウンターに本を置く。ロボットは器用に関節を動かしながら掌部分についている読み取り装置を本にかざす。

「すべての本が返却されました。ありがとうございます」

その声は一昔前の機械音ではなく、少しばかりおかしなアクセントさえ気にならなければさほど違和感はない。

最先端の図書館である。国の補助金が出て、図書館の機能のほ

とんどを人工知能が担う図書館として、半年前に開館した。

人工知能を導入することで、多くの職員を削減することができ、人口が減少し続ける自治体であり、大企業があるわけでもなく、税収も右肩下がりである。職員の削減は致し方ない。

人工知能の担う業務は利用者登録、貸出、返却はもちろんのこと、本のデータ入力も行う。データ入力といっても、本の情報が入ったICチップが付けられて納品されるので、その情報を読み取って図書館システムに保存するだけである。最も困難であろう参考業務、簡単にいえば、利用者の調べものに協力することについても、胸元についた液晶画面にあるキーボードで質問したい項目を入力するか、話しかけるだけで、質問者が最も満足するであろう本を示すことができる。それどころか、その本が収められて

いる書架へと案内までしてくれる。図書館に所蔵してなければ、その場でインターネットに接続し、他の自治体の図書館の所蔵状況を調べ、利用者の希望を確認し、その場で貸出の申込までしてくれる。

人工知能を搭載したロボットは貸出カウンターに一台、返却カウンターに一台、あとは参考業務や所蔵確認用のロボットが閲覧室に適当な間隔を置いて六台という構成である。利用者自身が貸出・返却ができる機械も閲覧室に備えられている。

職員の仕事は人工知能や図書館システムの管理、選書、書架整理、返却処理の済んだ本を所定の書架に戻すこと。あとは傷んだ本を修理することくらいである。選書についても人工知能が蔵書構成や利用状況、大手の書店の売り上げ状況、他の自治体の所蔵状況など、様々なデータから図書館で購入してはどうかという本を選ぶ。その中から職員が予算に応じて発注する本を決めている。昔は本を発注する時には、分類を付す作業もあったが、それも今はシステム会社が出版情報を元に正確に分類を付してくれる。

多くの業務を人工知能が担うようになり、職員数も以前の半分以下にまで減った。

人工知能を開発した会社の社員がロボットを運んできて、何度もプレゼンテーションを行った。確かによくできていた。仕事をこなす速度は一定であるが、正確である。

労働組合は人工知能の導入は職員の削減を前提としたものである以上、慎重な姿勢であったが、実物を見ると何が何でも反対という訳にもいかなかった。

実際、人工知能を導入してからは仕事の内容が随分変わった。

私は閲覧室の担当である。人工知能が返却処理した本を所定の書架に戻すことが主で、あとは書架整理といって、書架に分類順に本が並んでいるかどうか確認する業務である。図書館の本は分類ごとに整然と並べられている。然るべきところに然るべき本がある。こそこそ、図書館においてその本は存在しようといってもいい。

人間でなければできない仕事はもうひとつ。子どもへ本の読み聞かせを行うことである。これは人工知能ではできない。いや、正確には今はまだできないといった方が適切だろう。今はボランティアが読み聞かせを行っているが、人間が読むように絵本の読み聞かせができる人工知能を搭載したロボットも近く開発されるだろう。

*

半年前に仕事を辞めた。自己都合との位置付けではあるが、いわゆる整理解雇というやつである。大手電機メーカーの下請け会社だが、業績の悪化によるものである。定年まであと十年あるが、独身ということもあり、周囲もそれとなく私が辞めること期待し

ているように感じた。

しばらくの間はのんびりするとして、暇を持て余すようになってから仕事を探すことにしようと思っている。

家賃もさほど高くない団地暮らしである。高価な買い物も好むこともない。しばらくの間、食いつなぐだけの蓄えもある。

ところが、いざ退職してしまうと、何をして時間を潰したのかと思索した。

—そういえば。

就職するまでは読書が趣味といえるものであった。物心がついた頃から本は身近な存在であった。お気に入りの絵本は飽きもせず何度か手にとり取ったし、昔は多くの家庭にあったであろう百科事典を気の向くままに拾い読みして過ごしたりもした。高校からは日本人の手による小説を好んで読むようになった。大江健三郎、安岡章太郎、北杜夫、遠藤周作、宮本輝、そして村上春樹。ほとんどの作品は図書館で借りて読んだ。高校の図書室。近くの公共図書館。大学では英語を学んだ。英語圏の小説が大学図書館に多くあり、日本語に翻訳された小説と原書の読み比べが興味深かった。

なにしろ時間はたっぷりとある。仕事をしていた頃の休日とは訳が違う。休んでいても、次の仕事のことを意識のどこかにあるものだが、もう仕事の段取りに思いを巡らす必要もない。

—図書館へ行こう。

何故、そう思わなかったのが不思議なくらいである。

思い立ってみると、行くべき所は図書館しかないではないか。お金もかからない。本を読むことに疲れたら新聞の求人欄も読めるし、折込の求人チラシも置いてあるはずだ。

—そういえば、市の広報紙に新しい図書館が開館するとの記事が載っていた。退職による第二の人生をスタートさせるといってほど大袈裟なものではないが、節目は節目である。そこで新しい図書館との関係が始まるというのも何かの縁かもしれない。

佐伯という名前は首にぶらさげた名札で知った。係長。ほぼ同年齢だろう。痩身。骨の周りに申し訳程度に筋肉がついているだけである。だが、貧弱な印象はない。本を抱えた腕を見ると、筋肉が無骨に盛り上がっている。身長は高い。百八十センチメートルはあるだろう。高い書架にも楽々と本を戻す。その逆に低い書架に本を戻す時は、いつも窮屈そうにしゃがんで背を丸めなければならぬ。短くカットされた髪の毛の八割ほどは白い。縁無し丸眼鏡をかけているが、老眼らしく、本の背につけられた分類ラベルを確認する時には、眼鏡を鼻先までずらし、顎を少し引いて焦点を合わせる。眉間の皺から神経質な性格の持ち主であろうと推察された。

職を失って以来、図書館には休館日以外は毎日足を運んでいるが、佐伯を見かけない日はない。

「休まず、働かず」

十年ほど前に高校の同窓会に顔を出した時、市役所勤めをしている同級生が言っていた。もちろん、一昔前の話だろう。色々な手続きで何度か市役所に行ったが、不快な思いをしたことは一度もない。言葉遣いも丁寧で、面倒くさい書類の書き方もわかりやすく説明してくれた。大きな災害が起きた時などは、随分ひどい扱いを受けることもあるようだが、少なくとも私は彼らに対して、理不尽な振る舞いをしたり、聞くに堪えない言葉をぶつけることはしないだろう。

佐伯が自ら進んで利用者に話しかけるところは見たことがない。それは自分の役割ではないと思っているのかもしれない。利用者のほうもロボットを相手にコミュニケーションをとる方が面白いのだろう。

佐伯は常に利用者のいない書架を探しては、図書館の静寂を損なわないよう静かに、そして正確に本を戻していく。

図書館に溶け込んでいるような佐伯の動きを見ると、ある疑問が湧いてくる。

―佐伯はこの仕事に何を見出しているのか。

まったく余計なお世話ではない。面白いと思おうが、面白くないと思おうが、佐伯は担当の仕事に忠実である。それだけで十分ではないか。そう思いながらも、佐伯の仕事ぶりを見ると、

そこには私の想像が及ばないような秘かな喜びが隠されているのかもしれない。

*

「困ります」

私はその男性に声をかけた。

他の誰にも気づかれないような静かな声で。たちの悪そうな人間でないことはわかる。

私と同年齢くらいだろうか。笑顔とは程遠い気難しい表情。だが、何かトラブルがあっても、冷静に理詰めをすれば最終的には納得してくれる。そういうタイプの人間だろう。図書館という限られた場所ではあるが、多くの人間と接してきた。第一印象と大きく異なる結果であったことはない。

その男は、失業でもしたのだろう。そういう利用者は多い。そしてある日を境に、姿を見せなくなる。

私は図書館司書としての専門職試験を経て採用された。以来、三十年近く、この図書館で働いている。当たり前の話ではあるが、長く働いていると、色々なことがあるものだ。

「この本を読んで人生が変わりました」と頬を紅潮させながら返却しに来た女子高生、「犬が齧ってしまって」と記したメモを表

紙がぼろ雑巾のようになってしまった本に挟んで返却箱に本を入れた人。そもそもその本は貸出手続きを経ずに持ち出された本だったこと。「ありがとう、との言葉は図書館の職員さんが言う言葉ではなく、利用者が言う言葉です」と言ってくれた人。『はらぺこあおむし』ありますか?』と下を向きながら尋ねた子ども。

母親が離れたところから、その様子をほほ笑みながら見守っていたこと。独り言がうるさいと利用者同士が掴み合いのけんかになり、仲裁に入った時、飛ばされた眼鏡が壊れたこと。「弁償させていただきます」頭が冷えた二人から謝罪を受けたが、度数が合わないようになってきたところだからと断ったこと。「ここは図書館だから、静かにしよう」夏休み、子ども同士で来ていた小学生の二人連れに注意した。子ども達はすぐに帰ったが、そのあとで一人の母親が子どもを連れてやってきた。「うちの子が何か?」そこから丸々一週間、母親のクレーム対応にかかりつきりになったこと。

彼は無言で振り返った。

「そこじゃありません」

私は彼が戻した本の背を指差した。

「申し訳ありませんが、その本の居場所は、そこではないんです」不器用な人間なので、うまく笑顔を作ることはできなかった。自分から利用者に声をかけるは久し振りである。

できるだけ穏やかな口調で言った。

「ここに収めてやりましょう」

私は彼が戻した本を右に一冊ずらして入れ替えた。

「ここが本来あるべき場所です」

「すみません」

彼の言葉に安心した。

彼を咎めずに、あとで正せばなんでもないことなのだ。

「元々ここにあったもので。いつも元にあった場所に戻すように気をつけているんですが」

その言葉に嘘はないだろう。

私にしても、利用者にそのような言葉を掛けたことは初めてのことだ。遅かれ早かれ、正される本であるから、なにも現場にくわしたからといって、口を挟むべきではなかった。何かしら空気が乱れるようなことでもあったのかもしれない。

図書館というところは不思議なところである。時々、説明できないような事象が起きる。閉館後の図書館で何者かの気配を感じたり、はっきりとは聞き取れない声が聞こえたり、無断持ち出し防止用のゲートがけたたましく警告音を出すこともある。「またか」と我々はやり過ぎす。ひっそりとした閲覧室にいると、そうしたことが起きても不思議ではないと感じる。

彼が気を悪くしていないことがわかり、私は簡単に分類の説明

をして、本があるべき所にあるようにすることが私の仕事であることを伝えた。

「悪いことをしました」

私は首を静かに横に振りながら、「よくあることです」と言い、彼の元を離れた。

—よくあることだが、それはあってはならないことである。

*

次の日、私は佐伯に話しかけた。

図書館の利用経験は豊富だが、分類のことなど気にも留めたことはなかった。本の背に貼られた分類シールに記されている数字は、私にしてみれば、必要な本を探すための記号でしかないからだ。しかし、佐伯にとって、分類とはただの記号ではないようだ。

—佐伯はこの仕事に何を見出しているのか。

その答えを見つけるには、分類のことを理解することが最善であると考えた。どうせ時間はたっぷりとある。これからもしばらくは図書館通いを続けるのだから、分類の仕組みをもっと理解していれば、図書館のことがもっと面白くなるかも知れない。

「分類のことを教えてもらえませんか」

周囲に気を遣い、静かに語りかけた。

佐伯は窮屈そうに背を丸め、書架の一番下の方の本を整理しな

がら顔だけをこちらに向けた。

「分類ですか」

「昨日、本を間違ったところに戻りまして迷惑をかけたので。分類のことに詳しくなれば、そういうこともなくなるかと思って」

「そういうことを言われたのは初めてです」

佐伯がゆっくりと立ち上がった。

眼鏡をずらし、私の顔を用意深そうに見る。

「この図書館には毎日たくさんのお客様がお見えになりますし、一日の貸出冊数は多い日で約四千冊になります。ということは、その数の本が返却されるということですよ。それを元の書架に戻すというのはなかなか厄介な作業なんです。それ以外にも、借りてはいかず、図書館の中で手に取られるだけの本もあります。そうした本はお客様がご自身の手で戻される訳ですから」

「それは確かに大変だ」

佐伯の言葉を遮るように口をはさむと、小さく息を吸い込んで、

「大変なんです」

と言って溜息のような長い息を吐いた。

しかし、佐伯の表情には何かしら愉快なことであるかのような感情を見て取れた。

「分類は難しいものではありません。数の小さなものから大きなものを、書架の左から右へと並べているだけですから」

その説明には、いささか拍子抜けした。

この分類にはこういう意味があって、この分類にはどういう意味があって、という説明が聞きたかったのだが。

その気持ちを察したように佐伯は、

「ご案内いたしましょう」

と言って歩き出した。

『日本十進分類法』

書架をいくつか通り過ぎて案内された棚から佐伯が取り出した本である。

「本表編と相関索引編の二冊あります。単純明快な本です。わざわざ説明するほどのこともありません。ばらばらとめくっていただければ、図書館の蔵書のすべてに付されている分類のことがわかります」

本を受け取ると、佐伯は仕事に戻った。

私は二冊の本を持って、空いている席に座った。本表は佐伯の言ったとおり、若い数字から大きな数字まで、その各々にどういう意味を持たせているのかが記されている。

例えば、「210・627」なら「西南戦争」、「440・76」は「ブラネタリウム」といった具合に。

もう一冊はまさに索引で、自分の探したいことをキーワードから探す。「旅行業」なら「689・6」、「生活実態調査」なら「365・5」といった具合である。

―面白い。

この二冊だけでも十分楽しめる。

図書館は知の体系であるとかで読んだ記憶がある。まさに人類が積み重ね続けているあらゆるものについて、数字を付すことで、図書館を図書館として存在させていることがわかる。

「さっきはありがとう。借りて帰るよ」

帰り際に、佐伯を探して声をかけた。

佐伯は自然科学の本が並ぶ書架の前で、やはり背を丸めながら書架整理をしていた。

「444。太陽について書かれた本が並んでいますね」

私がほんの少し笑みを浮かべながら言うと、佐伯も笑みを返した。

「その通りです」

立ちあがった佐伯は腰に手を当てて背筋を伸ばした。

『日本十進分類法』は、人工知能が入るもっと前、蔵書データをコンピュータで管理するようになってからは、職員もほとんど手に取らない本です。司書資格を得るための講座を受けている学生でも最近では分類のことはさらっとしか習わないみたいですから

「しかし、図書館では分類は必要不可欠なものなのでしょう。そこを疎かにはできないはずだが」

「もちろん。でも、パソコンのキーボードを叩けば、分類の意味

を知らなくても、そこにたどり着けますから」

佐伯はわざと自虐的に唇の端を少し吊り上げて笑顔をつくった。

「昔は面白かったですよ。本の発注や受人の時に、一冊の本の分類を巡って、ああでもないこうでもないやっていたんですから。今は分類に支配されているようなものです」

「支配？」

「そうです。私たちの知らないところで付された分類に従って、本を書架に並べ、常に蔵書が然るべきところにあるように保つ作業を続けなければなりませんから」

—佐伯はこの仕事に何を見出しているのか。

夜、借りて帰った『日本十進分類法』をめくりながら、答えを考えていた。

＊

—変わった利用者だ。

閉館後の図書館の閲覧室。ぼんやりと椅子に座り、男のことを思い出していた。

今どき本の分類に興味を持つ人がいるとは思えなかった。コンピュータが進む前なら、職員は本の分類を競うように覚えたものだ。カウンターで利用者に見えぬなら、「その本でしたら、」39

7・9（艦隊生活）のところでですね。『案内いたします』といったふうに、紙のカード式の目録を調べず、『日本十進分類法』も使わずに利用者に本を提供できたことを自慢しあったりしたものだ。

書架整理を集中してやるようになったのは、人工知能が図書館に入ってきてからのことである。それまでは利用者登録や貸出、返却、参考業務などに忙殺され、書架整理はいつも後回しになっていた。書架が乱れているとの苦情を受けることもあった。その通りだった。利用者の求めに応じて本を探しに行っても、あるべき所がない本が多かった。

書架整理に専念するようになると、それが思いのほか心地の良いものであることがわかった。あるべき所に本がある。知の体系を美しく保つ作業である。そこに自分が深く参画していることに快感を覚えた。

書架整理を続けるうちに、少しずつ感情が変化してきた。以前であれば、書架の少々の乱れなどは、致し方のないことだと言いつつ聞かせ、目の前の仕事を片づけることに腐心していた。しかし、書架整理を続けるうちに、知の体系は常に知の体系として保つことを追求するようになっていった。本の並び間違えを見つけたらとひどい違和感を覚えるようになったし、まったく同じ数字の分類であれば、シリーズものであればもちろんその順番ごと、あるいは著者の五十音順に並べるようになった。さらに同じ著者で

あれば書名の五十音順に並べ替えた。

人工知能が利用者の求めに応じて書架に利用者を案内してきて、目的の本がそこになければ、利用者はロボットの口のあたりにある呼び出しボタンを押す。そうすると、「職員の方、〇号機までお願いします」というアナウンスが二回流れる。職員はそのロボットを探し、目的の本の行方を追う。人工知能が入ってしばらくは、そのアナウンスが結構流れたものだが、ここ最近はアナウンスが流れたことは一度もない。知の体系が美しく保たれていることに他ならない。

*

私はあることを思い立った。梶井基次郎の『檸檬』ではないが、ちょっととした試みである。

本の並び替え。

『日本十進分類法』を読み込んでいくと、自然と分類を覚えるようになっていった。最初は三桁から覚え、蔵書の多いところでは四桁まで覚えるようになった。「000」なら「総記」、「459・7」なら「宝石」といった具合に。

そうすると、佐伯の仕事の正確さがよく理解できた。そして、分類通りに本を並べるのではなく、同じ分類の中でも佐伯の手が入ったところは、更に整然と並べられていることに気がついた。

同じ小説家であれば、書名の五十音順に並んでいたし、大東亜戦争の分類のところであれば、時系列で並んでいた。佐伯がそこまで執着する理由はまったくわからない。利用する側にしても、そこまで完璧に本が並べられていることを求めはしない。

— 佐伯はこの仕事に何を見出しているのか。

佐伯に対する疑問は更に深いものとなっていった。

「おはようございます」

いつものようにロボットの挨拶を受ける。

ひどい雨が降っているということもあり、閲覧室にいる利用者の数はいつもの三分の一くらいで、人目につかないところでこっそりと並べ替えをするにはもってこいの環境である。

小説が並ぶ書架近くの椅子に座った。小説は人気があるので、入れ替わり立ち替わり利用者がやってくる。これでは並べ替えはできないし、仮に並べ替えをしたとしても、それを利用者が手に取り、なんの気なしに正しく書架に戻してしまうかもしれない。

文学全集の書架近くへ移動した。人気のないコーナーである。敷居の高い文学全集をわざわざ借りる利用者はいるまい。いつも整然と全集らしく整えられている。佐伯もあまり注意を払わないところだろう。

『明治文学全集』（筑摩書房）

分類は「918・6（明治以降の全集）」である。おそらく何

年も貸出されていらないだろう。坪内逍遙、北村透谷、内村鑑三……。わざわざ全集で借りなくても、読みやすい単行本がいくつでもある。ただ、全集というものはいかにも図書館らしいではないか。こういう類の本が図書館に並んでいる姿を見ると、ここが図書館であると実感できる。

—さて。

並べ替えである。周囲に注意深く目を配りながら、背のタイトルをチェックしていった。

『明治文学全集』は全集の巻数順に左から右へと並べられている。

そこで、五十二巻目の「石川啄木集」を先頭に、著者の五十音に並べ替えてみた。最後は五十一巻目の「与謝野鉄幹、与謝野晶子集」である。「明治詩人集」や「初期白樺派文学集」といった類の巻は最後に適当にまとめておいた。総索引の別巻まで含めると百冊の全集である。

誰にも気づかれずにこれだけの本を並べ替えるのは骨の折れる作業であった。閲覧室の中央部分にある柱に埋め込まれたデジタル時計を見ると、並べ替えに二時間半も費やしたことがわかった。

並べ替えたといっても、遠目に見るといつも通りの姿である。

ひょっとしたら佐伯もしばらくは気づかないかもしれない。小説や料理など、利用の多い分類のところに入れる時間がどうし

ても長くなってしまふ。

並べ替えを終え、返却日を迎えていた『日本十進分類法』の貸出期間を延長しようとカウンターへ向かう途中、佐伯の姿を見かけた。「702（美術史）」の書架である。

「こんにちは」

声をかけながら佐伯の視線の先に目をやると、二十巻ほどある美術史のシリーズが並んでいた。『明治文学全集』の並べ替えをしたばかりである。まさか並べ替えをした私へのあてつけではないだろうか。違う。もしも私の並べ替えに気がついていたのであれば、その場で咄めてくるはずである。たった一冊の本を戻し間違えた時ですら、声をかけられたのだから。

佐伯はいつものように丸眼鏡を鼻先までずらし、美術史のシリーズ本が正しく並んでいるかの確認を続けながら、「こんにちは」と応えた。

「これ続けて借りて帰るよ」

私が『日本十進分類法』を見せると、佐伯は眼鏡をずらしたまま振り向き、「もしかして、はまりましたか」と言い、悪戯っぽく微笑んだ。

「まあね。なかなか面白い」

「規律です」

「規律？」

「図書館の規律です」

美術史のシリーズの確認を終えた佐伯は、その周囲の本の分類ラベルを見渡しながら続けた。

「図書館は『日本十進分類法』に記されたルールに則って蔵書を並べます。あるべき所にあるべき本がある。そうでなければ、そこは図書館とはいえません。分類は分類通りに。その規律を保つことが図書館の基本だと思いませんか？」

「確かに。でも、規律を保ち続けるのは大変だ。利用者も貸出も多い」

「まったくその通りです」

「うんざりすることもあるでしょう」

その問いかけに佐伯は答えなかった。

いや。正確には答える時間を与えられなかった。ロボットのアナウンスである。

「業務連絡。職員は三号機までお願いします」

随分前に聞いたことがある。利用者の求めに応じてロボットが書架へと案内し、そこに然るべき本がなかった場合のアナウンスであることは利用案内を見て知っていた。

佐伯はすぐにその場を離れて三号機へと向かった。

『日本十進分類法』の貸出期間延長の手続きを終え、閲覧室に目を戻すと、佐伯は彼らしからぬ慌てようで目的の本を探していた。

*

閉館後の閲覧室。

すべてのロボットをログオフした。メインサーバーの人工知能だけが、インターネット予約や蔵書検索などに対応している。

誰もいない閲覧室にひとりである。すべての照明を落とし、空調機も止める。月明かりもカーテンで遮っている。非常灯の灯りがあるため、完璧な暗闇という訳ではない。それでも日中の閲覧室とは異なる図書館独特の静けさが際立って感じられる。知の体系は圧倒的な存在感を示しているが、威圧的ではない。

贅沢な時間。

ぼんやりと閲覧室を眺める。自分はこの図書館の住人、あるいは番人のようなものだ。図書館の規律を保つために力を注いでいる。単純な仕事だが、楽な仕事ではない。書架の低いところに本を戻すためには腰をかがめて背を丸めなければならないし、細かい分類の数字をチェックしていく作業は確実に目を疲労させる。だが、こうして閉館後に暗闇の閲覧室を眺めることで疲労は回復し、規律を保つために働いている自分に満足する。

今日は久し振りにロボットのアナウンスが流れた。虚を突かれたような気分だった。

辻邦生の『美しい夏の行方』（中央公論社）が所定の書架に見

当たらなかつた。文庫化されたものも所蔵しているはずだったから、三号機のタッチパネルで確認すると、貸出できる状態であることが確認できた。そちらでもよいか利用者に尋ねたが、「細かい字はちょっと」と断られた。周囲の書架を探したが本は見つからず、利用者はまた次の機会で結構と言って帰ってしまった。

大抵の場合はあるべき書架の近くに紛れ込んでいるものだが、波紋が広がるように探しても見つからない。閲覧室の出入り口には盗難防止装置が設置されているので、無断で持ち帰られたということは考えられない。

―あつてはならないことである。

しかし、起り得ることもある。私は自分を責めた。図書館の規律は、ほんの少しの綻びから、そのすべてを損なってしまう。利用者にとっては、その一冊が図書館へ足を運ぶ目的であり、その一冊を手に行うことができる唯一の場所が図書館という施設である。

無人の閲覧室でしばらく過ごしてから、閲覧室に明かりをつけた。

『美しい夏の行方』を追う旅。

人工知能が入る前までは、見当たらない本がどこに存在しているのか、いくつかのケースが考えられた。どれも人為的なミスである。例えば書庫にあるべき本を誤って閲覧室に出したままにし

ておいた。そういった類である。しかし、人工知能が入ってから、人為的なミスは完全になくなった。他に考えられることは、利用者の手によるなんらかの誤りがあったということしかない。

手当たり次第に探すしかない。閲覧室だけで約十五万冊。気の遠くなる数字である。『美しい夏の行方』の分類は「915・6（明治以降の紀行）」である。もう一度所定の書架に向かった。すると、あっけなく本は見つかった。然るべき所に然るべく並んでいるではないか。

―他の誰かが見ていて、また元の場所に戻した。

まったく恥ずかしいことである。閲覧室に十五万冊の本があるとはいえ、そのうちの一冊を複数の利用者が求めることは考えられないことではない。数年前に出版された本が新聞の書評に取り上げられることもある。そうした時には、数年もの間、誰の手にも取られることのなかった本が、急に動き出すことがある。

新聞の文芸欄は、全国紙のすべてに目を通してきている。そこに掲載された本が古い本であれば、書庫から出してきて、新着図書の脇に置くことだである。

『美しい夏の行方』にどのような理由があったのかはわからない。テレビやラジオでたまたま取り上げられたのかもわからないし、辻邦生の愛読者が偶然同じ時間帯に図書館に居合わせただけのことかもしれない。

そういうことは図書館では起り得ることであるということに気

を回せなかったことを恥じた。長い図書館勤務の間では、そういう経験もわずかながらではあるがあったことを思い出した。

私は人工知能ではできないところを担っている。人工知能は、あるべき所にあるべき本がないと、アナウンスを發するだけで、あとは職員任せである。そこから先に人間の存在価値があるということを再認識しなければならぬ。

『美しい夏の行方』を探していた利用者には見覚えがある。毎日のように姿を見かけるヘビューザーではないが、週に二、三度は来館するから常連さんである。今度見かけたら声をかけようと、その本を私の名前で貸出中にし、事務所に置いておくことにした。

事務所に向かう途中、ちょっとした違和感を覚えた。

—景色が違う。

文学全集のコナーである。どの全集も書架に美しく並べられてはいるが、何かが違う。

注意深く背表紙に目をやった。違和感の原因はすぐに理解できた。

『明治文学全集』（筑摩書房）である。

全集は巻数の順番に並べているが、そこだけ作者の五十音順に並んでいた。全百巻、よくもこれだけの並べ替えができたものだ。

—なんのために？

百巻すべてが揃っているの、一冊も貸出には出ていない。背

表紙は完璧なまでにまっすぐに揃えられている。誰かが意図的に並べ替えをしたとしか考えられない。

—なんのために？

胸のうちで繰り返しながら、本来あるべき姿に戻した。

*

寝つきの悪い夜だ。

普段はベッドに横になると、すぐに眠りに入る。並べ替えをしたことで、脳が興奮しているのかもしれない。もちろん、罪悪感はある。分類のことがわかってきて、図書館のことも理解できてきた。佐伯が何度か口にした「規律」という言葉も、図書館がそれによって成り立っているということも理解できた。

—規律を守ることに喜びを見出しているのだろうか？

返却された本を所定の書架に戻し、分類通りに本が並んでいるかどうかの確認を続けるだけの毎日である。佐伯はそういう類のことに喜びを見出すタイプの人間だろうか。

何ひとつ答えを見いだせないまま、『日本十進分類法』を手にとった。

翌日、私はさりげなく『明治文学全集』の様子を見に行った。

すると、元通りに戻されているではないか。

佐伯の仕事だろう。他の職員を全集コーナーで見かけたことはない。

今日は『1973年のピンボール』（村上春樹・講談社）の文庫版を「797・9（射倅ゲームのパチンコ）」の棚に混ぜ込んだ。あながち間違っではない。ピンボールは小説の中の重要な要因のひとつである。間違っではないが、正しいかといえば、もちろんNOである。例えばピンボールに関する特集コーナーをつくるというなら話は別だが、そうでなければ小説の書架に並んでいるべきものである。

だが、その仕掛けも翌日にはきちんと片づけられていた。まったく見事なものだ。

それ以降も、ささやかな、しかし、佐伯にとっては許すことのできない仕掛けを繰り返したが、翌日に様子を見に行くと、書架に並ぶ本たちは何事もなかったように整理されていた。――佐伯は規律を保ち続けている。

*

ここのところ書架の乱れが目立つ。利用者のマナーはしっかりしている方だ。他の図書館では書き込みをされたり、切り取られたりといった事象が多いと聞く。この図書館も昔はそうだった。そうした本を見つけると、閲覧室に入ってすぐ正面、目につく

ところに専用コーナーを設け、意図的に損なわれた本を展示した。そうするうちに本を傷つけられることは無くなったし、なにかの拍子に本を傷めてしまった利用者は自ら弁償の手続きを申し出るようになった。

当たり前の話である。図書館の本は人類の財産である。国会図書館のような規模ではないにせよ、できるだけ多くのタイトル数を確保するようにしている。除籍は必要最小限しかない。利用がないから除籍をするということはない。それは図書館の役割を放棄する行為だからである。

利用のない本は定期的に書庫に入れる。書庫がいっぱいになれば、図書館の裏にある小学校の空き教室に移動させる。子ども数が減り続けており、その小学校も来年には別の小学校に統合される。そうすれば、すべての教室を図書館の第二書庫として使うことが決まっている。

書架の乱れは、もちろん許されるものではない。だが、ここ最近の乱れは、明らかになんらかの意図があったの仕業に違いない。そうではければ、『1973年のピンボール』が射倅ゲームのパチンコの書架に並ぶ訳がない。

返却本を書架に戻しながら、その周辺の書架整理をする。その繰り返しの中で、私は注意深く周囲に目を配った。

*

佐伯が並べ替えに気づいているのは明らかだった。

いつも通りに返却本を書架に戻し、その周辺の書架整理をする。返却本がなくなれば、無作為に、あるいは本人にはなんらかのルールが、それも図書館独特の規律に従ったルールに基づいて、黙々と書架整理を続ける。

私の手による連日の仕掛けは、そのすべてが翌日にはことごとく打ち破られた。

図書館を律する規律に余りも忠実なその働きに、抑えがたい苛立ちが湧き起ってきた。

先の見通しの立たない生活を重ね続けている自分には、佐伯のように自身を支える規律は何もない。自分の日常は、毎日図書館に足を運び、書架を乱し、貸出期間の延長を重ねている『日本十進分類法』を眺めるだけだ。図書館は今、私にとってなくてはならない居場所である。本に収められている知識を得るためではない。無為に流れる時間に、何かしらの意味を与えようとしているだけでしかない。図書館の規律を保ち続ける佐伯は、そのことに自分が図書館に存在している意味を見出しているのだろう。

そして、私は最後の並べ替えを行うことにした。そろそろ仕事探しを始めようと思う。いつまでもこのような生活を続けるべき

ではない。

数日前に村上春樹の『1973年のピンボール』を並べ替えた。

—そういえば。

最初に読んだ村上春樹の小説は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』であった。寝食忘れて、との表現が最もしっくりとするくらいに小説世界に入り込んだ。それをきっかけに、村上春樹の作品を、小説のみならず、エッセイや紀行文まで、発表された順番に読んだ。誰かのエッセイでそうした読み方が紹介されていたことを思い出したのだ。「特に研究目的という理由は必要ありません。執筆者の人生を共に歩む。そこから読者は多くのことを学び取ることができるでしょう」

その通りだった。

その日、佐伯の姿を閲覧室で見ることがなかった。毎日図書館に通う私が、毎日佐伯を見かけるのだから、休暇を取るところか、本来は出勤ではない日にも図書館に来ていることになる。図書館の規律を保とうとする佐伯ならあり得ないことはない。

いずれにしても、佐伯のいない閲覧室であれば、気を遣うこともない。他の職員も勤勉ではあるが佐伯ほどではない。本が並び間違えていても、気にも留めないことだってある。それは、彼らが整理した書架を、あとから来た佐伯が手直ししている姿を見ればわかる。

— やっきになって規律を保とうとしているのはあんだだけだ。
何度もそう思った。

利用者端末で著者を村上春樹と入力して検索キーを叩いた。書庫に入っている本を出してもらうためである。画面の中で、書庫に入っている本にチェックを入れ、プリントアウトした。人気のある作家であるから、三冊しかない。これなら職員にも不審に思われることはないだろう。

いくつかの書名と分類が印字された用紙を職員に渡した。十分ほど待たされたが、請求した本はすべて揃っていた。

あとは閲覧室にある本を抜き出していく。
そして向かった先は、文学全集の書架である。初めて並び替えをした所だ。一番下の段に、村上春樹の著作を並べた。もちろん発表順にである。

明らかに違和感がある。
佐伯にとっては許せない違和感だろうが、そういう理不尽な出来事は起こりえないことではない。

— 人生は規律によって成り立つ図書館のようなものばかりではない。
文学全集の脇に並べた村上春樹の著作群を見ながらそう思った。

*

出張から戻ると、もう図書館には誰もいなかった。
機械警備を解除して中に入った。直帰してもよかったのだが、一日の終わりは閲覧室で一人、ひと息ついて終わりたい。このところの並べ替えも気になっていた。

閲覧室の照明をつけ、分類の数字の若い順から書架を見まわしていった。時間も遅いので、細かくチェックをするつもりはない。横に倒れている本を立ててやるくらいのものだ。極端な並べ替えがあれば、元に戻してやればよい。

文学全集のところで足が止まった。

— 村上春樹。

学生がレポートでも書くつもりで本を引っ張り出したが、戻るのが面倒臭くなったのだろうか。端末を起動させて調べると、書庫の本も数冊混じっている。

しばらく眺めていると、それが出版された順番に並んでいることに気がついた。

『風の歌を聴け』

それがいちばん左端に並べられていたからだ。群像新人文学賞を受賞したデビュー作である。

— 悪くない。

私はパソコンを立ち上げるために事務所に向かった。

*

閲覧室に入ると、まっすぐに全集コーナーに向かった。昨日置いた本はすべて片づけられている。

昨日は佐伯の姿を見かけなかったが、私が帰った後にも戻ってきたのだろうか。いずれにしても、私はその仕掛けは失敗だったと思った。誰の目にもわかりやすい仕掛けである。佐伯でなくても、他の職員が気づいて片づけたのかもしれない。

「あなたでしたか」

振り返ると、いつものように静かな笑みを浮かべた佐伯が立っていた。

「ここ最近の並べ替えも？」

私は言葉に詰まった。

「いえ。全集コーナーにまっすぐ向かわれるお客様を見たのは初めてなもので。それで、ひょっとしたらと思ったんですよ」

私にはまだ適当な言葉が思いつかなかった。

「なかなか面白いと思えました」

そして、佐伯は私に目配せをして、あとについて来いというふうに歩き出した。

佐伯が足をとめた先に目をやった。

私が並べた村上春樹の本が、特集コーナーとして、そっくりそのままの状態で並べられていた。コーナーの壁には「村上春樹の軌跡／巡礼の旅」と見出しが貼られており、発表順の著作リストまで添えられていた。

「申し訳ない」

そう口にするのがやっとなった。

「とんでもない。こういう切り口で紹介できる作家は、そう多くはありません」

佐伯は満足そうにコーナーを眺めている。

「でも、どうして並べ替えを？」

いつかは来る問いかけだろうと思っていた。その答えも考えていたが、うまく説明できないまま今日を迎えてしまった。

「規律」

「規律？」

佐伯が聞き返した。

「規律によって成り立つ図書館と、規律に忠実なあなたに嫉妬していただけでしょ」

口をついて出た答えに、自分でもしっくりときた。図書館に通うというささやかな規律しかない日々には私はいる。

佐伯は眼鏡を鼻先までずらして私を見た。

「今回の並べ替えは規律の中で、図書館ならではの役割を見出したものです」

佐伯は言葉を選ぶようにゆっくりと話した。

「悪くはありません」

私は佐伯の言葉の続きを待った。

「分類は図書館では欠くことのできない規律の中心です。すべてと言ってもいいでしょう。でも、その規律の中では無数の組み合わせが考えられます。今回の特集のように。ただ、あなたのように分類に詳しい方、そして読書家でなければ、意味のある並べ替えはできないのです。そうした意味において、あなたは図書館の存在を奥深いものへとしてくださる存在となり得ました。それは私にとっては、大変嬉しいことです」

佐伯は私を非難する言葉をひとつも口にしなかった。それどころか、ひとりの利用者として、知の体系、図書館へ私が参画したことを心底喜んでるように思えた。

「またお越しく下さい」

佐伯が眼鏡を戻し、私に背を向けて歩き出した。

「ああ、それと」

佐伯が忘れ物を思い出したように足をとめて私に向きなおった。

「『日本十進分類法』ですが、来月には新しい版が出版されます。時の流れとともに世界も大きく変わりますし、新しい言葉も生まれてきます」

「規律の幅も広がる」

「その通りです」

そう言って佐伯は再び歩き出した。

佐伯の背中を眺めながら思った。

―悪くない。

どこの世界にでも何かしらの規律はあるものだ。図書館ほど規律に満ちた世界ではないかもしれないが、私なりに新しい規律を探してみよう。

そして、新しい規律の可能性を秘めた『日本十進分類法』が蔵書になる頃、また図書館に来ることとしよう。

―了―



「あんちゃん」

富山・小矢部市職（退職者）

浅香

恵

次郎は写真でしか、あんちゃんを知らないで大きくなった。

あんちゃんとは十五歳も年の離れた兄弟だったし、あんちゃんは工業高校を卒業すると満州（現在の中国東北部）に働きにいったからだ。

あんちゃんは電気技師として働いて、次郎の家に、お金を送りつけてくれた。それは、早くに父親を亡くした次郎の家を支えていた。

かあちゃんの針仕事だけでは生活していけなかったのだ。

「とうちゃんさえ生きていてくれたら、あの子を満州にまで働かせることはなかったのに……」が、かあちゃんの口ぐせだった。

「満州ちゃ、寒いところで、はいた息が、そのまま氷になるそうじゃ。そんなところで、あんちゃんは働いとるがや。」

物価も高くて、リンゴが一個十円もするそうなの

あんちゃんからは毎月仕送りがあった。

その便りがとどくと、仏壇におそなえてあんちゃんの無事を祈るのだった。

太平洋戦争は、ますます激しくなってきた。

郵便事情が悪くなる一方なので、まとめてお金を送りますとの便りとともに、かあちゃんには、えりまき、次郎にはハーモニカが送られてきた。

「あんちゃん、ありがとう」

次郎は、その夜はハーモニカをにぎって眠りについた。

あんちゃんが、そばにいてくれるような気がした。

かあちゃんの針仕事はなくなり、着物をもんぺに、ぬいなおす

しか仕事はなかった。

食べ物も雑炊だけになった。

そして、昭和二十年八月十五日。

日本は戦争に負けた。

次郎は町内会長さんの家で、玉音放送を聞いた。次郎の家にはラジオはなかったのだ。

「かあちゃん、満州はどうなるのや。なんでも、ソ連が条約をやぶってせめてきたそうやないか」

「あの子のことだから大丈夫や。きつと帰ってくる」

かあちゃんの声もふるえていた。

「男は、みな殺しや。女子供はアメリカの奴隷になるんや」

町内会長さんが叫んでいたが、そんなことはなかった。富山県の小さな町石動に、アメリカの軍隊はこなかった。

そうして、年があけて……

次郎は家の前で地面に絵をかくて遊んでいた。

ふっと影がさした。

目の前に、ボロ服を着たヒゲだらけの大男が立っていた。

「次郎か？」

大男は、そうよびかけた。

「…あんちゃん？」

次郎は後ずさりしながら尋ねた。

家から、かあちゃんがとび出してきて、その大男にしがみつ

た。

あんちゃんだった。

あんちゃんは三日ほど死んだように眠りこんでいた。

次郎はそのそばで、あんちゃんの手にさわって

「あんちゃんや、おれのおんちゃんや」と、つぶやいていた。

うれしかった。ボロ服を着て、コジキみたいなかっこうをして帰ってきたあんちゃんでも、うれしかった。

「時計も万年筆もソ連兵にとられてしまったけれど、わしには電気技師としての技術がある。これから、電気工務店の看板を出して働くからな」

「苦勞して帰ってきたんや。ゆっくり休んどった方がいいに」

「そんなこといれんやろ。幸い、わしには、ペンチ一本あったら仕事ができるんや」

最初にもちこまれた仕事は、ラジオの修理だった。

あんちゃんは、すぐに直してしまった。

「あんちゃん、すごいなあ。おれも電気技師になろうかな」

「おお、そんなら工業高校へ行けや。学費はあんちゃんがなんとかするさかい」

「うん」

あんちゃんが帰ってきてくれてから、家のなかは、みちがえるほど明るくなっていた。

「わしは幸運やった。

わし、工場で働いとる満州人の子どもたちを集めて卓球を教えとったんや。その子どもたちの親がとりなしてくれて引き揚げ船に、早くのせてもらえたんや」

「あんちゃんが卓球を、子どもたちに…」

「おお、そうや、次郎、わし、その子らをおまえやと思つて、かわいがつてきたがや」

「あんちゃん」

次郎は、ますます、あんちゃんが大好きになった。

「こんばんは」

「おじゃまします」

あんちゃんの幼なじみという人達が、夜になると訪ねてくるようになった。

「番茶しかなくてすみませんのう」と、かあちゃんが言うのと、

「いや、番茶でも、ごちそうです。わしのところは白湯飲むのがせいっぱいで」との返事がかえてきた。

次郎は宿題をしながら、となりの部屋の会話に耳をすませていた。

「みんな、やっとの思いで生活をしているのや。こんな時に青年団といわれてもなあ」

「いや、こんな時やから、青年団が必要なんや」

「そうや、助け合つて生きていこう」

セイネンダンって、なんやるか。なんか楽しそうやなと次郎は思つた。

やがて会合は近くの観音寺へ移つた。

次郎もついていった。

あんちゃんたちは、戦場から帰つてきた若者たちに呼びかけて、青年団を復活させたのだった。

その決起大会は、石動小学校のグラウンドでおこなわれた。

団長は、あんちゃんだった。

「青年団諸君」

あんちゃんは呼びかけた。

「このたびの敗戦で、国土は、あれはてている。あとから続く者たちに、なんとおわびするのだ。

だが、国やぶれても山河あり。ふるさとの山も河も美しい。

みよ、あの神社の大木を！

あの大木も、いまや、古い葉を落とし、新しい芽をつけている。

みんなで手を取り合つて助け合つていこう」

あんちゃんは立派だった。

最後の列で、あんちゃんの演説を聞いていた次郎は胸がいっぱいになった。

「石動青年団、団歌！」

前に、中年のおじさんたちが出てきた。

「一小節ずつ歌うからついてきてください」

♪ ああ、勤労の喜び胸に：

団歌はグラウンドにひびきわたった。

「いやあ、団歌を歌える日が来るとは思わなかった。これは、わしからのお祝いや。青年団ががんばってな」

おじさんたちは、涙ながらに、お祝いをわたしてくれた。

あんちゃんたちは深く頭を下げた。

青年団の会合は、一日おきに観音寺で行なわれた。次郎は、あんちゃんについていった。

「まるで、次郎くんは金魚のふんだなあ」と言われた。

「団長の秘書ね」

と、言ってくれたのは、副団長の小夜子さんだった。小夜子さんは色の白いきれいな人で、次郎は、その一言で小夜子さんが好きになった。

だれになんといわれようとも、はなればなれになっていたあんちゃんのそばにいたかったのだ。

「資金あつめをせにゃならんなあ」

「ワラビやゼンマイをとって、八百屋に売りにいこうか」

「みんなで海水浴にいきたいし、バスを借りるのに、いくらかかるやろうか」

次郎は、部屋のすみでじっとみんなの会話を聞いていた。

「石動小学校の物置は宝の山や」

ある日、耳よりな話がちこまれた。

「池守先生が、戦争中、ずっと楽器の手入れをされていてくださったそうや。これから、練習をみてあげると言われた」

戦争中は西洋音楽は禁止されていたので、池守先生は、この時を待っていたのだ。

「楽隊をつくって、村まわりをしよう」

「入場料を資金にすればいい」

池守先生の指導のもと、青年団の楽隊は結成された。村の小学校や公民館で演奏するのだ。

曲目は「団歌」「赤とんぼ」「ふるさと」「チゴイネルワイゼン」等だった。

照明は、あんちゃんのお手のものだった。どんな時にも、青年団の団歌から演奏が始められた。団歌は団員の心だった。

「あのお、お金を持つとらんのやけど、孫にだけ音楽をきかせてもらえんかね」

孫をつれたおばあさんが頼みにきた。

あんちゃんは

「おばちゃん、ようきてくれたなあ。わし待ったんや。さあ早くはいって」と言っていてあげた。

このことから、入場料はお金でなくとも、米や野菜でもいいということになり、集まった米や野菜を町の母子家庭にくばって喜ばれた。

すると、かあちゃんが

「あんたらの楽隊だけでは、たよりない。わたしが剣舞する」と
言い出した。

「かあちゃん、それだけはやめてくれ」

「そうや、楽器のひけん団員を集めておいで。わたしが剣舞をし
こんであげる」

わが家は剣舞の道場に早がわり。

「なんや、そこで、目を流せというたんや。だれが白目をむけと
ゆうた」と、かあちゃんのけいこは、きびしかった。

そうして「ああ、花の白虎隊」が生まれた。

日曜日毎に、楽隊と剣舞で村まわり。

どこへいっても大歓迎された。

みんな、文化というものに、うえていたのだった。

そして、昭和二十三年六月二十八日午後四時十三分。

その日、次郎は中学校のグラウンドで遊んでいた。

グラッと地面がゆれたかと思うと、火の見やぐらの先がグワン
グワンと回って、校舎の屋根ガワラがドーンと落ちてきた。

「地震やっ」

福井大地震だった。

その夜、青年団の緊急集会が開かれた。

議題は、福井に救援物資を送るかどうだった。

「ラジオで言うと思ったけど、福井市は全滅したそうだ」

「なんとかしてやろうやないか」

「そんなこというても、わしらかて、やっとの思いで生活しとる
のや」

「となりの石川県ならともかく、そのまたとなりの福井県まで助
けてやらんでも」

「福井は空襲にあって、そのうえ、今度の地震や」

「富山市も空襲におうとるやないか」

あんちゃんは、みんなのまん中で、目をとじて、じっとしてい
た。

その時、山野さんが、スッと立ち上がった。ブルブルふるえて
いる。

（あの、おとなしい山野さんが、いったいどうしたのやろう）と、

次郎は思った。

山野さんは、こぶしを天井につきあげて、叫んだ。

「わしらの若い力で、福井を救うんじゃっ」

オーッと、ときの声があがった。

「よしっ」と、あんちゃんが立ち上がった。

「村部の青年団に連絡をとろう。楽隊まわりで仲良くなった青年
団に頼んで食糧を集めよう。われわれは、二人一組になって、町
内まわりをして寄付を集めよう。決して、無理を言うな。一個の
じゃがいも、一本の手ぬぐいでいいからと頼むんだ。」

集合は二時間後、石動小学校の体育館」

(あんちゃんは、かしこい。ずっと黙ったまま考えてはったんや)
みんなは「福井を救え」を合言葉に、走るもの、自転車にのるもの、夜の町に消えていった。

二時間後の石動小学校の体育館。

一個のじやがいも、一本の手ぬぐいが、あんなに大きなものになろうとは……

コンブ、梅干し、ロウソク、米……

「金持ちの家ほど、しぶいんよ。こっちが気のどくなるほどの貧しい家の人が、困っている時は、おたがいさまと返してくれて」

小夜子さんが言っていたが、貧乏人はあいみがいて、ほんとうやなあと次郎は思った。

「あすの朝、山野とわしが、集まった分を軽トラックにのせて出発する。他のみんなは、村部と連絡をとって救援物資を集めていってくれ」

あんちゃんは、山野さんの肩をポンとたたいた。

山野さんは、額をピクピクさせながら、うなずいた。

「いけん！福井なんて、そんな危険なところに、おまえをやるわけにはいかん」

家に帰ると、かあちゃんの大反対にあった。

「関東大震災の時は暴動がおこったそうやないか。今度も、なにおこるかわからん」

「かあちゃん、心配せん」と

「かいしょうのない親やと思うとる。工業高校を出たばかりのおまえを満州に働きに出して、仕送りしてもらうて……」

だから、なおのこと、そんな危険なところへやれんのだ」

かあちゃんは肩をふるわせて泣いた。

「かあちゃん、おれもいく。おれもいくから。あんちゃんと無事に帰ってくるから」

次郎は、かあちゃんに叫んだ。

「もしものことがあったら……」

「だいじょうぶ。危険なところへはいかないから」

あんちゃんがそう言うと、かあちゃんは泣きやんだ。

「学校へは、かあちゃんから言うておくさけえ、あんちゃんといっておいで」

かあちゃんは、とっておきの白い敷布を出して、バケツに墨をいれて、ホウキで字を書いた。

「福井救援 富山県石動青年団」

「これを荷台にくくりつけていかれ。福井へ救援物資を運ぶ車やということ、しっかり、つけていくのやで」

あんちゃんは宝物のように、その敷布を受け取った。

翌朝、あんちゃんと山野さんと次郎の三人は、砂ぼこりの国道八号線を軽トラックで出発した。

金沢から大聖寺へと軽トラックは走った、荷台に福井救援の旗をひるがえして。

「あんちゃん、変わった建物やなあ」

「あれは一階がつぶれて、二階がおおいかぶさって『く』の字になってるんや」

次郎はゾツとした。

そうして、福井県にはいった。夕方は丸岡についた。

「丸岡城がみえる」

「城がつぶれんでよかった。城がつぶれていれば丸岡の人たちはどんな思いをしただろう」

黒いシルエットの丸岡城は、つぶれてはいなかったが、土台はいためつけられていたのだ。次郎たちは知るはずもなかった。

「今夜は、ここで野宿や」

あんちゃんは毛布を地面にしいて、寝ころがった。

「あんちゃん、地面があつい。ゴウゴウと音がしている」

「地獄のカマのふたの上にいるようなもんやなあ」

昼食ののこりのおにぎりと、ふかしたじゃがいもで夕食をすませた。

「次郎」

あんちゃんは自分のじゃがいもを一個、次郎に手渡ししてくれた。

(あんちゃんのぶんが少なくなる…)

と思ったが、お腹がすいていた次郎は、それを食べてしまった。

「山野、ありがとう。わしは、あん時、おまえがあんなこと言うてくれるなんて思わなんだ。ほんとうにありがとう」

「団長、わし、福井に思い出があるがです。南方から復員してきた時、わし、前の晩からなんにも食べるものがなかったんで、福井駅のホームにおいて水をのんでいたんです。そしたら、小さな女の子をつれたおばあさんが『くろうさまでございました』と、おじぞうさまにささげるように、おにぎりをくれたんです。わし、夢中で食った。日本に帰ってきて初めての米のメシやった。食べ終えて顔をあげたら、そのおばあさんも女の子もおらんかったです」

「そうか、そんなことが」

「あのおばあさん、息子を待ったのかもしれない。息子が帰ってきたら食べさせてやろうと大切に持っていたおにぎりやったのかも。わし、あのおばあさんが、くずれた家の下じきになっていたらと思うと、いてもたってもおられん…」

「引き揚げか、わしも満州から引き揚げてる時に、地獄をみたぞ。子どもは殺したらあかん、わしは、つくづくそう思った」

「子どもを殺す？」

「そうや、自分が助かりたいばっかりに、足手まといになる子どもを親は自分の手で…。そんな親は、安全なところにくると半狂乱になるのや。わし、日本人会の世話をしてきたから、半狂乱に

なった親たちを、この目でみてきたんや。

でも、親かてせめられんのか。頼みとする日本軍は、どこにいったかわからない。ソ連軍はくる。何日も荒野をさまよったあげくのことやったんや」

(あんちゃんは満州のこと、少しも話さなかった。そんな理由があったんか：)

いたたまれなくなった次郎は、おしりのポケットからハーモニカを出した。

♪春こうろうの花のえん：

「荒城の月」のメロディは、黒いシルエットの丸岡城に、ゴウゴウと音をたてている地面に流れていった。

翌朝、出発してすぐに道路封鎖にあった。

「富山県石動青年団です。福井へ救援物資を運ぶ途中です」

「なに、富山県から？こんな車で、よう富山県からこられたもんや」

若いおまわりさんはびっくりしていた。

(こんな車だけ、よけいや)

次郎は、おまわりさんをにらみつけた。

その、おまわりさんは、パッと敬礼した。

次郎たちは、深く頭を下げた。

(おまわりさんが敬礼してくれるなんて。おまわりさんちゃ、い

ばってばかりおるもんやと思うとった)

「そんなことやったら、ここで物資をあずかせてもらいます」

「そんなら山野、そうさせてもらおうか。あとの物資も運ばんにゃならんし」

「はい、団長」

「おたくたち、朝ごはんは食べられたんですか？たきだし用のテントに、おにぎりがあるから食べていってください」

クウーツと、次郎のお腹が先に返事した。のこりのじゃがいもを一個ずつ朝ごはんがわりに食べただけだったのだ。

「うまいなあ、あんちゃん」

「ゆっくり食べろよ、次郎」

おまわりさんは昼食用にと、二個ずつ、おにぎりをつつんで渡してくれた。

荷台がカラになった軽トラックは、とびはねるように、国道八号線を走った。

「あっ、あれは、なんだっ」

前方から走ってくる大型トラック。その荷台に、白いのぼり旗が立っている。

その白いのぼり旗は、白龍が空をきってくるように、グングン近づいてくる。

「おおい、おおい」

軽トラックと大型トラックは、すれちがいに急停止した。

大型トラックの荷台に乗っているのは、スコッパやつるはしを持って石動青年団員たちだった。

「なんや、おまえたちだったのか。どこの工事人夫かと思うたぜ。救援物資が集まらんで人足としてきたんか」

「団長、なにを言うとするがや。村部の青年団がえらい協力してくれて、体育館にはいりきらんほどや。これを機会に、連合青年団として団結しようと言ってきたんや」

「ちょうど良かった。丸岡で道路封鎖や、丸岡から福井までの道、つくってくれや」

「おー、みんな聞いたか。丸岡から福井までの道、おれたちの手でつくろうやないか」

オーッと、ときの声があがった。

（ああ、おれも早く、大人になりたい）と、次郎は思った。

家へもどると、かあちゃんは魚を焼いて待っていてくれた。

次郎は、学校があるので、それから福井へは行かなかったが、あんなたちは何回も救援物資を届けに、また人足として行った。

富山県の青年団が救援にむかったとラジオ放送されたら、石川県の青年団も団結して救助に来てくれて、復旧作業は急ピッチで進んだ。

そして夏をむかえ秋もふかまる頃：

「風邪ひいたみたいから、夕ごはんはいらん。すぐに眠るから」

青年団の集会から帰ってきた、あんなちゃんは、そのまま奥の部屋に入っていた。

翌朝

「あれっ、あんなちゃんは、まだおきてこんのか」

「朝ごはんのしたくができたさかい、呼んできてや」

「うん」

ふすまをあけた次郎は、あっと叫んだ。

あんなちゃんは、横になったまま顔色はまっ青で、肩で息をしていた。

「あんなちゃん、どうしたんや」

呼びかけても返事はなかった。

すぐに、病院に運んだ。

「急性肺炎です。こんなになるまで、よくがまんしていたもんや」

と、お医者さまは言った。

「いたいとか、つらいとか、いわない子やったのが、あだになっ
てしまっ」

かあちゃんは泣いた。

あんなちゃんの顔は、青いのをとおりこして土色になっていた。

「もう時間の問題です」

「薬はないんですか、薬は」

「もう、手おくれです」

病室に入りきれないほど集まってくれた青年団員が、それをきいて泣き出した。

みんなで、かわるがわるに、あんちゃんの手足をさすって呼びかけた。

「……ろ……う……」

「あんちゃん、なんや、なにが言いたいのや」

「じ……ろ……う……」

（おれの名前や。やっぱり、あんちゃんは、おれのあんちゃんや）

だが、その、じろ。うが、あんちゃんのさいごの言葉だった。

「……臨終です」

「いやああーっ」

悲鳴のような声をあげて、小夜子さんは、あんちゃんの足にすがりついた。

（小夜子さんは、あんちゃんが好きやったのか……）

「団長、死んだらあかん！」

山野さんが叫んだ。みんな泣いていた。

「あなたたち、この子のために泣いてくれるのやね。ありがとう。どんな偉いお坊さんにお経をあげてもらうより、この子は成仏できまますやろ」

かあちゃんは、そう言って泣いた。

葬式は観音寺でとりおこなわれた。

「逆縁（子どもが親より先に死ぬこと）になるから、親は火葬場まで行けんのや。次郎、頼むで」

「うん、かあちゃん」

山野さんが、柩をのせた荷車をひいて、次郎は後ろを押した。意外だったのは青年団のみんなが、サッと姿を消したことだった。

た。

（みんな冷たい。見送ってくれてもいいがに）

と、次郎は思った。

火葬場は、丘の中ほどにあった。

ゆるやかな坂道を、次郎は荷車を押して歩いた。

不思議と涙は流れなかった。

「次郎くん、これからどうする」

荷車をひきながら山野さんが尋ねた。

「うん、中学を卒業したら、すぐに働こうと思っていただけ、あんちゃんが、おれの名前で貯金してくれていたんで、工業高校を

受けてみようと思ってる」

「そうか、わしにできることがあったら、なんでも言うてくれや」

「ありがとう山野さん。おれ、工業高校へ行って、技術を身につけて、あんちゃんのように……」

「団長は組織づくりの名人やった。次郎くん、団長のこと、いつまでも誇りに思うとったらいい。立派で偉い人やった」

「うん…」

その立派で偉い人が、なんでこんな、さみしい野^の辺^べおくりなんやろうか……。

「あの時といっしょやな、山野さん」

「あの時？」

「あの福井へ行った時と、おんなじ三人や」

違うのは、あんちゃんが、もう死んでいるということだった。

火葬場についた。

「若い仏さんやなあ。ナムアミダブツ」

火葬場のおじいさんは、そう言って手を合わせてくれた。

「あんちゃん、おわかれや」

あんちゃんは眠っているような安らかな表情だった。

「次郎は柩のなかに、ハーモニカをいれた。」

「おれやと思うて、持っていってくれ」

ポウーッ。

火がはいった。

ジャジャーン。

シンバルの鳴る音がした。

次郎は火葬場の外に出た。

楽器を手にした青年団員が、せいぞろいしていた。

小夜子さんもいた。みんなのまんなかで、歌っていた。

(団歌や)

♪ああ勤勞の喜び胸に…

(みんな、楽器をとりに入れてくれたんか)

われら、まことの道をゆく

光はみてり、清らかに…

(あんちゃん、聞こえているか…)

次郎の頬を熱い涙が流れていった。

〈了〉



「組合ヘルパー日誌」

全国一般福井地方労働組合

桐原 則介

〈登場人物〉

中小労働組合連合会（中小労連）F地方本部

- ・水田俊夫（四十四歳）書記長・専従オルグ
 - ・吉沢真理子（五十歳）書記次長・専従書記
- あけぼの職員労働組合（中小労連加盟）

・西村慎司（三十二歳）委員長・デイサービス勤務（妻・由香里）

・佐々木健人（三十歳）副委員長・特養勤務

・平田恵子（四十歳）書記長・特養勤務

・渡辺清子（五十三歳）執行委員・特養勤務

・山村由美子（四十五歳）同

・長谷川奈美（二十九歳）同

社会福祉法人あけぼの敬愛会・介護施設経営

・吉村武史（六十五歳）理事長

・吉村和子（六十歳）副理事長・武史の妹

・南 吉次（五十九歳）デイサービス施設長

・竹田隆夫（五十五歳）事務長

序章

八月一日（月）。この日も最高気温三十五度を超える猛暑日。

午後八時を過ぎても、うだるような熱気が体にまとわりついてくる。会議を終えて、アパートの自室に戻った水田俊夫は、日中温められたムツとする空気にうんざりしながら、すばやくエアコンのスイッチを入れ、冷蔵庫から缶ビールを取り出した。一気に半

分以上それを飲み干すと、ホッと一息ついて、テレビをつける。

その時、水田のケータイが鳴った。それは、あけぼの職員労働組合委員長の西村慎司からだった。西村は、デイサービスで働く介護士で、三十二歳、勤続七年目。

「水田さん、夜分にすいません。ちょっとお聞きしたいことがありますまして」

そこで西村は、ひと呼吸おいて意を決したように続けた。

「水田さんには、これまで随分とウチの組合の事でお世話になりましたが、施設を退職することにしました。僕が辞めると組合の方に迷惑をおかけすることになると思いますが、すいません」

突然の話に驚いた水田は、慌てて左手でテレビのリモコンを握んでスイッチを切ると、ソファに座り直した。労働組合専従オルグの水田の所には、突然の相談が多い。そのため水田は、ケータイが鳴ると身構えるクセがついていた。しかし、この時は油断していた。

「もう疲れたんです。退職届を出せば、すぐに辞められるんですか？ 水田さんにそのことを聞きたくて、電話したんですが……」

「いや確か就業規則には、退職届は一月前に提出する、となっていたとは思いますが」

「じゃあ、まだ今月いっぱいには仕事にいかなきゃいけないんですか？ でも、もう仕事に行く気がしないんです。職場の人に迷惑をかけることは分かっているんですが……」

ここまで話をして西村は、急に黙ってしまった。水田は、どこまで事情を聴いていいものを迷いながら、言葉を選んだ。

「退職届は、もう上司に出してしまっただんですか？」とりあえず、それを確認する。

「まだです。明日、仕事に行った時に提出して、そのまま帰ろうと思っっています」

一旦、上司に退職届を出してしまうと、後で思い直して取り消そうと思っても、そう簡単ではない。それゆえ退職届を提出する前にストップをかけないと、後の祭りになってしまう。

「明日は何時から仕事ですか？」

「遅番なんで、十時からです」

まだチャンスはあると水田は思った。

「良かったら、その前に事情を聴かせてもらえませんか？」ちょっと考える間があった。

「でも、僕のために水田さんに時間を取らせたら迷惑じゃないですか？」

「西村さんの事が心配なので話を聴かせて下さい」水田は、強引に明日八時半から西村の職場近くの喫茶店で会う約束を取り付けた。

第一章 パワハラ

翌日、水田は、七時半に家を出た。空は曇っているものの、こ

の日も朝から蒸し暑かった。指定した喫茶店までは、車で二十分程で着くことが出来る。一時間も前に家を出たのは、喫茶店に行く前に組合事務所に立ち寄るためだ。そこで水田は、あけぼの労働関係のファイルを持ち出した。

分厚いファイルには、西村が勤める社会福祉法人あけぼの敬愛会の就業規則やあけぼの職員労働組合の組合規約、法人と組合が結んだ労働協約などが綴られている。水田の勤める中小労連F地方本部に加盟する労働組合の中で、あけぼの職員労組は、歴史が古い。その分、ファイルも分厚くなっている。

水田は、西村に何とか退職を思い止まるよう説得するつもりでいた。しかし、何分西村が退職したいと思いつめてい理由がまったく思い当たらない。ただ職場で余程の事があったに違いない、と水田は思った。分厚いファイルは必要ないかもしれないが、念のためにカバンに詰めた。

事務所を出て車を運転しながら、水田は、かつてF地方本部の顧問であった杉原から言われた言葉を思い出していた。

「水田君よ、専従オルグの仕事は、八割は組合員の話の聞くことだ。組合員から何か相談を受けた時も、最初から自分の判断を押し付けちゃダメだ。まずはじっくり話を聞いて、それからどうすればいいかを一緒に考えるように心掛けなさい」

長年、専従書記長を務めてきた杉原の言葉には説得力があった。五年前に専従オルグになった水田は、杉原から労働運動のイ

ロハと専従オルグの心構えを学んだ。水田は、昨年秋のF地方本部定期大会から書記長を務めているが、肩書が付いても場数を踏んでいないので、西村とどう話せばいいか不安になる。

午前八時二十分。約束の十分前に水田の運転する車は、指定の喫茶店に到着した。

レトロな内装の店内に入ると、すでに西村が隅の席で待っていた。俯き加減にテーブルに視線を落とされている西村は、水田が声を掛けるまで気が付かなかった。げっそりと疲れ切った西村の顔に彼の抱える苦悩の深さが見て取れた。

水田は、西村に声を掛け、席に着くと、近くにいた店員に急いでホットコーヒーを注文した。難しい話をする際には、気持ちを落ち着かせるためにコーヒーを注文するのが習慣になっていた。何から聞けば良いものかと水田が迷っていると、西村から先に口を開いた。

「わざわざ僕のために時間を取らせてすいません。朝起きると身体が重くて、とにかく職場に行くのがきついです。それで、いっそ仕事を辞めてしまおうと決めました」

「いつ頃から職場に行くのがきつかったですか？」

「今働いているデイサービスに異動になってからです。二か月前に特養（特別養護老人ホーム）から異動になったんですが、最初は普通に勤務していたんです。一か月ぐらい前からだんだん朝起きて家を出るのが辛くなって、車で職場まで四十分程かかるんで

すが、運転中も気が減入ってしまうんです」

「デイスタービスでの仕事がついいんですか？」

「そんなことも無いんですが。ただ毎日、朝から晩まで利用者の方の送迎をやっているんです。ワゴン車の運転に慣れていない上に、ちょっとしたミスでも上司からしつこく注意を受けるようになって。利用者から僕の運転が荒っぽくて嫌だ、と苦情があったとかで、やたらと上司がうるさいんです」

「どうして西村さんが毎日送迎係をやらされているんですか？」

「二か月前に、送迎係の嘱託職員が辞めてしまったらしくて、他に男手が少ないので新しい人を雇うまで僕に送迎係をやらせて言われたんです。送迎も大事な仕事ですから、それ自体が嫌な訳じゃないんですが、ただ……」

西村は、途中で言葉を切った。その先を話そうか、どうしようか迷っている様子だった。

「何かトラブルでもあったんですか？」

「いや、そんなんじゃないんです。一週間程前に施設長に呼ばれて、いきなり『施設の車にキズを付けたのに、どうして自分から報告しないんだ！』って、怒られたんです。それで始末書を書けと言われたんですが、僕が運転している時に何処かで擦った覚えはないので、そのまま書いて出しました。そしたら今度は、施設長だけじゃなくて副理事長まで出てきて、みんなの前で『自分のミスを他の人のせいにするな！』って、しつこく責められたん

です」

「それはひどい！ 西村さんは『そんな覚えはない』と報告しているのに、どうして嘘をついているみたいに決めつけるんですか」

「あの人たちは、最初から僕のことを信用していないんですよ。後で他の職員から聞いたんですが、施設長は毎朝、ワゴン車にキズが無いか入念に点検しているらしいんです。あの日、車の前方のパネルの所にキズがあるのを見つけて、前日の運行記録を確認したら、その日は僕以外に運転していないから、『キズを付けたのは西村に間違いはない』と、言っていたそうです。あの職場ではこれ以上、僕は仕事を続けられないです」

「そんなことがあったんですか。それなら仕事に行くのが嫌になるのも無理はない。でも、このまま職場を辞めてしまうのも、どうなんでしょうか。上司の人ともう一度話をしてみてもどうでしょうか」

水田は、そう言ってみたものの、西村の今の様子からして、もう一度話をするのは難しいだろうと分かっていた。

「もういいですよ。どうせ僕の言う事は、信じてもらえませんが。今週の金曜日に懲戒委員会を開いて、処分を決めるとか言っているそうです。それだったら、先に辞めてしまった方がすっきりしますから」

「でも、このまま施設を辞めたら、西村さんがミスを隠したとい

う事にされてしまいますよね。それは、くやくしくないですか？

西村さんが嘘をつくような人じゃないって事は、組合員ならみんな知っていますよ。そうだ、他の組合役員の人には、もうこの話を伝えましたか？」

「まだ誰にも伝えていません。退職届を出した後に、書記長の平田さんに連絡しようかと思っていましたんですが。委員長が突然、施設を辞めたら組合員に迷惑をかけますよね。副委員長の佐々木には、一度会って話をしなきゃいけないとは思っています。でも、今はちょっと話す気になれなくて。情けないですよ、委員長なのに」

西村は、言葉を詰まらせて、俯いて涙をこらえている様子だった。水田もかける言葉が見つからなかった。

しばらく沈黙が続いた。水田は、これ以上西村を引き留めるのは難しいかもしれない、と思いはじめていた。人一倍、責任感の強い西村は、三年前に組合の副委員長になってから、組合活動を先頭で引っ張ってきた。二年前に委員長が突然退職してしまったので、みんなが西村を委員長に推した。その時、西村が二つ後輩の佐々木を執行部に誘ったのだ。仕事を辞めてしまえば、任期の途中で委員長職も投げ出すことになることは、西村も充分にわかっている。突然、委員長に推されて、一番苦労してきたのが西村自身だった。組合員のみんなに申し訳ない、そんな思いが西村を余計に苦しめているように見えた。

「西村さん、他の役員には私から事情を話しておきますよ。おそらく組合のみんなは、また西村さんと一緒に仕事がしたい、と言うと思いますよ。一人で結論を出してしまわずに、今回は他の仲間に頼ってみたらどうでしょうか」暫く考えた後、西村は答えた。

「分かりました。みんなにまかせます」

西村との話を終え、水田は、組合事務所に連絡を入れた。組合事務所に戻った水田に対して、同じ事務所で働く書記の吉沢真理子が不安げな顔つきで「またあけぼの苑で問題でもあったの?」と、尋ねてきた。水田は、西村の様子を吉沢に伝えた。水田の話を聞きながら吉沢は、あらかじめセットしておいたコーヒーマーカ―のスイッチを入れ、マグカップにコーヒ―を注ぐと、水田に手渡した。水田は熱いコーヒ―を一口含むと続きを話した。険しい顔つきで聞いていた吉沢は、水田の話が終わると言った。

「それって、西村さんに対するパワハラじゃないの! 彼は組合委員長として頑張っていたから気に食わなかったんじゃない」

「ええ僕もそう思いますが、本人がもう職場を辞めたいと言っているの、法人に抗議するのは難しいという気がするんですが」

すると吉沢も押し黙った。しかし、明らかに不満げな様子で、「何とかならないの」と言いたげであった。水田もその思いは同じだ。ただうまい打開策が浮かばない。まだ諦めた訳ではない、

と言いつたように水田は、今後の対処を話した。

「とりあえず西村さんの有給休暇が残っている間は、それを消化してもらって、その間に他の組合役員に相談してみます」

しかし、吉沢はそれには答えず、別の事を言い出した。

「西村さんは、パワハラによってメンタル疾患になったんじゃないの？」

「メンタル疾患とは、うつ病とかですか？」

「そう、適応障害とか、いろいろあるけど。」

一度精神科の病院で診てもらった方がいいんじゃないかしら。そうすれば、診断書を取れるかもしれないから」

そう言われて水田は、疲れ切った様子の西村の表情を思い浮かべた。早速、西村に連絡を取り、精神科への通院を勧めてみた。

西村は、乗り気ではない様子だったが、西村の住む街にある心療内科を勧めてみると、「わかりました」と応じた。

夕方になって、西村から連絡が入った。吉沢の見立て通り「適応障害」という病名で「二か月の加療を要す」との診断が下された。その診断書を施設側に提出し、病気休暇を申請するよう西村に促した。これで当面は、欠勤扱いにならないで済む。しかし、その後の職場復帰の目途がついた訳ではない。何より西村本人が今の職場でもう一度働こうとしない限り、事態は何も変わらない。しかし、どうすれば西村がもう一度、今の職場で働こうと思えるようになるのか、水田には展望が見えなかった。

第二章 反撃開始

八月八日（月） その日もうだるような暑さが続いていた。夕方六時。特別養護老人ホームあけぼの苑近くのファミレスにあけぼの職員労組の役員たちが集合していた。少し遅れて到着した水田は、みんなが待っている席に案内された。書記長の平田恵子が心配そうな様子で話しかけてきた。

「西村さんが仕事を辞めたいというのは、どういう事ですか？何か病気なんですか？」

続けて執行委員の山村由美子も口を開いて、早口でしゃべり始めた。

「あの西村さんが病気なんて信じられない！ やっぱり今の賃金じゃ生活が苦しいとか、そういうのもあるんじゃない。今年の三月にも彼の同期の男性職員がそれで仕事を辞めちゃったしね」

テーブルの隅に座っていた気弱そうな副委員長の佐々木健人が反論する。

「西村さんは、そんな事で仕事を辞めるような人じゃない。牛島さんが施設を辞めたいと言った時も、組合で賃上げ交渉がんばるからって、引き留めていたぐらいですから。何か余程の事情があるんじゃないですか？」

役員の中では一番若い会計担当の長谷川奈美も心配そうに聞いてきた。彼女はケアマネージャーの仕事をしている。

「西村さんが懲戒委員会にかけられるって、本当ですか？ 何か利用者とトラブルでも起こしたんですか？」

最後に一番年上の執行委員、渡辺清子が今の長谷川の疑問を諫める。

「何言ってるの！ あの西村君に限ってそんな事ある訳ないでしょ。お年寄りに一番親身にかかわっているのが彼だよ。どうせ上の連中が現場の事情も知らずに何かミスをおぼえただけでしょ。この施設は昔からそうなの。現場の職員の話をちゃんと聞かずに、何かあるとすぐ現場の責任にするのよ」

ここで書記長の平田が水田に話を振ってくれた。「まずは水田さんから西村さんの現状について詳しく教えてもらいましょう」

ようやく出番が来た水田は、西村から聞いた話を丁寧に説明した。一通り水田が説明すると、水田の話が終わるのを待っていたように渡辺が口火を切った。

「だから言ったでしょ。西村君に限って自分のミスを隠すような人じゃないわよ。車のキズなんて誰がやったかわかんないじゃない。それに車に少しキズがついたからなんだっていうの。利用者がケガした訳でもないのに上の連中は騒ぎすぎなのよ」

書記長の平田がこれを引き取って話を続ける。

「確かにそれともうなんだけど、もし仮に西村さんが運転中にキ

ズをつけたとしても本人が気がつかないことだってある訳だし、それをミスをおぼえたとどうして決めつけるのかしら。そんなことで職員が処分されるのはおかしいと思う」と、水田に答えを求めてくる。

「西村さん本人が『自分は身に覚えがない』と、報告書を出している訳ですから、ミスを隠したというのはおかしいですよ。本来、懲戒委員会を開く場合には、当事者の職員が意見を言う機会が保障されていないとダメです。まして組合がある訳ですから、その委員会にも組合側代表を参加させて意見を聞く必要があります」

「そうですね。こんな一方的なことっておかしいですよ。でも、これでもしかすると西村さんが組合の委員長だから目を付けられて、上の人が必要以上に騒いでいるという面もあるんじゃないかしら」

山村もこれに賛同する。

「私もそう思う。あの副理事長って、理事長の妹さんなんですよ。」

あそこのデイサービスの隣の有料老人ホームをまかされているみたいなんだけど、どうも組合を目的にしているみたいなの。あっちの施設には誰も組合員がいないでしょ。以前向こうのデイサービスから異動になってきた職員に聞いたたら、『組合に入るような人は、ウチの施設にはいらんない』なんて言っていたらしいわよ」

「経営者のそうした発言は、不当労働行為と言って、労働組合法で禁じられている行為です。簡単に言うとうと、組合活動への妨害に

当ります」と、水田が補足する。

これを聞いて渡辺がわが意を得たりという感じで発言する。

「だいたい何で六月に突然、西村君を向こうのデイサービスに異動させたの。特養の方だって夜勤が出来る人が少なくなくて大変だったんだから。西村君が今年の春闘で頑張って交渉したから、組合員のいない向こうの施設に異動させたんじゃないの」

「西村さんもデイサービスに異動になると夜勤手当が三万円近く減るから困ってました。でも、『人事異動には逆らえないし、向こうの施設でも組合員を勧誘するチャンスだ』と言って異動に応じたんです。こんなことになるなら、あの時僕が『異動を断ってくれ』って言えば良かったスね」と、佐々木が肩を落とす。

しっかり者の平田が佐々木に言う。

「諦めるのは、まだ早いわよ。西村さんをもう一度、特養に戻すように組合として交渉出来ないかしら。清子さんが言うように異動自体が組合活動の妨害のためなら、改めて抗議するという手もあるわよね。特養だったら、西村さんも仕事に復帰できると思うの」

「西村さんには仕事に復帰してもらわないと困りますよ。第一、僕に次の委員長なんて無理ですよ。でも、あの理事長がウンと言いますかね。人事異動って、あの理事長が全部決めているんですよね」

「何言ってるの！ あんなタヌキおやじにビビってどうすんの。」

組合を作ったばかりの頃は、あのタヌキをみんなで吊るしあげてたんだから。最初の頃なんて、あのタヌキが自分の身内や縁故者だけ賃上げしたから、散々文句言ってやったんだ。そうしたら、あのタヌキは、その後団体交渉に一切出なくなつて、代わりに銀行からの天下りの事務長に交渉を全部やらせるようになったんだよ。久しぶりに理事長室にみんなで押しかけるかい」

これを聞いて水田が提案する。

「そうですね、いきなり押しかけても拒否される恐れも強いですが、団体交渉の申入れ書を法人宛てに提出し、その中で今回は人事権がある理事長の出席を求めたらどうでしょうか」

「その方がいいかもしれませんね。予め私たちの要望を向こうに伝えられるので。でも、清子さんが言うように私たちの気持ちを直に理事長に伝える必要もあると思うの。何かいい方法がないかしら」

その平田の提案に山村が答える。

「だったら、血判状を作ったらいんじゃない。時代劇とかでよくあるじゃない。自分の名前を書いて、その下に拇印を押すヤツ」「イヤイヤ、一体いつの時代のことなんですか。そんなんじゃない、みんなやってくんないでしょ」と、佐々木が否定する。

「それいいかもしれない。拇印まで押さなくても署名でもいいですよ。それならみんな書いてくれると思うわ」と、平田がまとめる。

「あのー、その署名って、組合員以外の職員にも書いてもらって

もいいですか？」と、長谷川が尋ねる。水田が答える。

「いいと思いますが、組合員以外の人は、理事長の顔色を気にして書いてくれますか？」

「大丈夫よ、私がみんなに書かせるから。西村君は、組合員以外の人にも信頼されているから『西村君を助けるためだ』と言えば、みんな書いてくれるよ」と、渡辺が言う。

「理事長に睨まれるのも嫌だけど、渡辺さんも恐いからね」と、山村が混ぜっ返す。

ここで平田が改まって言った。

「でも、問題は西村さんが元気になるかどうかよね。自分がウソを付いていると決めつけられて相当に傷ついてしまったんでしょから、すぐに立ち直れるかしら」

「そんなの簡単よ、タヌキの妹にちゃんと謝罪させればいいのよ」と、渡辺が言う。

「でも、あの人は性格が悪いからそんな簡単には、謝らないと思うよ」と、山村が心配そうに言った。

水田もその点気がかりだった。せめて西村の濡れ衣をはらすことが出来れば西村の気持ちも少しは晴れると思うが、キズを付けた真犯人を見つけることはそう容易ではない。会議が終って、別れ際に、山村が「あの車のキズって、悪戯されたんじゃない。

前にもそんな事があったみたいだから」と、言ってきた。これだけでは、雲を掴むような話だが、何か手掛かりを掴めないか、と

水田は思った。

翌日、午前七時。水田は、西村の勤めるデイサービスに来ていた。送迎車のキズの様子を確かめたかったからだ。車の周りを確認したが、大きくキズついた箇所は見当たらなかった。すでに修理済みかと諦めかけたが、西村の言っていた左前方のパンパーをよく見てみると何本かの薄いキズがついていた。何かを擦った後のようにも見える。水田は、この程度のキズで西村を責めたてた上司に怒りがこみ上げた。

第三章

八月十九日（金）お盆を過ぎて朝晩は多少過ごしやすくなっていた。とはいえ、日中は三十度を超す夏日が続いている。この日、水田は、西村の自宅を訪ねることになっていた。

社会福祉法人あけぼの敬愛会は、職員が百五十名程だが、そのうち組合員は三十名しかいない。以前は五十名を超えていたが、近年、組合員数が減少している。元々は全職員数が六十名程だったが、五年前に特養を国道沿いに移転して以降、入所者が一挙に増えたことから職員もパートを中心に倍以上に増えた。それによって、組合員数は職員の過半数を大きく割り込んでしまった。それにより法人側の組合への風当たりも年々強まり、特に近年は、その横暴ぶりが目立っている。組合の影響力が低下するの

に伴って、残業代の未払いや年次有給休暇の取得制限など労働者の権利も侵害されていた。それもあって、毎年多くの職員を採用しても離職者が後を絶たず、慢性的な人員不足が続いていた。

西村が副委員長となった三年前からは、こうした問題を組合として春闘交渉で取り上げ、多少は改善させてきた。そうしたこともあって、西村は組合員はもろんのこと、組合に入っていないパートなどの職員からも信頼されていた。今回の件で組合役員が西村を特養に戻すよう求める署名を呼び掛けると、思っていた以上に職員への反応が良く、簡単に署名をしてくれたらしい。それもあって、署名はお盆前に既に百名を超えたらしい。

こうした多くの職員の思いを水田は西村に伝えねばならない。しかし、強く復職を促せば、彼に精神的負担をさらにかける恐れがある。おそらく西村は、今も委員長としての職責を全う出来なかった無念さを強く抱えているだろう。水田は、どのように西村と話をすればよいか迷っていた。

西村の自宅は、組合事務所のある県庁所在地から車で四十分程度離れた隣の市にある。トンネルをいくつか通り過ぎた先に小さな盆地が開けてくる。周りを田んぼに囲まれた農村地帯の道を進むと、橋の手前に西村の自宅があった。

午後三時前に水田の車が西村の自宅に到着すると、玄関の前でTシャツ・短パン姿の西村が待っていた。

「こんな遠くまでわざわざ来てもらってすいません。」と、西村

が声をかけてきた。この前会った時と比べると表情がだいぶ柔らかい見える。

「部屋の方は、子供がいて騒がしいので、食堂でもいいですか？」と言って、水田は食堂に通された。「ウチの嫁です」と、妻の由香里を紹介され、簡単な挨拶を交わして食堂のテーブルに着いた。由香里は、二人目の子を妊娠中で産休に入っているらしい。

水田が西村に体調を尋ねた。

「最近は何も寝れるようになって、身体もだいぶ楽になりました。でも、医者からももらった薬のせいもあるんでしょうが、昼間からボーとして眠くなることも多いですね」

水田は、職場の執行委員会の話になった事を西村に伝えた。すると西村は、表情を硬くして答えた。

「みんながそこまで僕のためにやってくれているのに、実はみんなの期待に応えられそうにないんですが……」

「いや、すぐに復職してほしい、と言っている訳ではないんです。今月下旬に法人側に団体交渉を申し入れようと思うんですが、その前に西村さんの気持ちを確認しておきたいと思って来たんです」

「特養に戻ってみんなと一緒に仕事が出来るとは職場に行けるとは思いますが……。でも、そんなに簡単に理事長がウンとは言わないでしょう。あの件も未だに僕が犯人だと思っているんです。それからもう次の仕事を探しはじめています。知人から

精神科の病院で働いてみないか、と誘われているんです。給料もまあまあいいみたいなので」

「そうだったんですか……」水田はそれ以上、言葉が出なかった。水田の落胆する様子を見て、西村も「わざわざ来てもらったのに、すいません」と、小さく言って俯いた。

見兼ねた妻の由香里が口を出した。

「あのー、慎ちゃんに、いや主人に転職を勧めたのは私なんです。給料のことがあるからじゃないですよ。慎ちゃんは、会社の上の方から睨まれているんですよ。だから今回みたいな嫌がらせを受けるって、言っていたから、それだったら例え特養に戻れても、またタケちゃんマンにいじめられるんじゃないかと思って、心配なんです」

「タケちゃんマンというのは？」水田が訊こうとすると、西村が恥ずかしそうに「理事長のことです」と答えた。

「ウチでは、慎ちゃんがそう呼んでいるんです。『タケちゃんマンと編みだババアから嫌がらせされているんだ』って。慎ちゃんは、組合の仲間が今頑張ってくれているから、勝手に辞める訳にはいかないって、言うんですが。でも、私からするとこれ以上ストレスがかかる職場で働くよりも、いっそ別の施設に移った方が慎ちゃんの気持ちに楽になるんじゃないかと思うんです。それに復職すれば、組合の委員長も続けることになるですよ。私も労働組合が大切だということは、慎ちゃんの話聞いて思うんで

すよ。でも、特養で働いている時だって、仕事の方でも夜勤や残業で大変なのに、何も慎ちゃんが委員長をやらなくてもいいんじゃないかって思っていたんです。これ以上何でも言うのと、後で慎ちゃんに怒られそうなので止めておきますが」そこまで一気にしゃべり続けた由香里は、水田の反応を確かめるように視線を向けてきた。

水田は、由香里の夫を心配する気持ちも痛いほど良く分かった。どう答えていいものか頭がまともにならないまま水田は、話しはじめた。

「西村さんには仕事が大変な中でも組合の活動も本当に頑張っやしてもらいました」

「残業明けても慎ちゃんは、お昼頃しか家に戻って来ないんですよ。帰ってくるといつもフラフラで、いつか交通事故を起こすんじゃないか気がぎじゃありません。先月も仕事の帰りに信号無視しちゃった、と言うから」

「お前は余計なことを言わなくていいよ！ 特養の方は、パートの人を含めてみんな大変なんだから、俺一人が大変なんじゃないよ」西村がそう言って、由香里を諷める。

「確かに西村さんには、仕事が大変な上に組合の方でも頑張ってもらってきたから余計に大変だったと思います。それで施設の上の人に睨まれているのも確かな事ですが、その分、組合員のみんなは、いや組合員だけじゃなくてパートの人からも信頼されてい

る。だから今回の署名だって、すぐに集まったんです」

「慎ちゃんは、職場の人には頼りにされているんだ。家では頼りないパパなのね」

「何だよそれ！」

「だって、保育園に迎えに行く時間をいつも間違えるじゃない！」

西村のムクれる様子を見て、由香里がクスッと笑う。由香里が突然、何かを思い出したように立ち上がった。

「あら嫌だ。水田さんに飲み物出すのを忘れていたわ。冷たいお茶がいいですか、それともコーヒーでも？」

「いえ、そんなに気を使わないで下さい。」と水田は答えながらも、いつもの調子で「じゃあ、ホットコーヒーをもらえますか」と続けた。「夏でもホットコーヒーなんですわね、水田さんは」そう言いながら、由香里は戸棚に向かうが、「あれ、コーヒー豆切れている」と声を上げた。由香里が大きなお腹をさすりながら、バツが悪そうに西村に視線を送る。

「だからちゃんと用意しとけて言っただろ！ 仕方がない。すぐそこに売ってるから俺が買って来るよ。水田さん、すみませんね」そう言って西村は、あわてて玄関を出て行った。

「気を使わせてすみません。コーヒーじゃなくてお茶でも良かったんですが」と水田が詫びると、由香里は、落ち着いた様子で言った。

「いえ、いいんです。丁度良かった。さっき慎ちゃんは、精神科病院に誘われている、と言っていました。本当はその話はもう断ったみたいなんです。以前一緒に働いていた牛島さんから誘われたけど、その場で断ったんです。」

「そうだったんですか。じゃあ西村さんは何であんなことを言ったんですか？」

「多分、これ以上、仲間に迷惑を掛けたくないと思っているんですよ。一週間ぐらい前に佐々木さんから連絡があって、慎ちゃんのためにみんなで署名を集めているという話を聞いて、慎ちゃんすごく喜んでいました。『特養に戻れるなら、また仲間と一緒に仕事ができる』って。『組合の仲間はみんないい奴なんだ』ってというのが、慎ちゃんの口癖ですから。でも、先日、また佐々木さんから連絡があって、署名を仕事中に集めていたら、上司に見つかって事務長に呼び出されて怒られたらしいんです。それを聞いて慎ちゃんは、『自分のために他の仲間にこれ以上迷惑をかけるれない』って、言いだしたんです」

「そんな事があったんですか。そういえば書記長の平田さんから私に報告があったのは、『ちょっとトラブルもありましたが、大丈夫です。署名は百名を超えましたから』という内容でした。おそらく平田さんがうまく収めたんだと思います」

「それなら良かった。慎ちゃんは、本当は今でも組合の仲間と一緒に仕事したいんです。私は心配ですけどね」

そこへ丁度西村がコーヒー豆を買って戻って来た。由香里は、それを受け取ると慌ててお湯を沸かしてコーヒーを淹れてくれた。コーヒーを飲みながら水田は、平田から聞いた職場の状況を改めて西村に伝えた。最後に水田は言った。

「今回の西村さんに対するバワハラは、明らかに組合つぶしを狙ったものだと思います。今後とも西村さん以外の役員にも繰り返しされるかもしれません。だからこそ、組合としては、こうした嫌がらせに対して組合員みんなて反対する姿勢を法人側に示す必要があるんです。これは、西村さんだけの問題じゃなくて、組合を守るために必要な取り組みなんです。次の団体交渉で何とか決着を付けますから、西村さんもみんなの事を信じて下さい」

西村は、「お願いします」と言って、深々と頭を下げた。話が終ると、由香里が「家の畑で採れた物でお口に合うかどうかかわかりませんが、どうぞ」と言って、ビニール袋にきゅうりやナスをいっぱい詰めて水田に持たせてくれた。

西村の家を出ると、西の空が赤く染まり始めているのが見えた。

第四章 団体交渉

八月二十六日（金） 台風の接近により、空は荒れ模様となった。夕方からの団体交渉に向けて水田は、組合事務所準備を行

っていた。団体交渉での追及ポイントをレジュメにすると共に、西村がデイサービスに異動になって以降の出来事を日付順にまとめた。

二十二日に団体交渉の申入れ書を法人側に提出したのだが、その際に書記長の平田が署名を事務長に見せると、事務長はその数の多さに慌てた様子だった。署名用紙をめくって食いいいように眺めはじめた事務長に対して平田は、「ちゃんと理事長に渡して下さい」と、念を押して戻って来た。これは法人側に対する先制パンチとなった。結局、この日の団体交渉に理事長は出席できない、と事務長より連絡があったが、向こうの慌てぶりは明らかであった。

水田は、団体交渉の資料を作り終えると、コーヒーを飲んで夕方の方の交渉に向けて気持ちを落ち着かせようとした。その時、水田のケータイに山村からメールが来た。「例の件で犯人が分かったから写真を送るので見て下さい」というものだった。しかし、写真は添付されていなかった。しかも、山村に連絡を取ろうとしても、ケータイが繋がらない。水田は諦めて、交渉の会場に向かった。

夕方六時半。あけぼの苑の会議室で団体交渉が始まった。法人側は、竹田事務長と南施設長。組合側は、副委員長の佐々木、書記長の平田、執行委員の渡辺と長谷川、そして、水田の五名。山

村は前日が夜勤だったので、参加出来なかった。

冒頭、水田が今回、団体交渉を申し入れた主旨を改めて説明し、組合側の要求は、「法人側の西村委員長に対するパワハラを謝罪し、西村委員長を特養に戻す事です」と告げた。

これに対して、竹田事務長があらかじめ用意していたと思われる返答を行った。

「車の件については、こちらで調査したところ、西村さんが運転中に付けたキズだ、とまでは断定できませんでしたので、西村さんが報告を怠ったとは言えないという結論になりました」

「だったら、西村さんにちゃんとそのことを伝えて、疑ってかかったことを謝罪すべきじゃないですか！」佐々木が抗議した。

「ですから、それは西村さんが急に休職されたので復職した時点で説明します」

「それは、おかしいでしょう！施設長と副理事長が西村さんを嘘つき呼ばわりしたから西村さんは仕事に出来なくなっただけです。その点を謝罪すべきです。施設長はどうなんですか！」平田が鋭く突っ込んだ。

みんなの視線が南施設長に集中する。

「私の判断が拙速だったことは認めます。それで西村君が傷ついた、というなら謝りますが、西村君の方の説明も曖昧だったので……」

「施設長は、最初から西村君がキズを付けたと決めつけたんじゃないの！」西村君に謝るつもりがあるのか、無いのかははっきりさせなさいよ！ウチの施設では職員のことを真面目に聴いたことなんか無いじゃない！」渡辺がすごい剣幕で怒鳴りつけた。

「いいですか、施設長。今回、西村さんの件で私たちは署名を集めました、百名を超える職員の人が署名をしてくれました。これは、西村さんが自分のミスを隠すような人じゃない、とみんな分かっているからです。西村さんの事を最初から疑ってかかるのは、上の方達だけです。西村さんが組合委員長として頑張ってきたから、こんな仕打ちをしたんじゃないんですか！」平田が言った。

凶星を付かれたと見えて、施設長は何もしゃべらなくなった。慌てて事務長がフォローする。

「いやいや平田さん、そういう事では無いですよ。私たちだって、西村さんは真面目な人だと思っっていますよ、仕事の面では。理事長もこんな事になって残念だと思っっています。ですから、西村さんの復職に向けては法人として責任をもってサポートするつもりです」

「事務長、サポートするとおっしゃいましたが、今回の件は、パワハラによって精神疾患になり、休職しているわけですから、労働災害ですよ。その点は、法人側の責任を認めるんですね」水田が釘を差した。

「大きな意味では法人の責任とも言えるかもしれませんが、病氣

の原因までは私達の方では特定出来ませんので。もちろん、西村さんは、わが法人にとって立派な戦力ですから、休職期間中の給料は全額補償するつもりです。もちろん本人に復職の意志があればの話ですが」

「そんな話じゃ無いですよ。まずは施設長と副理事長が西村さんに謝罪すべきです」佐々木が語気を強めた。

「副理事長は、関係ない。今回の件は、私の判断で行った事だから、謝罪するなら私が西村君に頭を下げる。それでいいだろう」明らかに南は、副理事長をかばいだてしようというつもりだ。

「西村さんにやってもいけない事で始末書を書かせようとしたんですから、西村さんに文書で謝罪文をちゃんと出して下さい」平田が南を睨みつけた。南は、事務長の顔をチラッと見ながら、「私の名前で良ければ、謝罪文を提出する。約束する」と答えた。

これを聞いて平田が事務長の方を向いて問うた。

「それで西村さんをすぐに特養に戻してくれるんですか？」

「その件についても理事長と相談をしましたが、十月の人事異動の際に考慮する、ということでしょうか？」

「考慮するって、どういう事なの」渡辺が突っ込む。

「みなさんにも既に伝えてありますが、当法人では、特養の隣に十月から『あけぼのデイサービス』をオープンします。職員募集をかけているのですが、まだ職員の数が足りていません。各部署の職員からそこに異動してもらおうと思っていますが、その人選

の際に西村さんには向こうのデイサービスから異動していただくことも視野に入れているということです。もちろん本人に復職の意志があれば、ですが」

「何で 特養に戻さないんですか？ 特養の方は今でも人手不足で夜勤が回らないんです」佐々木が必死に訴える。

「いや、西村さんの体調も考慮して、いきなり夜勤のある部署は負担になるだろうと思ひまして、新しいデイサービスのうかとうかと考えました。それと半年も経たずに元の部署に異動させるという前例もないので」

「そんなことを言っていて、また西村君に一日中、運転手をやらせるつもりじゃないだろうね」渡辺がいぶかるように言った。

「その点は心配無用です。新しいデイサービスの運転手は、すでに目途が付いています」

「分かりました。今の件は西村さんこちらから話をしてみて、本人の希望を確かめて返事をします」水田が答えて交渉は終わった。

団体交渉終了後、組合役員たちは、職員休憩室で感想を出し合った。最初に口を開いたのは、若い長谷川だった。

「ああ、良かった。組合の方で西村さんをこっちの職場に戻せるなんて思ってたんですよ。やっぱり署名が効果あったんですか？」

「僕もビックリですよ。施設長から謝罪文が取れるとは思ってな

かったです。あの時の施設長の顔、西村さんにも見せてやりたかったです。きっと西村さんもスッキリしますよ。でも、どうして簡単に自分の非を認めたんでしょうかね」佐々木が尋ねた。

「どうせビビったのよ。これ以上、騒ぎが大きくなると、自分の責任が問われると思っただんじやない」渡辺が決めつける。

「確かに向こうは、最初から逃げ腰だったわよね。西村さんの異動の件もあの理事長がよく簡単に認めたわよね」平田もホッとした表情を見せた。すると長谷川が思い出した。

「そう言えば、何日か前に事務長が顧問弁護士さんと連絡を取っていたみたいですよ」

「そうか、それなら多分、西村さんの診断書も提出しているから、これで訴えられたらどうなるかを相談したんでしょうね。最近では、労働基準監督署もパワハラ防止を呼び掛けていますからね」水田が説明する。

そんな話をしている最中に平田のケータイに山村から連絡が入った。

「交渉はもう終わった？ どうだったの？」平田が説明すると、

「良かったわ。私の送った写真も役に立ったでしょ。夜勤明けの帰る途中でデイサービスの前を通ったら、たまたまあの子を見かけたのよ。自転車の前輪のカバーが歪んでいるんで、『どうしたの？』って聞いてみたら、『先月、おばあちゃんに会いに行こうとしたら、あそこの車に擦ったんだ』だって。驚いたでしょ、あ

の名前を見て。エッ！ 写真が添付されてなかったの。『吉村雄斗』って、書いてあったのよ。副理事長の孫よ！ しかも、『おばあちゃんにもこの間、同じことを聞かれた』って言うのよ。嫌になるでしょ」

終章

九月三十日(金) その日は、秋のさわやかな風が吹いていた。

夕方六時、西村の住む街の居酒屋。水田は、西村とその妻・由香里と座敷席に座り、ビールで杯をあげた。

「水田さんには本当にお世話になりました。何とお礼を言ったらいいのか」

「身体の方は、もう大丈夫なんですね？」

「もうすっかり元気ですよ。来週からは職場に復帰します。佐々木も異動で同じデイサービスです」

「それは良かった。ところで、施設長から謝罪文は届きましたか？」

「ええ。来なくていいって言ったのに、ウチの家まで手紙を持って来て、お見舞いだとか言ってお金まで渡そうとするから、つき返してやりましたよ」

「もらっとけば良かったのに、慎ちゃんたら。治療費のつもりだったんでしょ」

「あんな金を受け取れるか。それより施設長の事を聞いてますか。まだ定年まで一年もあるのに十月で退職するらしいですよ」

「今回の件で理事長に責任を取らされたんでしょね」

「そう言えば、水田さんに聞きたかったんですが、政府が『介護離職ゼロ』とか言っていますが、僕らの職場が良くなるんですか？」

「いや、そんな事はないと思いますよ。政府は介護報酬の改定では、特養の報酬を下げてますからね」

「やっぱり、そうですね。ほら俺が言った通りだろ」

「でも『介護離職ゼロ』って、介護士の離職を無くさないとならないでしょ」

「そのためには、もっと介護職場の労働組合が頑張らないとダメなんだ」

「やっぱり結論はそこか。結局、慎ちゃんは、職場の仲間が好きなんだよね。私としては、ほどほどにしておいて欲しいけどね」

「あっそうだ、次の定期大会で委員長を佐々木に代わってもらおうつもりですが」

「今回の件で佐々木さんも頑張ったから、引き受けてくれると思いますよ」

「そう言えば、水田さんは、どこの会社にお勤めなんですか？」
由香里が訊いた。

「前の会社は辞めて、今の労働組合に専従オルグとして勤めています」

「そうです。組合運動が私の仕事です」

「センジュウオルグって、何ですか？」

「だから、俺たちみたいな職場の組合員の手助けをする仕事だよ」

「組合を手助けするヘルパーみたいなもの？」

「そうです。いわば『組合ヘルパー』ですね」

水田は、この言葉が妙に入った。

(了)



「私の父」

父は旧制中を終え、それから兵役を終え、そして単身で旧満州に渡り、南満州鉄道株式会社に入り先ずは一兵卒の釜焚きから始めてその試験に合格した場合は、機関助手に推薦され、その機関助手の仕事がうまく熟せる様になればよいよ最終段階の機関士の受験資格が得られ、その試験に合格すれば憧れの機関車を動かす事が出来るのだけれど、そこに至る迄にはまだまだ色々な法律にまつわる問題や又、機関車を動かす運転技術（テクニク）等をマスターしなければならず道程は遠く大変な試練が待ち受けているそうである。私の父はそれ等を全て皆一回でクリアしたそうである。だから父の事を一言で言い表わすならば父は兎に角、努力家であると言う事、努力の塊の様人だったと言う事である。

宮崎・都城市職（家族）

道添美枝

これは自他共に認める所である。出世を望むなら鉄道に関連する法規やその他諸々の本を読んで勉強し、交通関係全般のみならず、あらゆる事を学び受検し合格すると同時に昇給昇格し、となると当然他の者より早く上層部に顔や名前を覚えられ、主任から助役そして区長と、とんとん拍子かどうか私（筆者）は分からないけれど他の者よりは早く出世した方じゃないかなと思う。そして今度、中間管理職になった暁には、今度は自分の上司や自分の部下からも信頼され、それが最終的には父にとって良くない方向に行ってしまうのだけれど、父は人望が厚く、くそ真面目で責任感が強く、一方家庭にあっては愛妻家であり、とても子煩悩な父親であった。その父が一時期満鉄教習所の教官をしていた事がある。それは日本で言う国有鉄道旧国鉄教習所の満州版と言う事

である。満鉄と言う会社は半民半官の会社で地理的に言つて色んな国と隣接している事もあって色んな国の国民が教習所に入つて来た。その中でも特にロシア系の国からの教習生が多く、そこで父は彼等に良く理解をしてもらう為にも出来るだけ、その国の言葉で教えるのが一番と言う事でロシア語を独学で勉強し始めた。と言つても今から何十年も前からNHKの外国語講座なんか無かつた筈だから恐らく参考書を見ながらの勉強だつたと思う。

父は機関車を動かすその技術(テクニク)それに付随する色々な法律等をマスターし業界用語専門用語を交じ得て教習生に教えたと思う。毎朝八時三〇分頃父の専用の馬車(中国語でマーチヨ)が我家に迎えに来て、父はそれに乗つて教習所に出勤し、夕方は又それに乗つて帰宅する毎日だつた。今で言へばさしずめ運転手付きの公用車みたいなものだと思う。その後父は転勤になり、今度の職場は齊齊哈爾(チチハル)総局ノンジャン機関区緑神分区長と言う肩書きの管理職である。その頃から父は持病の神経痛(足)が悪化してこのまま仕事を続けるのはもう限界だと思ひ会社に辞表を提出したのだけど受理されず、止むを得ず管理職の仕事を続行していたが、やはりどうしても無理だと判断し、再びもう一度会社に辞表を提出したのだけど、これも又認めてもらえず、結局の所二度共、父の希望は叶えられなかつた。余りの痛さに一大決心をし、会社を辞めて内地(故郷)に帰り暖かい宮崎で温泉にでもゆっくり浸かりながら気長に治療をしようと思つて二度も提出したのに

何故なのか。その時父は満鉄の幹部職員だつたので、どうもそういう事が影響している様に思えてならない。現在に於いては信じられない話である。国が違えば法律まで変わるの当たり前前かも知れないが、何とも不合理な話である。以上許可が下りないまま父は自分の仕事を黙々と熟す日々が続いていた矢先突然に日本国が敗けて終戦になつたと言うニュースがとび込んで来た。今思えば私は、二度も辞表を提出したにも拘わらず認めてもらえなかつた事を恨めしく思い、若しあの時父の申し出をすんなり許可してくれておればその後の父の人生も又変わつていたであろうと思うと父が不憫でならない。そして父の在任中に終戦になつた為には又新たに大変な難問を抱え込む事になつたのである。それは、70数名の自分の部下を家族の元に無事に帰してやらねばと言う難問である。と言うのは父を含めて70数名のその部下の殆どは家族の元を離れて単身赴任で会社の独身寮に寝泊まりし、生活しながら職場で働いていた。無論父もそうである。その部下を家族の元に無事帰してやるには、交通手段が全く何もない。我々敗戦国民は終戦と同時に当時のソ連兵が即、進駐して来て、全てを占領し、全てを没収され全てを失つた。因みに肝心要の機関車を初めとして貨物列車や機関車庫、それに事務所棟や工場棟等今まで自分達が働いていた職場なのにある日突然敗戦国になつた為、ソ連軍に乗っ取られそれは手足をもぎ取られた蛙の如く全然動きが取れない状態になつた。それはソ連軍が進入して来てからの事

である。その職場の最高責任者である父は途方にくれ、本部からの指示を待っていたが70数名の社員も無事家族の元に帰れるか否か不安と心配でいてもたってもいられなかった筈だと思う。そこで父は一大決心をし、全社員を集めて言った。私は思いきってこれからソ連軍の責任者に会って相談してみる。機関車と貨車一輛を貸してくれないだろうか？全社員が無事家族の元に帰れたら、又ここに機関車と貨車一輛を持って来てお返しをするので、それ迄私はここに人質として残っているのだからどうか貸して下さい、と頼んでみる。若し私が何時間たっても戻って来ない時は、その時は運悪くソ連兵に捕えられたものと思つて、誰か勇氣ある者が二番手として私の後に続き交渉に来る様に、若しそれがダメだったら次、三番手と……兎に角諦めるんじゃない、諦めからは何も生まれない、希望を持つて頑張るんだ。父はそう言つて一人で線路伝いに元の我々が働いてた会社に向つて歩いて行つた。交通手段は全部没収されて何も無い為に。その時父は、敗戦国民の一人として捕まる事を覚悟の上でソ連兵の責任者の元へ一人で乗り込んで行つた。兎に角自分の部下を無事家族の元へ帰してやらねばと言う責任が重くのしかかり、必死でソ連兵の幹部と向き合つたと思う。そうこうする内、父は曾ての会社に着き受付の兵士に責任者との面会を依頼すると奥の部屋から出て来られた方に挨拶を交わし自分がここに来た訳を日本語とロシア語を交えて話し機関車と貨車一輛を貸してほしい旨告げるとその責任者は、その

必要はありませんよ貴方も皆さんと一緒に家族の元にお帰りなさい機関車と貨車、それに列車を動かす機関士も付けてお貸ししますから今直ぐ寮に戻つて知らせて上げなさい、屹度喜びますよとそう言う言葉を聞かされた時、父は涙が出る程嬉しかったそうである。敵や味方等関係なく、貴方が寮に戻る時は途中暴漢等に襲われない様にちゃんと護衛兵を付けてあげますから安心してお帰りなさいと言つて父の前後左右に一人ずつ計四名の武装兵士を付けて父を寮迄送つてくれたそうである。父が教習所生を指導する為に独学でロシア語を勉強していた事が思わん所で役に立つた事の喜びは国が違つても人には親切にしておれば巡り巡つてやがてそれは自分に戻つて来るもんだよと父から教えられた時、その父の話に私は感銘を受けた。やがて数時間が経ち半ば諦めかけていた社員達は父の足音が線路伝いにだんだん近づいて来るのが聞こえた瞬間、部屋の中から拍手が聞こえただけ窓から外を見た処、ソ連兵が四名程見えたので副父はソ連兵に捕らえられたのだと思ひ込んだ所があるが、それは違う。父を取り囲んでいる様に見えるのはこの兵士達は父がこの寮の戻る途中暴漢に襲われない様にと私（父）を護衛して来てくれたのだと分かると安心して再び拍手が湧き起り、そして父からの吉報を聞かされると社員達はお互いに抱き合つて喜んだ。中には涙ぐむ社員も居た。処で陛下の玉音放送が流れた時はもうソ連兵は満州の通化と言う所に進入して来て客車の窓から外の景色を見る様にこつちを伺い見てる感じ

で私（筆者）は子供で（小学5年生位？）で良く解らないけどソ連兵の乗った車輛が何輛も何輛も入って来るのを目撃し恐ろしくなって外に居たけど急いで家の中に駆け込んだ記憶がある。ソ連兵は進入して来ると同時に今迄父や父の部下が働いていた機関車庫や工場棟そして事務所棟は即ソ連の物となり明け渡さざるを得なかった。そして交渉の為事務所棟に行つて感じた事、それは今の今迄自分達の職場として使つていたこれ等の施設がアツと言う間にソ連軍に乗っ取られこれが戦争に負けた国民の悲哀と言うものかと思つたそうである。父にしてみたら勝手知れたる他人の我が家と言う訳である。父は神経痛の為二度も会社に辞表を提出したが受理されずさうさうする内、終戦に巻き込まれ余分な心労を味わう事になり運命と言えはそれまでだが、それでも何とか無事全社員を家族の元に帰してやる事が出来、ノンジャン機関区緑神分区の区長としての責任を果たし終えた父は、やれやれと思つた事だろう。父を護衛して寮まで送つてくれたソ連の兵士、そして交渉の末、我々の意向を汲み取つて機関士付きの機関車と貨車を快く貸してくれ、それに私に護衛兵まで付けて私達（父）の居る寮まで送ってくれると言う温情みある行為に、父は何度も有難う御座居ました。スパシーバ、スパシーバ、スパシーバと頭を下げてお礼を言つて二度と会う事も無いソ連兵やその責任者に別れを告げた。後日、父の部下だった皆さんが無事家族の元に戻つたある日一通の封書が父の元に届いた。それは元、父の部下だった社

員からのメールで、今までの数々の行為に対して父への感謝のお礼状だった。父はそのお礼状に対し即、返礼のお便りを送つた。皆から慕われ、信頼され、又自分に与えられた事に関して常に全身全霊で取り組む、私はこう言う父親の元に生まれ育つた事を、とても幸せに思うと同時に誇りに思う。その父親も昭和五十二年一月、八一歳の人生を閉じた。

父の人生は晴れの日、雨の日等、全く関係なく、一生を忙しく働いて一生を終えた。ジッジ（父）!! ゆっくり休んで下さいね!! 御苦労様でした。今度こそ 公私共にお疲れ様でした。

終

予備選考を終えて

多彩な執筆者に希望

自治労文芸

代表幹事

佐藤 環 樹

今回応募のあった自治労文芸賞には、家族会員として下は6歳、上は82歳と幅の広い年齢の方々からの応募があった。募集要項に「縛り」が無いため、童話や絵日記的な作品の応募がお子さんから有り、予見できなかった執筆者に、嬉しい悲鳴をあげた。

文芸賞の持つ真の意味は、執筆者の成長だ。成長とは何かというと、組合員である執筆者が本文芸賞に応募し、それをきっかけとして、以後、仕事やブラ

イベートで応募したことで得たものを活かし、有意義に時間を送る事が出来れば良し。受賞すると嬉しいが、受賞は二の次のものだ。

私の場合で言うと、本文芸賞に応募した後は、付き合いの幅が増えた。私の小説が組合の機関誌で紹介されると、面識の無い人から「次の作品も楽しみにしているよ」と声をかけられることが増えた。コミュニケーションは社会で生きていく上で、最も重要と考えているため、その幅を本人の努力も無しに広げてくれた本文芸賞にはとても感謝している。また、応募を機に、仕事で作文（起案）したものをシッカリと推敲することを心がけるようになった。誤字脱字

は、見るものの印象を悪くするし、その印象が当の本人に置き換えられる。誤字脱字を無くす心がけは、応募を機に養った。そういう点で、私も本文芸賞の応募をきっかけに、成長させてもらった一人だ。

それぞれの作品に、作品短評を掲載するようになったのも、執筆者の成長を望んでであり、良い取組みだと思っている。少なくとも、短評を見た執筆者は、自分では気づけない所の指摘を受けて、次の領域へと成長していくことだろう。

小説に限らず、ものを書くと言うことは、考える・整理する、という二つの行動を行う。ストーリーを構築（考え）して、

最後に、推敲（整理）する。この考え、整理するという行動は、実生活でも日常的に行っている。ものを書くということ、その二つの行動の訓練をし

ていて、知らずに生活に活かされ、執筆者は書くたびに成長していると確信している。

さて、本選考では四作品が受賞した。選考委員の強く推した作品が選ばれ、ホッとしたのと同時に、ある意味選考委員の力量を誇りに思う。イレギュラーだったのは、「私の父」だ。これはギリギリで最終選考に残した作品だが、受賞した。私自身も特に高い評価をしたわけでは無いが、残して良かったと感じる。やはりプロの視点は、どこか違う。一次選考する側としては、より研鑽を積んで、良い作品をシッカリと見極めていかねばと思った。

今回の文芸賞は、多彩な執筆者に希望を持った。これに尽きる。そして、全ての執筆者が、成長していくことを願ってやまない。

予備選考を終えて

野田博幸

作業は、他の委員の方の意見も聞けて参考になりました。

さて、選考全体を通して感じたことは、短い作品が多かったということですね。短い作品が悪いということではありません

前回の予備選考が初めてだったので、今回は2回目の予備選考でした。前回とは読む作品も違いますが、大げさに言うとう、読み手としての自分の力量が試されるといった気分で臨みました。ただ、プロの審査員ではありませんし、自治労文芸という場での応募作品なので、「何を伝えたいのか。」と「わかりやすさ」を常に念頭に置きながら、読み進めて行きました。

今回は応募作が28作品と少なく、いつもなら班分けをして一時選考するところを、すべての作品に目を通すことができました。全員ですべての作品を読み込んで、候補作を議論していく

品が順当に選ばれた印象でした。特に「規律」という作品は

専門知識とちょっとした事件と物語の展開がよく、一気に読めました。

が、小説として人物を書き、場面を書き、物語を展開させて、落ちをつけるには一定のボリュームが必要だと思います。また、作品を書き上げたあと推敲をすればもっと良いものになるのにと残念に思った作品もいくつかありました。文脈や比喻表現、人物描写など、作者が見直すことで完成度は格段に上がると思います。皆さん忙しいとは思いますが、ぜひ推敲して完成度を高めて提出して欲しいと思いました。

選考では、自然と完成度の高い作品が選ばれていき、意見が分かれることもありませんでした。小説として完成度が高い作

ヤンルについては、もっと掘り起こすことに取り組んでいきたいと思えます。

予備選考を終えて

近畿地連文芸委員

山口勝己

選考に残った以外の作品では、ノンフィクションの「ソウルの路地裏に魅かれて」の空気感が気に入りました。もう少し長い作品も読んでみたいと思いました。「地面となった空へ」という作品は、視点が面白いと思いました。また、絵本というジャンルで「サッカー大決戦」、「くまくんのぼうけん」、「おもしろいこと考えくん」など、楽しく読むことができました。

最後に、自治労らしさを感じた作品として「組合ヘルパー日誌」がありました。職場での問題点について、小説の形を借りて記録として残しておくというのは、自治労文芸の意義なのではないかと思いました。このジ

昨年、近畿地連からの文芸委員になり、初めて自治労文芸賞の予備選考に参加させていただきました。といっても、仕事の関係で、まる二日にわたる選考会の一日目の、それも途中でまだしか参加できませんでした。他の委員の皆さんや事務局の皆さんには大変ご迷惑をおかけしてしまいました。改めてお詫び申し上げます。

私が拝読した作品は、「組合ヘルパー日誌」と「エッセイ『うえの』15編」、「遠い昔の思い出

(その3) 成人式」それに「北竜町」の四点でした。「組合へルバー日誌」はオルガナイザーの奮闘記で、労働組合の文芸賞応募作品らしい作品でもとても好感をもって読みました。いささか好人物すぎる主人公や理想的なハッピーエンドなども、日ごろ身近に接している組織支援員の献身的な活動を思うと、結構リアルに感じられました。本選考で佳作に選ばれたとのこと。

心からお祝い申し上げます。「エッセイ『うえの』15編」はとにかく文章がお上手なのに感服しました。練達の文章で、再雇用職員としての生活を淡々と描きながら、しかし熟練職員としての、また平和や民主主義を希求した組合活動家としての、熾火のように秘められた熱い思いが伝わる文章で、とても教えられました。「遠い昔の思い出(その3) 成人式」は青春時代の切

ない思い出を、歳月を経て振り返るエッセイで、いい作品でした。人生には折に触れ引き戻される、人格形成の原点ともいべき出来事の記憶があつて、往々にしてそれはほろ苦いものなのです。予備選考会は依怙蟲屑にならないように、作者の氏名や所属県本部などは伏せられていたのですが、「北竜町」の作者は私のごく身近な友人で、その内容から「ネタバレ」してしまいました。後日譚です

が、今年の3月末で定年退職を迎える彼は最後の思い出に応募したそうです。維新の市長の組合攻撃に抗して、定年直前まで保健衛生関係の組合支部の支部長を務めあげた人物です。作品の水準はともかくも、その心意気を多ししたいと思います。「小説を読むのが結構好きかなので」と、気軽に引き受けた文芸委員でしたが、他の委員

の皆さんの水準の高さに、穴があつたら入りたいという思いもしましたが、応募作品を読むのも、他の委員の皆さんの講評を拝聴するのも、とても楽しく、貴重な経験ができたと思んでいます。惜しむらくは応募作品数が減りつつあると伺ったこと。

ですから、いつも心がけているのは、自分の好みは棚上げにすること、減点法はできるだけ使わないようにすること、そして、できれば本選の選考委員が思わず「おっ」というような、意外性のある作品を入れたいな、ということ。予備選考委員も生身の人間ですから、好きなタイプの作品も、そうでないものもあります。でも、どの作品も忙しい中、時間を割いて、こつこつと書かれたものなのですよ。

予備選考を終えて

中国地連

飛 浩 隆

全国各地から集まった仲間とともに、第二六回自治労文芸賞「散文の部」の予備選考に参加しました。

私たちの仕事は、選考委員に読んでいただく作品を選ぶこと

そうしているうちに、良さがわかる作品が出てきて、これは

選考の楽しみのひとつなのです。

それから減点法、これはあんまり使いたくないですね。

そもそも文学作品としての完成度なら専門の文芸賞の方が得意なわけです。わが自治労文芸には産直野菜のような良さもあっていい。素材の素晴らしさだったり、作りのていねいさだったり、実直な態度だったり。

別のたとえをすると、けっこうハンサムや美女ではないけれど、なんともいえない味のある顔、ってありますよね。ハンサムばかりさがしては見つかからない、すてきな顔つきの作品を選ぶ、これも選考の楽しみです。そして、さいご、本選の選考委員が「おっ」と思うような作品さがし。

自治労文芸賞には毎年、ひとくせもふたくせもある応募作がたくさん来るのです。たいていは「多くの人を楽ませるのは

むずかしいかなあ」と思うのですが、中には、クセとその他の要素のバランスが取れて、プロにはとても出せない味わいのある作品もあります。

あるいは、自治労ならではの、生の素材の面白さに惹きつけられるものもあります。こういうのに出くわすのは、選考委員の冥利に尽きる、というやつです。

「本選の先生方は、これを読まれたらどう思われるかな？」とわくわくするような作品があると、予備段階で話し合いをするときにも力が入ります。毎年、こんな感じてたくさん作品を拝読しています。あなたの作品に会えるのを楽しみにしていますよ。

さて、ほかの皆さんもふられると思うのですが、ことしはやはり応募作が少なくてちょっ

とさびしかったですね。

「なぜでしょうかね」と選考委員でも話しあってみました。

理由はいろいろあるでしょうけれど、私は「みんな忙しすぎて余裕がなくなっているかも」「ちょっとしたことならSNSに書いてしまうかもしれないですね」などと発言しました。

みなさんはどう思われますか？

でも、今年もちょっと新しい動きがありました。

家族のご応募です。子どもと年輩者です。

これはうれしかったな。まずは本選でまごど佳作を射止められた「私の父」の道添さん、おめでとうございました。「私の父」は、満鉄教習所におられたまじめ一貫のご父君に対する敬慕の念に感動を覚えるだけでなく、戦後秘話としても後

世に残す価値のある一作である

と思います。他の二作も本選へは進めませんでした。大変面白く拝読しました。

櫻田チームの子どもたち！

他の文芸賞では絶対にお目にかかれない作品の数々、爆笑しながら読みました。みんなまとめて私が感想を書いているのでぜひ読んでください。そして次回もまた会いましょう！

そして櫻田家の親の人へ。ご応募ありがとうございました。家族で盛り上がりましたか？それはよかったです。ぜひこの楽しみを続けてください。子どもたちが成長して、親も感心するよううな、いっぱいしを書くようになるかも。学校のこと、お住まいの町の未来のこと、親の仕事のこと、家族でいろいろ話

もしながら、作品は今年同様、元気なやつをお願いします。

そして道添さんも櫻田さんも、実は宮崎県都城市からの応募

募なのです。市職労のみなきん、おみごとでした。

自治労文芸の価値を再確認してみよう

自治労文芸 副代表幹事

中野 暁

数字は嘘をつかない。38、41、55、28。これは、2010年に私が初めて選考委員となった年からの「散文の部」における応募数の変動である。2年おきのコンクール開催で今回は28だった。かつては毎年開催で100作品を優に超す応募があったというから、ずっと低迷が続いているということになる。それが今回さらに落ちたということは、素直に自治労文芸の衰退という事実を認めるしかないのだろう。

原因はなんだろうか。考えて

みれば、ネット社会の現代ほど個人が自らを表現できる場所に恵まれた時代はないだろう。ホームページやブログ、ツイッターやフェイスブックをはじめとするSNSなど、書きたいことを書ける場所はごまんとある。何も時間を割いてわざわざ小説を書くこともなく、世界中の特定多数の人間を相手に24時間365日いつだって発信することができ、おまけにそれに対する反応まで得ることもできる。そういう時代である。かつて「自治労文芸」を表現の場としていた人種が、今ではネットにその場所を移しているということは大いに考えられる。音楽や映像など表現の方法も増えた。そんな時代に逆らうように今回は手書きでの応募作品が多かったのだが、「デジタルでの発信をしていない人が応募してく

れたのだと思う。おそらくそれ

なりに高齢の方だろうと思うから、やはり自治労文芸の将来は明るいとは言い難い。

さて予備審査だが、今回は応募が少なかつたことから例年のように選考委員が2〜3の班に分かれることはせず、全員がすべての作品を読んで審査した。結果的に、例年より多くの作品を読むことができたので個人的には非常にエキサイティングな3日間を過ごすことができた。

最終選考に残すと決めた作品は8本。特に私が気に入った作品は3本で、人工知能が導入された近未来の図書館を舞台に繰り広げる図書館員と男の密やかなドラマを描いた『規律』、戦後、満州から引き揚げてきた15歳上の兄が、自分の身を犠牲にして周囲のために力を注ぐ感動作『あんちゃん』、上野を舞台にしたエッセイ5編で構成されたノンフィクション『うえの』

だった。『規律』は想像力を掻き立てられ、『あんちゃん』からは組合運動の原点につながる熱いものを感じ、『うえの』には労働者の目線からプライベートのことまで冷めた温度で丁寧に心情が綴られていて、文章の上手さに舌を巻いた。各選考委員の評価も概ね一致していた。先生方による最終審査の結果が気にかかる。

世界の流れを見ると保守・右傾化が目立つ。アメリカではまさかの泡沫候補がついに大統領まで登りつめた。日本も思想的に追随する流れになるのか。私たちが望むリベラルな政治からさらに遠ざかっていくような気がして背筋が凍る思いだ。そんな不安に駆られながら、表現の場としての「自治労文芸」は本当に必要なのか、しばし考えてみたい。組織としての課題である。

作品短評

「くれそんのオムライス」

マニチカン

「忘れじの都」

櫻田 秀樹

シナリオということでの応募作品。高校でのイジメ問題と携帯電話所持の問題を取り上げている。基本的には情景の描写と会話のみで話が進んでいくが、話の展開や結末に必然性が弱く感じられた。作者にはどこかの場面が映画のように浮かんただろうか。話の展開にインパクトはあるが、人物描写や人間関係の描写がないため、インパクト

を受け止めきれないと感じた。

遠い昔の思い出(その1)

遠足

遠い昔の思い出(その2)

ジャガ芋

遠い昔の思い出(その3)

成人式

道添 美枝 (家族)

それぞれのキーワードに関する昔の思い出を綴ったエッセイ。もう一作品「私の父」という作品もあるが、こちらは一時選考を通過した。この遠い昔の

思い出シリーズだが、手書きの原稿ということもあって文章は読みにくいのが、独特のリズムがある。エッセイのテーマがどちらかというと暗いものなので、テーマとリズムが相まって、引き込まれるような印象を受けた。読みにくさを解消すれば、作品としてはもっと良くなるだろうが、作者が作品に込めた熱も冷めてしまうかも知れない。エッセイへの評価はうまいとか下手ではなく、「好き」か「嫌い」かだけののではないかと考えさせられた作品。

17歳の息子との食事の風景を切り取ったノンフィクション作品。思春期の息子に対する母親の不安を解消するアイテムとして「くれそんのオムライス」が出てくる。息子の何気ない一言で絆を再確認した母親の感動がストレートに表現されている点は好感が持てる。惜しいと感じたのは、思春期になった息子への不安をもう少し具体的に書くことで、読者が共感することができるのではと感じた。それまでの不安や、不安が解消された時の感動が作者だけのものとな

っている点があったくない。

「サンタマリア私釈」

山本 泰弘

「サンタマリア」という歌詞について、自分の出来事を絡め、独自の解釈を行っている作品。元々の歌詞のためか、作者の好みもあるのか、文章のリズムや表現が難解で読みにくさを感じた。歌詞の世界を独自に解釈するというのは新しい試みだと思うが、作者の感じる「諦観」に共感はできなかった。そもそも、作者は他人に共感されることを望んでいるのか。作品としては、作者の心理を丁寧に描写し、読みやすい表現に直すことが正しいのだろうか、作者はそれを望んでないような気がした。

「ソウルの路地裏に

魅かれて」

(ノンフィクション)

林 英樹

作者は、20年前に初めて韓国を訪問したのをきっかけに急速にその縁を深めていく。最も魅力を感じるのは路地裏だという。ある日ふらりとソウルの路地裏に足を踏み入れると、そこに軒を連ねる民家や食堂の風景にまるで魂のふるさを見つけたかのような感覚を覚えた。以来かれこれ15年、路地裏散歩にハマっている。読む側を引き込む魅力のある作品。惜しむらくは、路地裏の魅力が詳しく伝えられていないことだ。

「動物園物語」

飯塚 正樹

男女共同参画シナリオとあ

る。その名のとおり、本作には女性を君付けで呼んではいけないことや、ボスザルのことをアルファオスと呼んだり、ジェンダーの意識が動物に対しても必要なことなど男女が平等に差別しあうことのないよう教えてくれるシーンが随所に盛り込まれている。動物の世界を通して、人間社会を見るところ、ジェム狙いの一つかと思うが、ジェンダーについての用語説明のためのシーンという印象が強く、物語としてのインパクトには欠けているように感じる。物語を通して伝えるものになっていればなお良かった。

「地面となった空へ」

大内 拓弥

なぞかけのような不思議なタイトル名である。その解釈は選考委員を悩ませた。違っていた

ら申し訳ないが、主人公である「男」は教室の天井に刺さった画びょうであろう。誰の気にも止められず一人寂しく人間観察する毎日だが、いつしか錯びて落ちてしまう。そしてそこで拾われ新しい仕事を与えられる。モノを擬人化して表現している興味深い作品だが、難解だと感じた。ハッピーエンドなので読後感はいい。

「野球部に入ろう」

櫻田 秀樹

筆者の野球への愛情が伝わってくる擬人化小説。野球の道具に命を与え、結論に、物を大切にすの事の意味、そして、一旦挫折した主人公が再起するという読後感の良い作品に仕上がった。なお文末の問いかけは、ハッキリと結果を出したほうが良い。読者に考えさせるのも一つ

の手法としてあるが、この小説では、「野球部に入り、みんな楽しく過ごしました」という結び方が、最も印象的で美しい。結びの重要さは小説の出来を左右するので、気をつけて

「ロバの耳」

池田 祐人

文体もシッカリしていて、起承転結も良い。なお提出時には推敲が必要。(向かう→刃向かう)他。小説としては、感情をもっと荒々しく表現すると良い。どん底まで落ち込んだり、といった極端な表現を使ってみては？感情の表現が、通して単調だったのが残念。ただ書き手としての力量は、十分。自治労文芸へは、筆者の求めるジャンルと違うかも知れないが、ぜひ職場に関連したフィクションを創作して応募して欲しい。小説

は発想と筋書きが命だが、筆者には、それがあると思う。

「北竜町」

平子 一彦

私は、これを最終選考に残すか迷った。楽しく読み通したからだ。発想力がある人なのだろう。作文も上手い。けれども、残すことをためらったのは、小説としての形態にある。報告書的な形態であって、ノンフィクション小説としての形態になっていないからだ。ノンフィクション小説を読まれていると思うので参考にして欲しいが、出来事を紹介するのみならず、出来事を「掘り下げ」ている。個々の出来事に筆者の感想を掘り下げて記載することで、小説味が出て、もっと良い作品になる。

「居残り軍隊」

「カミカゼ攻撃」

池田 祐人

どちらの小説も、筆者は最後の2行のことを訴えたくて、ストーリーを作成したのだろう。特に居残り軍隊では、「日本軍

じゃない。日本人よ」という台詞に、筆者の戦争への悲哀感を感じとることができる。どちらの小説も、筆者のメッセージを読者にきちんと伝えていて、伝えられるのは筆者の力量であり、小説を書き慣れているのだろう。戦争反対の訴えを原稿用紙に託して広めていくのも、反戦運動だ。これからも、続けて欲しい。小説としては、オチができていて、その後から出来事を創作する場合に注意して欲しいことがある。オチを決めているだけにストーリーが単調になりがちだ。展開を二転三転さ

せ、見せ場を作る。また、兵器ではなく、もっと登場人物にスポットを当てて書き込むといい。

「鬼の服 熊の家」

櫻田 秀樹

童話です。熊の「トモくん」と鬼のお話。初めは怖いお話になるのかなとドキドキしましたが、鬼がやさしい人(?)だったのでほっとしました。鬼のパンツはだれでも興味しんしんになりますよね！ 私もはいてみたいなあ。すごく強くなれるかも！ 次の節分に、トモくんも！ 鬼がおそろいのパンツでやってきましたらどうしよう！ 豆をたくさん用意しとかなくちや。

「タタの田のむがぶらじ」

櫻田 琴美 9歳

童話です。うさぎの男の子のお話。うさぎのおばあちゃんは、男の子のことが心配だったんだね。おばあちゃんが亡くなって、悲しい気持ちになったけど、お供えのお花を摘みに行くやさしい気持ちがあったから、うさぎにも友達ができたのだと思います。きつとおばあちゃんも喜んでいよ。作者のあたたかい気持ち、読む人の心につたわる。はっきりに言って、これ好きです。

「おまへんのむがぶらじ」

櫻田俊太郎 6歳

これは、絵本ふうのお話。いや、これはGOODです。みんな絵が上手だけど、これはほん

とうにすばらしい。まずくまくんがとってもかわいしい、イルカとシャチをちゃんと描き分けていて、しかもシャチの怖い感じが出ているのには感心しました。さいごのオチにはびっくりしたよ！

「おまへんのむがぶらじ」

櫻田 琴美 9歳

これは正真正銘の「おもしろいこと考えくん」だね！絵とダジャレが一体になって、ふしぎなおもしろワールドがくりひろげられます。「というところは……」というナレーションで次へつなげるところ、どうなるのかなって先を読みたくなる気持ちになるんだよなあ。プロですか!? うますぎ！

「サッカーだいけっせん」

櫻田俊太郎 6歳

小学生とようかいがサッカー対決するお話で、イラストも満載。読んでいてもう爆笑のれんぞくでした！よくこんなこと思いつくなあ。ようかいの動きがイキイキしているし、小学生たちもカッコいい。点の取り合いからPK戦になだれこむ展開も燃えました。さいごのあくしゅもさわやかでいいね。きげつ！

「母の随想」

石田 和幸

仏壇の引き出しの奥には、認知症の母がむかし書いた「作文」がしまわれていた。それを読む息子は、しっかりしていた頃の母の考えにふれる。そして

……。 「エッセイ」としての応募でしたが、よくできた短編小説のような流れと味わいが感じられます。あんぱん、原稿用紙の銘柄、線香の匂いなど、こまやかな描写も効いており、思わずひきこまれるものがありました。記憶に残る作品でした。

詩歌の部選評

詩の部

山田 隆昭

先輩詩人から常々、「詩はどこにでもある」また「詩は具象と抽象のほどよいかみ合わせである」と聞かされてきました。

たしかに、詩は特別な場所や情況下にあるのではなく、日常生活の時間・空間にあります。ただ、その日常をなぞるだけでなく、どう受け止め自己の内部を通過させ、詩として一篇に仕上げるか、それが「具象と抽象の……」ということだろうと、自分なりに受け取ってきました。とても難しいことと思いますが、詩を書くうえでの基本のような気がします。

応募された方は、すでに現職を退かれた方が圧倒的に多いのですが、詩は年齢に関係なく書き続けることができますね。

今回は、応募された方が大変少なかったのですが、一覧表の順に、次の五篇を候補としました。

「世界は不変」東野正(右手県職労退職者)、「傷跡」齋藤新一(宇都宮市職労退職者)、「知覚」和泉まさ江(川崎市職労)、「いつかの夏」後藤順(岐阜市職労退職者)、「嘘」米谷滋(自治労泉佐野市職退職者)。以上の候補作から、次の三篇を選びました。

入選 「嘘」

佳作 「知覚」

〃 「傷跡」

「嘘」は、まさに日常のひとつこまを素材として扱っています。

フランス人形のケースに、乾燥防止のために入れた水は、当然のごとく徐々に蒸発して減ってゆきます。孫娘は知それぞれ、人形が飲んでしまったと感じます。そこまでは現実のできごととして作者は観察しています。さて、それをどのように説明しようかと思案します。これは、場合は違っていても、同様の体験した人であれば、共感できることでしょう。そして母親は、娘の、現実ではない発見を肯定するように「嘘」をつきます。

「こんなやさしい嘘を／ぼくはついたことがない」と感じることで、「嘘」の諸相へと転調してゆきます。

場面は変わり、末期ガンにある従兄弟に、退院後の希望を語り聞かせます。あるいは従兄弟は、そうした希望をもちや持ちえないことを予感していたかもしれません。しかし「そうだな」と弱々しく手を握ってきた「嘘かも知れないそのひとつ」とを受け入れます。そしてもっと生々しい、数々の「嘘」の現実と対比します。ごく日常のなかで、孫娘が発見したことから、作者の体験による発見と感性が融合して、佳品となりました。

「知覚」も、偶然に出会った日常のなかから詩を掬い取っています。コンビニでカップ麺を買う路上生活者。カップ麺と同料金乾めんを買う「わたし」。しかし、両者は麺を買いながら

その後の処理は全く違います。路上生活者はコンビニで湯を注いでもらいますが、「わたし」は家で調理します。そして、コンビニの外で雨にうたれながら、立ち姿でカップ麺をすすめる光景を目にします。続く「お前には屋根があるのだろう」に始まる三行は、現実には耳にした路上生活者の言葉ではありません。そう言っているように感じたことでしょうか。タイトルの「知覚」は、まさに知覚であって、現実から非現実には飛躍しています。そうした光景を見、感じながら、「にやっ／＼薄笑いを浮かべて／去っていく／ことはできずに」ただ背を向けることしかできないのです。

「路上生活者と『わたし』のどうしようもない違い。どちらがいいのか悪いのか、そうした評価を一切語らず、それぞれが抱える現実にも身を委ねること。そのことがいっ／＼そう作者の感性を際立たせています。

「傷跡」は、母の介護に明け暮れた日々を、「傷跡」をとおして回想しています。トイレのそばの板に付いた黒ずんだ痕。歩くのも辛い母の手垢だったのです。よかれと思って懸命に歩かせた母は、どのような気持ちでいたことでしょうか。

世間では昨今、目を覆いたくなるような虐待事件が起こっています。その対象は子どもであったり、お年寄りであったり、女性であったりと様々です。また、虐待の内容も身体的であったり、経済的であったりします。いずれにしても、無力な人々がこうした被害に遭っているといえます。この詩に現れる御袋や私は、虐待の被害者・加害者でしょうか。否、と云えるのは、

この詩では「私」と「御袋」が徐々に渾然一体となってくるからでしょう。つまり、母の痛みをわがこととして共有しているからです。肉体や生きざまはどうにも越えられないものとしてあるのですが、その根底に思いやりがあります。虐待の加害者の、自己中心的な残酷さとは違います。自己を正当化せず、現実を見据える姿勢がこの詩を書かせています。

「いつかの夏」は、五十年前に弟を交通事故で亡くした当時の、怒りと悔いの混沌とした、やり場のない気持ちを思い返しています。それから五十年の間、子どもを失った悲しみを抱えた父母も亡くなり、「僕」は様々な死を見てきたことでしょうか。そうしていま、七歳の孫がくれた死んだ蛾を葬りながら、死という現実を抱える孫と「僕」を重ね合わせています。生きるということは、辛い現実と否応なく向き合うことでもあります。そうしたことを考えさせられる詩でした。

「世界は不変？」は、性懲りもなく戦を繰り返す人間の愚かさを見据え、怒りを叩きつけるように詩を書いています。この詩の随所に、疑問形や問いかけが表現されていますが、作者自身への問いかけでもあるでしょう。そうした詩行のなかに「何度も家族を失うことはできない／何度も殺されることはできない」という二行があります。大切なものが平気で踏みじられてしまうことへの問いが、タイトルの「？」に現れています。

嘘

嘘にやさしい嘘があるのだろうか

フランス人形のケースの中の水を
こっそり人形が飲んでいると

孫娘は真剣な顔をして訴える
乾燥を防ぐために

コップに入れてある水が
減っていることに気付いたからだ

自治労泉佐野市職・退職者

米谷
茂

徐々に蒸発していくのだと

説明するのは簡単なことだが

相手は何といっても二歳

ここは思案のしどころだと思っていたら

そうだね

みんなに見られると恥ずかしいから

夜こっそり飲んでいるんだよ

母親のひと言で納得したのか

人形の前で無邪気に遊んでいる

こんなやさしい嘘を

ぼくはついたことはない

末期ガンで余命半年の従兄弟を

見舞った

本人告知はされておらず

彼を前にして

退院したら顎の外れるぐらい

酒を飲みましよう

そうだな と

弱々しく手を握ってきた

絶対に儲かりますよ

将来あがりますよ

勧誘電話に辟易しながら

国は必ず国民を守りますという

国がつく嘘に比べると

たわいないものだと思ってしまう

やさしい嘘と嘘を選び分けながら

生きている

ぼくは

ぼくは

除夜の鐘を聞きながら

人形が夜中にこっそり

水を飲むのだと信じることにした

知覚

路上生活者が
一つ108円の
カップ麺を買う
レジで
箸を貰って
ビニールを剥いで
湯を注いで
にやっと
薄笑いを浮かべて

神奈川・川崎市職労

和泉 まさ江

去っていく

香ばしい蕎麦の匂い

わたしは

一つ108円500グラムの

乾めんを買う

一食100グラム

五分分は食べられるだろう

にやっと

薄笑いを浮かべて

去っていく

店を出たら

路上生活者が

蕎麦をすすっていた

立ったままで

雨の中

お前には屋根があるのだろう

お前にはガスコンロがあるのだろう
お前はそこで湯をわかすのだろう

にやっと

薄笑いを浮かべて

去っていく

ことはできずに

私はただ背をむけて

傘をさした

雨は冷たかった

傷跡

トイレのドアのそばの板に
ミミズが這ったような
黒ずんだ跡がある
床からの高さは一メートルくらい
腰の曲がった御袋が
何度も何度も
つかまって杖にして
手垢をつけ続けた場所だ

栃木・宇都宮市職労・退職者

齋藤 新一

一歩も歩かないという彼女を
 筋肉が固まってしまふからと
 板間を這うように
 歩かせた犬畜生の日々
 トイレも 抱っこよりは
 時間をかけても
 一人の力でと
 だましだまし
 となりとなり
 歩かせた鬼畜の日々

 どんなに拭っても
 拭っても
 とれない黒ずみ
 こそは
 彼女の生きた勲章だが

何が言いたいのか

どうしたわけか

傷跡は

夜っぴて 　どず黒い海を

回遊し

いきおい朝の川を遡上する

哀しい思い出の子孫を

続々と産み落とすために

いつも 　そうだ

御袋の人生をまるで生贄の

ごとく捧げさせてきた私だが

その彼女の辛さ 　恨みが

那須連山のように幾重にも重なる

細長い傷跡

の

声なき声を

私は静かに聞いている

彼女のなぞった人生を
いとおしむように

トイレに立つ度

傷跡を

何度も何度も

なでている

(さすがに鬼の目にも涙)

まるで

はがれるようで

はがれない

自分の心の瘡蓋

のように ※かからしい

(注) ※かからしい：「もどかしい」という栃木県の方言

短歌の部

森川多佳子

今年は三十首以上が五作品、十首が二作品、総数十余作品の応募がありました。三十首の短歌をレベルを揃えて、ひとつの作品に作りあげるのは容易なことではありません。まずは、五人の作者の努力を讃えたいと思います。壮年、熟年世代が多く、何気ない日常詠や旅行詠にも、人生の途上で蓄えられてきた人間の味わいや思想が滲み、社会を詠んだ歌には、短歌としての表現には一考の余地があるものの、日本の現状に対する強い焦燥や平和への希求を感じました。

それらの中で、米谷茂さんの「日常」を迷うことなく入選しました。どの一首も短歌としてきちんと成立し、安定感、信頼感をもって読むことができました。その上で、常識的な着地点に陥らない物の見方、感じ方、それらを表す効果的な一語があることを高く評価します。日常を巧みに切り取った場面には、現在の世の中が内に抱える不安や淋しさがあり、風景や他者とのふれあいに立ちのぼる抒情も印象に残りました。

一首目。「ペットロス」は最近使われるようになった言葉で、とても深刻な心理状態ですが、現代人とペットの共依存的愛情関係やその奥の孤独と、近代人である牧水の感情豊かな「優しさ」とを合わせることによって、現代の人間の心の在り方を見つめる歌になりました。四首目、五首目。近頃は町中に防犯カ

メラが設置され、短歌ではへ常に監視されている恐怖」が詠まれることが多いのですが、米谷さんはユニーク。自分が今ここにいるということの証明を人間にはなく、コンビニの防犯カメラに求めるという感覚には、現代的な不安感や淋しさがあるでしょう。結句を「顔向け歩く」として、自分の動作に可笑しみを加えて表現したのも巧みです。六首目。秋彼岸の頃でしょう。「尼僧の法衣」の衣擦れという、清々しく、ささやかな音も魅力的ですが、それを「ふたりで見つけた」ことに作者は喜びを感じていて、このさりげない表現が、相手を好ましく思う感情をじつによく伝えていきます。七首目。「出世には縁遠き人生」には、いわゆる「出世」を求めず、自分の生き方に徹してきた矜持があります。そして、どんな立場であっても、真面目に働くことの大切さは変わらない。小さな孫に伝えたいのは、最も根本的な労働の尊さと人間としての誇りなのでしょう。「自治労文芸」に相応しい一首だと胸に迫りました。

佳作一席は山崎俊定さん。一首目の「白布ひろがる」や七首目の「粥の深みに匙は沈むよ」は、情景や心情を感覚的に言いあてた優れた表現で、風景への感動や老いの実感がしみじみとした説得力をもって伝わります。また、一緒に旅した亡き妻、マチスを好んだ父、戦死した兄などの登場人物に心惹かれ、亡き妻の割烹着のポケットの色褪せた輪ゴム」や「父の形見の画集を抱く旅」は作者の愛情の深さを感じさせますが、言葉が詰め過ぎていきますね。言葉の必要性を吟味して推敲し、引き算してみてください。結句を体言止めでまとめずに動詞を用いる

と、歌に動きが出ることもあります。また、ヒマラヤやドイツや、国内外の沢山の旅が詠まれ魅力的ですが、少々網羅的な印象を与えて惜しいです。全体の構成も考ええると良いでしょう。

三十八首を詠みきった八十四歳。来年も楽しみにしています。

鈴木照夫さんの「鴻鵠の声」は、集団自衛権や憲法問題など昨今のわが国の状況を強く告発する一連でした。二首目。上の句の軽快さが観察の鋭い下の句へ収斂して巧みです。「細き靴」には若いということ危うさがあり、「撓へり」には勢いと同時に若者が背負っている重圧をも滲ませています。七首目。「力などあらねば」がリアルです。多くの普通の国民が、粘り強く国会前にデモを繰り返しましたが、法案は可決されました。権力を持たない一国民が無力であることを自覚しつつ、だからこそ諦めずにデモに行き、叫ぶのだという作者の行動が共感を呼ぶでしょう。社会詠は観念的にならず、どれだけ自分の生活の具体に引き付けて詠えるかが、短歌としての勝負です。

和泉まさ江さんの「予後」は、前半が父の闘病と挽歌、後半は自分の生活の食や身体の内在などを、社会の状況に繋げていこうとする意欲作で、それぞれの歌には、発見があり、主張があり、内容的には納得できる歌が多くありました。しかしながら、短歌の定型を外れることが多く、散文のようになってしまっている残念です。助詞を省いたり、「わたし」を「われ」にするというような工夫で定型に収めることができます。また、口語は韻律が緩くならないように気をつけて使いましょう。

中川潔さんは柔らかな感情表現が魅力的です。「身にまとう

鎧のような肩書」をもって、「ただいまと突然帰省した俺」とあるので、都会から何かの事情があって帰省した時の一連でしょう。「肩に乗り見ていた空を見せたくて」「ひらがなの声」や四首目など、故郷の大らかさや故郷にいる母の優しさの表し方に、場面や言葉の選択のセンスを感じます。まだ、若い作者だと思えます。是非頑張ってください。

道添美枝さんは志布志湾付近の棚田や海辺の四季に、生活の様相や農作業などを詠いこみました。良い場面を捉えているので、語順を入れ替えたり、結句に体言止めを多用しないなどの工夫をしてみてください。例えば三首目は、「夜の食卓」を外して、「バスを降り直行したる魚屋に天然ぶりのアラを買いたり」とすると、意気込んでブリを買いに行った心弾みやへ今まさに買った」という臨場感が出るでしょう。

南出孝次さんは、「米兵を大事にしたがる政治家」「原発を求め続ける人間」というように、問題意識を前面に出した渾身の一連。気持ちはよく解りますが、短歌の表現としては大づかみです。日常における自分や他者の姿や行動を具体の言葉で描写したり、比喻を用いたりして、読者に主張を届けてください。残念ながら選外ですが、今後を期待して一言書きました。

自然災害や天候不順、世の中の不穏など、心の沈むことの多い日々ですが、こんな時こそ、自然や人間を見つめ、社会を見つめ、日々、怠らずに短歌の言葉を求めていきましょう。

短歌
入選

日常

牧水が優しく犬を詠みし頃
ペットロスなる言葉
なかりき

好きなもの嫌いなもの
に選り分けて最後にポ
ツンと自分がのこる

性善説信じぬ俺がやすやすと
人に背を向けホ
ームに並ぶ

コンビニの防犯カメラに映る俺
賞味期限は一
週間だ

アリバイが欲しいと思う夜もある
防犯カメラ

大阪・自治労泉佐野市職・退職者

米谷
茂

に顔向け歩く

すれ違う尼僧の法衣のすれる音ふたりで見つ
けた小さい秋だ

野良猫が時折駅で甘え来るタマ駅長になれな
い猫だ

出世には縁遠き人生なれどアリとキリギリス
孫に読みやる

五十年遅く生まれてきたとしてぼくは詠まな
い元カノのこと

足湯にて秋雲ともに眺めたる遍路は軽く会釈
して発つ

名前より番号で呼ばれひと日過ぐ銀行役所町
の医院も

旅

わかさぎの棲むとう湖のひそとして遠き広き
に白布ひろがる

ひと塩の若狭かれいが行儀よく並べ売らるる
小浜朝市

旅の空漂うハンググライダーあさぎまだらと
風をとともにす

亡き妻の割烹着物入^{ぼっけ}のびきった輪ゴム色褪せ
めぐる歳月

マチス・ドラン・ルオーを父は好みたり形見

東京・自治労都庁職・退職者

山崎 俊定



短歌

画集抱き倉敷の旅

故郷ふるさとのある人羨ともししと言われても友も皆逝き春
の陽炎

この世から徐徐に外れていく思い粥の深みに
匙は沈むよ

鴻鵠の声

久し振りに元の職場を訪へば知らぬ顔ばかり
がパソコンに向く
階段を二段飛ばしに駆け上がる若きらの細き
靴は撓へり
争はぬ誓ひはいづこへ遠雷の黒雲たちまち頭
上に寄り来
力などあらねば示威行動を頼みきて仲間と声
を囁らして叫ぶ
冬池の狭きに憩へる水鳥の動かぬ水に濃き影

東京都清掃労働組合

鈴木 照夫



短歌

をおく
這松の曲がりくねって地に低し不安の中に老
いの坂行く
歴史は役・乱・変の繰り返し同じ道をと準備
進む

予後

点滴の大きな袋を指差してこれが飯だと父は
笑えり

父逝けり半年待ったホスピスに空きができた
と電話くる朝

散歩するそここのひとが父を知るわたしの
知らない父を知る日々

生産者を支える消費者目指しつつ一房百円の
バナナ食べおり

コーヒーが持ち帰りになって消えていく政治

神奈川・川崎市職

和泉 まさ江



短歌

なんかを議論した時間

短歌
佳作

ふるさと

肩に乗り見ていた空を見せたくてUターンす
る父母の待つ家
身にまとう鎧のような肩書きを脱がしてしま
うふるさとの風
ただいまと突然帰省した俺に何も聞かない母
のおかえり
褒めるのも励ましとときに叱るのもみんなおん
なじひらがなの声
遅れても腰の曲がったあの人に来るまで待つ

福井・福井県職・退職者

中川
潔



短歌

て発車するバス

短歌
佳作

雑詠

秋祭遠くで鐘の音聞こえども今年は水害豊年
ならず

花吹ぶきもう暫くは眺めたし我の意を酌み風
よ静まれ

バスを下り店屋に直行天然のブリのアラ買い
今夜の食卓

古書店に時の過ぎるを気にもせず目当ての本
に出逢うまでいる

田の畦に今年も咲きたる彼岸花もぐら土竜除けにと

宮崎・都城市職・家族

道添 美枝



短歌

古人植えにき

俳句の部

小沢 信男

瀬角龍平氏の七句を、入選にいただきます。鮎は夏の季語だが、上り鮎は春。清流を元気にさかのぼる若鮎たちを瞬発のバネと。まさに生命力の賛歌から、本年度自治労文芸の俳句の頁を始めます。

蝉も夏の季語ゆえ、さきがけて啼きだす松蝉たちは春の蝉。こちらはゆるやかな啼きさつぷりを、樹と相性がいいんだと見立てる。ユーモアを含んだこれも賛歌ですね。

長崎は坂の街。ちかごろ外来の観光客が激増して、とりわけ爆買の方々の元気なこと。さらにご当地は江戸このかたオランダと中国と交流があり、そんな由来もふくむ時事句でした。次の油蝉もいよいよ時事句。小学校の廃校は過疎地のみか都心部でも。さらに定時制高校の廃止統合も。その時流をわれらは受け入れてしまいながら、消えた母校への熱い思いよ。

そして結びの句に、とりわけ刮目。「紡績という勤め口」は、明治このかた全国の娘さんたちの働き口のひとつであり、日本の近代化を支えつつ、数多の女工哀史を織り成した。劣悪な寄宿舎から結核を蔓延させ、国民病ともなり。それやこれやを含みこんだ日本の女性史へ、思いをはせる母の日でした。

俳句は花鳥風月、人事風物。目に触れて、ふと立ちどまる物事を、カメラにパチリと収めるように、五七五で捉えてみる。

さして手間もかからぬ楽しみです。それでいて、あんがいに、さまざまな思いが籠められるのですね。

光平朝乃氏の六句を佳作にいただきます。黒南風は梅雨時の暗い空ながら、白髪との取り合わせが妙です。ポプ・ディランもギター少年だった。忌野清志郎は白髪になるまで生かしたかった。高田渡は髭も白かった。ギターは民衆の楽器なのだ。

大夕焼けの結びがいいですね。来し方はやけくそでニヒルなようでも、なァに明るい明日へ、全身に夕日を浴びている。

蜻蛉の群れがわくようなとは、さすが信濃川か。理髮店の一隅にさりげなく本棚があり、さては本好きだなときりげなく好意を寄せる。それで花ぶりささやかな蓼の花、秋の季語です。

そして八月六日の広島忌。ふと見つけた被曝ポンプに立ち止まり。署名活動の若者たちへ、希望をこめた眼差しでした。

山崎俊定氏の六句を佳作にいただきます。ふらこはブランコで、公園などに年中ぶらさがっているけれども、春の季語。冬向きではなし、陽春になってこそ元気に漕げる。勢いよく空を仰いで、ア、お月さんだ、と少年が声をあげた。昼の月はもちろん、微笑むのは付き添いのジイさんバアさんでしょう。

ジィーと啼きたてる蝉を掴んで走る。これも少年の姿ですね。このように捉えてくださると、そうだったなァ。身におぼえのガキのころの、その掌の感触がよみがえるようです。

夕焼雲が途方に暮れると、そんな雲の姿もあるよな。光平氏の大夕焼と思えばあわせると、なおさらオカシミが増します。

冬の夜、火の用心の夜回りの方が四つ辻にきて、四方へむけ

て拍子木を打つ。なんと律儀な。こういう人々を地の塩というのでしよう。その姿をこのように捉えて、おみごとです。

山崎氏も、瀬角氏も、また和泉氏も、南出氏も、本欄のご常連です。新人ぞくぞくと登場こそが望みながら。お名前のみの旧知の方々との出会いも、ご健在でいらっしやるのだなあと、しみじみ愉しく存じます。

渡辺みゆき氏の五句を佳作にいただきます。五句とも、気迫が味わいです。団交の夜がクリスマスとは、歳末ぎりぎりの粘りなのだ。あげくに決裂の深夜に、しんしんと雪が舞うのも、極上の気迫ですなあ。組合員幾千の思いをこめた闘いがなくてはなんの組合ぞ。と共に、紅葉狩りに英気を養う秋深き一日もあるのが組合活動なのですね。その目印が赤旗とは、一見野暮なようだがあんがい粋ななさ、と句が申しております。

それにしても、メーデーに行進がないなんて、ちかごろはあるのかな。あるからこの句なんでしょうね。感慨です。

以下、選外ながら佳吟のかずかずを。

和泉まさ江氏。西日がカーテンを破いたのではなくて、カーテンを引いたままの部屋へ入ると、隙間から西日がギリリ射しこんでいた。一瞬のおどろきの表現ですね。西日が夏の季語。

寒雀の目と目が合っちゃった。おそらく朝の路上か。その一瞬を捉えて、なにか可笑しな味わいがあります。

囀りは小鳥たちがしきりに鳴き交わす春の季語。その賑やかな気分で病院の廊下をゆくと、看護師さんたちの控え室から、ふとチーズの匂いが。一瞬の鼻の感触に、微笑みがわく。この

作者は一瞬を捉える業師ですなあ。俳句の妙味の、これも一つです。

南出孝次氏。節分はまさに冬から春への変わり目。鬼を追っ払う豆まきの行事に、さまざまな闘いの思いを籠めて。おなじ二月の十四日がバレンタイン・デー。早春の新しい季語です。知り合いの女性から義理チョコにせよいただいて、やや若返った気分。わかるなあ。闘志も、連帯もあって人生でした。

ナメクジは夏の季語。台所で年中みかけるようながら、夏場がやはり出盛りかな。くねくね這い回った跡を難波船とみたてのおかしみですね。

道添美枝氏。ラグビーが冬の季語。五郎丸選手とは新しい現象で、時事句の一種でしょうが。俳句にはそもそも新奇に刮目の要素がある。古池や、ばかりが能ではないです。

招き猫は季語ではなくて、無季の句とみえるが。猫の子も猫の恋も春。春の句とみてもいいでしょう。なんでも招き寄せているおかしみ。二句とも仕草に着目です。

川崎岳史氏。潮干狩は春。受験も春。おなじ季節に、広大な見晴らしのなかで、我も人もともに生をたのしむ状景と。一転して優劣を争わねばならぬ社会への憂鬱と。これが人生か。

わずか二句で、世界をまるごと捉えてもいるような。俳句ってスゴいもんだなあ！

瞬発の発条

鮎上る瞬発の発条^{パネ}つかひつつ

相性の良き松選び春の蝉

長崎に亜細亜のことば坂薄暑

油蟬廃校校歌熱唱す

嵐電のホーム曲がれる残暑かな

葦原や鶴来る前の風起こす

母の日や紡績といふ勤め口

鹿兒島・垂水市職・退職者

瀬角龍平

ギター少年

黒南風や白髪になりしギター少年
成るようになるさと思ふ大夕焼
信濃川欄干にわく蜻蛉かな
本好きな床屋のあるじ蓼の花
街なかの被曝ポンプや広島忌
広島忌署名求めし高校生

大阪府・枚方市職員関係労組

あさがお

終生

ふらここの子に昼の月微笑みて
掌中に蝉を鳴かせて疾走子
夕焼雲途方に暮れて夜空となる
爛熱く頼んで亡き人偲ぶ夜
十字路の寒柝四度よなに分けて打つ
妻逝けば日かな潮騒聴いてます

東京・都庁職・退職者

山崎
俊定

想い

団交の夜は深まりしクリスマス
決裂の深き闇夜に雪が舞う
幾千の思い背負いし秋闘よ
赤旗を目印にする紅葉狩り
五月晴れ行進もなきメーデーか

長野・県職労

風凜花

俳句
選外

無
題

カーテンを引き裂いて入る西日かな
寒雀見る我を見る寒雀
囀りやチーズ匂へるナース室
メーデーの一日豊かに暮れにけり

神奈川・川崎市職

和泉 まさ江

無題

豆をまき見えない敵を追い払ふ
いただいて若返りたるバレンタイン
難破した船のコースやなめくじり
メーデー祭人権平和脱原発

無題

ちびっ子ラガー五郎丸選手の真似をする
招き猫良し悪しすべて招きをり

三重・松阪市職

南出 孝次

宮崎・都城市職(家族)

道添 美枝

俳句

無題

人の子に生まれた笑顔潮干狩
争いに浮かぬ目をした受験生

奈良・奈良市職

川崎 岳史

川柳の部

小金沢 綏子^{やす}

川柳の約束事はたったひとつであり、五・七・五の十七音字で成り立っています。そこに作者の感動があって作品が生まれます。

感動のない作品は単なる報告句として扱われます。平凡な言葉が生き生きとした作品にもなれば、逆にユニークな言葉が目障りになる作品もあります。創意工夫があるかないかで作品の完成度が違ってきます。川柳が単なる生活の記録であれば、日記に書き残しても事足りませんが、作者がどう伝えるかで、読者の感動を呼び、無条件で共鳴される作品に仕上がることもあります。

さて、厳選の結果は次の通りです。

入選「里帰り」中川潔（福井・福井県職労OB）

佳作1「無題」田中良積（北海道・釧路職労OB）

佳作2「時刻表」柳谷たかお（青森・外ヶ浜職員組合）

佳作3「自画像」千田康司（宮城・宮城県職員組合）

「里帰り」（入選）中川潔さんの作品三十句は、定型のリズムで実感を基礎として一読明快。心に迫るものがあります。下五を練って練り上げて、これしかないという言葉据えてあり、読者の共感を呼んでいます。苦境に陥ったとき、人間の真価が問われる作品に仕上がっています。

「長過ぎる親の老後が目にしみる」

超高齢化の日本を鋭く突いています。健康年齢よりも十年以上も長寿な現代において、孤独に苛まれる親世代と介護に苦しむ子世代の泥沼ともいえる苦しみが表現されており、困惑している作者の苦悩が伝わっています。

「玄関に母の躰が並んでる」

大上段に構えて礼儀作法を説くわけがなく、このさりげなさに作者のやさしさが伝わっています。子育てに通じるものがあ

り、人間性までも垣間見えるようです。

「肩書きを脱がしてしまう里の風」

七人の敵と向き合いながらの勤め人。故郷に帰ると素の自分が出せるといった素直な作品です。哀感とユーモアが読み取れます。

「ふる里が一番遠い場所になる」

人は誰でも、社会情勢の変化や経済的事情、突然の疾患などで、知らず知らずの間に自分の意図と違う人生を歩んでいることがあります。ふと、故郷から離れてしまった自分に気付いた作者の悲哀が感じ取れます。

「無題」（佳作1）田中良積さんの作品は、繊細で味のある

男心が表現されています。しかし、その中に字余りがあることが残念です。上五の字余りは許容範囲とする選者もいますが、競吟の場合は定型のリズムが必要です。

「雪残照まだ続編がありそうな」

余韻を大事にされている表現かと思いますが、
「残照の雪続編があるらしい」

と詠むこともできません。作者独自の感性は大事ですが、定型のリズムで挑戦してほしいと思います。

「正論に生きる背骨にある軌み」

人間だからこそ尊厳は守りたいと思う企業戦士としての葛藤が、信念と悲哀とともに伝わっています。手慣れた手法で上手に仕上がった作品です。

「男の血明日は風とも火ともなり」

多様化の進む時代となり、草食系男子や肉食系女子などといわれて久しくなっていますが、実直に生きた昭和世代の逞しい姿が目に見えそうです。

「ちっぽけなロゴス売り買ひするヒト科」

ロゴスとは、本来人々が話す言葉の意味で、今では概念や理念などの意味でも使われ、キリスト教では「神の言」ともいいます。読者によっては難解句と受け取る人もいるでしょうが、難解な言葉でも内容の深い句をつくる作者の批判精神は見事だと思います。

「時刻表」(佳作2) 柳谷たかおさんの作品は、四季を取り入れて作者の思いを軸にし、川柳の味を出しています。

川柳は人間諷詠であり、ウィット(機知)、ユーモア(笑い)、ペーソス(哀感)などを感じさせる作品が佳句として評価されます。誰にでも理解できるが、誰にもつけない作品が佳句といえるでしょう。

「忘れたい事と一緒に捨てる雪」

除雪作業の大変さが軽妙に表現されていて楽しい作品です。

不満を抱きながらも淡々と現実を受け止めようとしている作者の姿が浮かんできます。自分の足元を眺める余裕が、ユーモアな作品を生み出しました。

「日めくりの数へ命をふと思う」

歳をとると誰もが共感できる作品です。なんでもない日常生活の中で、そう思いを抱く一コマを連想させ成功しています。作者の視野の広さと深さを感じさせます。

「B面が無い味気ない世になった」

今や音楽は、自宅にいながらインターネットでダウンロードできる時代になりました。利便性が良いように思えますが、裏の裏を知っている作者には味気ないのでしょう。皮肉たっぷり表現されていて風刺を感じさせます。

「自画像」(佳作3) 千田康司さんの作品は、現代社会を捉えて川柳味を添えています。

「交わらないだって私は塩素系」

下五に皮肉味があって、鋭い表現になっています。無我無知で通す人でもどしりと構えて喋らないと大物に見えてきます。

「部下向けの仮面次第に素が混じる」

はじめの頃は優しく接していた部下に、段々と本当の感情が出てしまう様子が実感として表現されています。企業戦士の嘆きが伝わってくる作品です。

今回、選外になった作品の中にも大変面白く、佳句がたくさんありました。頑張った作品をつくり続けられれば、きっと良い結果が得られると思います。

里帰り　　〜長い老後が目にしみる〜

中川 潔

ふるさとに帰る日を待つ国訛り
それとなく顔見せに行く里帰り
ふるさとに今でも叱る人がいる

肩書きを脱がしてしまう里の風

一両の電車が里の命綱

ひらがなで話してくれる里の友

響き合う人のところに生かされる

青春の答え合わせのクラス会

校庭の下に眠ったままの夢

玄関に母の躰が並んでる

折り合いをつけては進む老いの道

おかげさま五文字と暮らす老夫婦

ほほえみを浴びてやさしい色になる

縁側の母の床屋に父ひとり

泣き笑いひとつになっっていくふたり

手を添えて妻の歩幅で歩く道

子の無事を祈るしかない親の場所

背いても決して消さない常夜灯

長過ぎる親の老後が目にしみる

ケアプラン父母の耳には聞こえない

白旗を揚げない親に見送られ

心配という名の愛に包まれる

ひとりずつ最後はみんな同じ道

あとはただそのときを待つ風の家

肩の荷が支えだったと気づかされ

凜とした母の躰に生かされる

何色に咲いてもいいという陽射し

身の程を知って自分の色で咲く

隙間でもわたしの場所で凛と咲く

ふるさとが一番遠い場所になる

無題

来し方の戯画に粉雪降り続け
雪残照まだ続編がありそうな
正論に生きる背骨にある軋み
男の血明日は風とも火ともなり
黄昏の腕から抜けて行く時計
騙し絵に座り続けている影絵
脱ぎ捨てた仮面未練がへばりつき
火の章もあって男と女の絵
人間の私でいたい接続詞
いのち残照真んまん中にある懺悔
残照がきれいな懺悔を吐き忘れ
無位無冠しがらみのない影の位置
鳥獣戯画笑うヒト科を見て嗤う
深い森そと二つの耳を置く
森が哭く千夜一夜のものがたり

北海道・釧路市役所ユニオン・退職者

田中 良積

助詞ひとつ足して広げる春の視野
ふたりいるそんな眠れぬ夜を抱く
複眼の脆さを抱えている隘路
ちっぽけなロゴス売り買いするヒト科
泣き笑いそんな水位を見つめてる
一匹の鬼で歳月食べて生き
街の明かりに淋しがりの虫が寄り
人として単位不足の日を重ね
修正を重ね私でなくなる日
影を描き影を曳きずる私小説
人という形でぶっきらぼうが折れ
その角を抜けると風が語りだす
暗闇に慣れて哀しい前屈み
動かない貨車を揺さぶる風の私語
やがて眠る無題の絵など胸に抱き

時刻表

柳谷たかお

新雪を画布に未来図描き上げる
忘れたい事と一緒に捨てる雪
蟻も僕もぼんやり生きてみたい春
満開の夜桜時計止めて見る
始業ベル鳴るたんぼぼが開花する
鯉のぼり風に逆らってもいいよ
人を傷つけると梅雨の空になる
死亡欄に蛍揺れ続ける名前
夏服になれと郭公鳴いている
風鈴を仕舞う子どもを寝かすよう
子がみんな巣立ち見上げる罫雲
間もなく月が出ますのでご注意を
夕陽の独り言のように嘘をつく
おおらかに生きよう秋の影法師
日本っていいなと思う紅葉狩り

両隣向かい空き家で晩秋へ
日めくりの数へ命をふと思う
バーゲンのチラシは果たし状である
復活が何より得意 針一本
自動ドアに感知されない事がある
B面が無い味気ない世になった
指でなぞるそんな手紙が着きました
あの時の暴投受けてくれた父
揺れる葉に手を振る失語症の僕
糸口をつかむと海が凧いでくる
サイコロがまあるくなりたがっている
円周率知らない事もあっていい
生きてます右往左往を繰り返して
歯ぎしりもイビキも命紡ぐ音
時刻表弱音を吐いていいんだよ

自画像

交らないだって私は塩素系

人のためシャツ雑巾に出世する

渋みのある米大きくは咲かぬもの

公金が入らぬほどの我が器

ノドグロが旨い理由は腹黒さ

部下向けの仮面次第に素が混じる

どの道も頭を下げるヘルメット

かろうじて薄き影あり親父の日

同情か息子相手をしてくれる

外れクジ再チェックする土曜午後

木立 慈雨

2016 まんが大笑

テーマ
「山」

審査員
佐々木ケンさん

1968年、東京大学入学。1968年東大マンガクラブ発足時のメンバー。現在は機関紙「じちろう」に漫画レーダーを掲載中。

「笑い」の力で運動推進

2016年まんが大笑には既発表の作品を含め60作品の応募があった。自治労本内で審査会を開催し「大笑」や「うまいで笑」など、13作品が受賞した。

審査員は機関紙「じちろう」に漫画レーダーを掲載している佐々木ケンさんが務め、自治労まんが集団・代表幹事の大植賢（兵庫）さんが立ち会った。

個性的な作品や、社会風刺の効いた作品、センスの光る作品など様々なタッチのイラストが並んだ。その中でも、特に目を引いた13作品が各笑に輝いた。

また、今回はベテランの方から若い方まで、幅広い世代から応募があり、ベテランの方は、イラスト自体のうまさも際立ち、若い方の作品はアイデアに富んだものが多かった。同じテーマで描いても、世代によって、様々な特徴が見られた。

まんが大笑は誰でも参加できるコンクールであり、絵のうまさよりアイデアが大切。普段の生活の中で思ったことなどをイラストにしてほしい。より多くの作品が集まることで、その分笑いが起こる。今回、応募を見送った方も、次回のコンクールには是非挑戦してほしい。

総評①

ベテランの力が光る結果に

佐々木ケン

今年には応募者が少なめで、事務方の話によるいろいろなスケジューリングがタイトだったからではとのことですが、それでも数多く描いていけばアイデアも描線も洗練されていくので皆さん頑張っ

て描いて応募してください。
で、応募が少なめだったからかどうかちょっと小粒ではありませんが、池上さんの作品を大笑としました。日本で今回テーマの「山」と言えば富士山で、富士山と言えば世界遺産で、けどごみ問題などで自然遺産でなく文化遺産で、などがうまくまとまって、描線もこなれていていい絵です。

アイデア笑は、カチカチ山原発の井家さん、オリンピックエンブレムパクリのデザイナーS氏と安倍ソーリを描いたイリエさん、砂漠の山の阿部さん。どれもホントはコワイ日本の現状をユーモラスに描いています。阿部さんのは国債の山の表現がもの足りないですが絵がきれいなので少しおまけ。

彩色が条件とはしませんが、色使いも良かったお三方にうまいで笑。高橋さんはマンガ的な絵のナンセンスさで、園部さんは待機させられている人の山の圧倒的な表現で、澤井さんは超絶的なアホらしさで、それぞれうまく描いています。

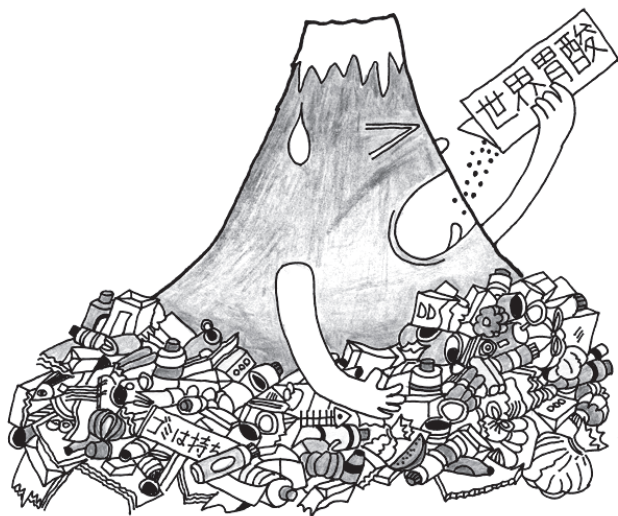
もう少笑のお三方。大西さんは誰にでもわかりやすい絵ですがもう少し寓意を入れたら。川口さんと相澤さんは今一つ意味がわからなかったのですが絵がかわいいので入れました。川口さんの三つで一作品であり、山にいる二つの絵は願望表現と取りましたがそれでいいのかどうか。

総務報道笑は、仕事の山に苦勞する大植さん。労組的山の絵の吉本さん。それと、ふんわりした線が面白く、多くの作品を応募してくれた和泉さんのお三方としました。

大笑

ごみの山

兵庫県本部 豊岡市職労(退職者) 池上 晃



総評②

もっと大きな爆笑の渦を

兵庫県本部 豊岡市職労・自治労まんが集団代表幹事

大植 賢

今回は60点の作品が集まりました。見ていて思わず吹き出したり、まった作品描きごみのすこに息をのんだ作品等、様々あります。それぞれの笑を受賞されました皆さん、おめでとうございませう。個々の講評は佐々木先生にお任せするとして、個人的には「もう少し応募者が多ければなあ」とも感じました。まだまだ笑い足りません。もっともっと審査会場を爆笑の渦に巻き込むような数の作品が欲しいです。

テーマが難しかったのかも知れませんが、今年はメ切が全国大会など重なったのも要因かもしれません。テーマについてはこれからも皆さんが描きやすい、そして世相を反映したタイムリーなものになる様にできればいいな、と思っています。

自治労のまんがコンクールは、紙1枚・ペン1本があれば誰でも参加できます。「絵は苦手だから……」って、しり込みしておられるそのあなた！絵は苦手でも「アイデア」が大事なのです。絵の上手い下手じゃないのです。いかに柔軟な発想で読者を惹きつけるかなんです。「落ち」があればOKなので、ベタなパターンでも大丈夫！

また、「まんが大笑」では、「既発表作品」も対象となります。単組・県本部などで発表した作品などもエントリーできます。受賞作品の中にも「テーマと違うじゃないか」という作品も混じっているのはそのためです。各地で活動している描き手の発掘という期待も込めてこの部門でも募集しています。

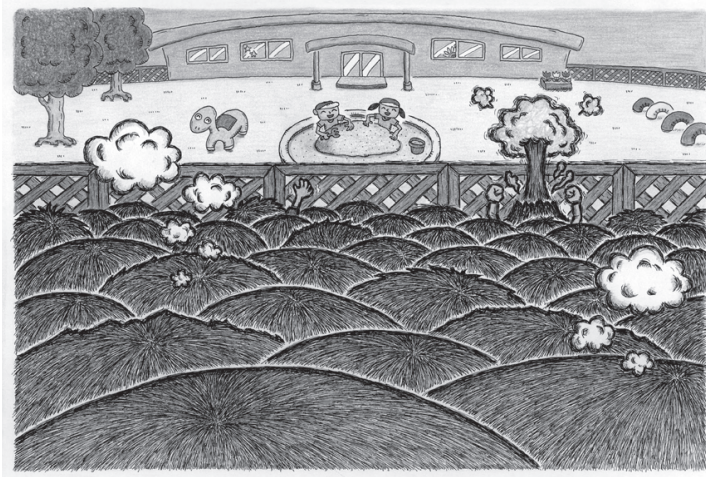
機関誌やニュース等でイラストやまんがを描いている皆さん、「腕試し」のつもりで応募してみてもいいかでしょうか。

自治労としても厳しい時代を強いられる時代です。そんな中で清涼的な笑いや、皮肉っぽく世相を斬る爽快性なども求めて、今後まんがコンクールが続けられればいいな、と思っています。

うまいで笑

待機児童

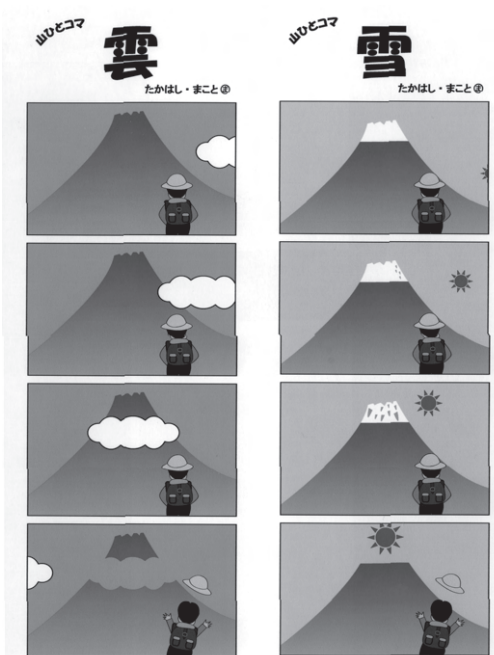
園部 信哉(東京)



うまいで笑

雲、雪

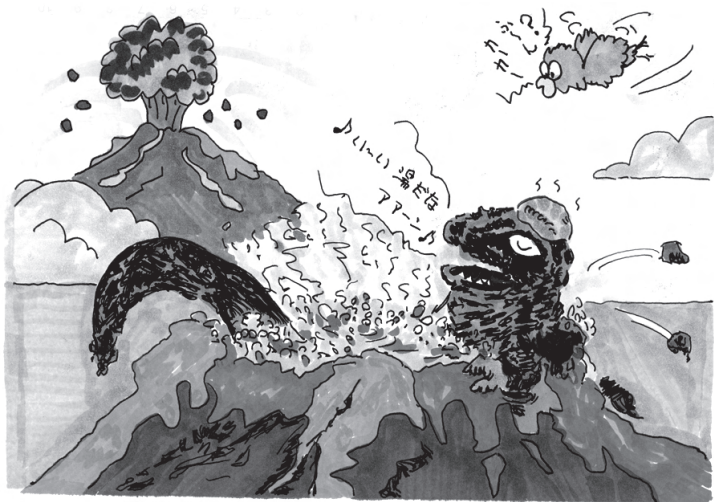
高橋 誠(鹿児島)



うまいで笑

気分は温泉

澤井 康樹(兵庫)



アイデア笑

山についての考察

井家 利之(石川)



「う、うさぎさん!! カチカチ言わずに『ピーピー』言ってますけど?」

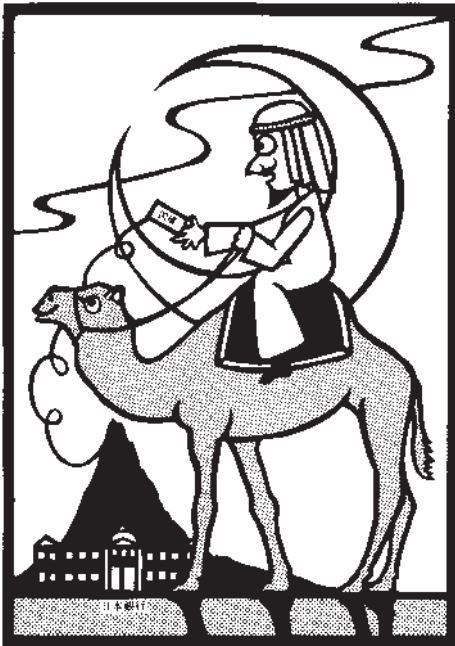
アイディア笑

ジャパニーズ・ヒトラー(既発表)
ヨッシー・イリエ(愛知)



アイディア笑

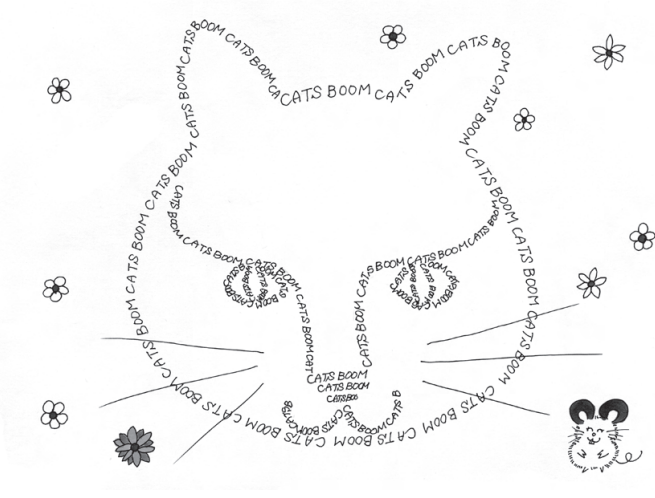
東京砂漠のあの山はナンダ?
阿部 正介(岩手)



もう少笑

ネコの山感

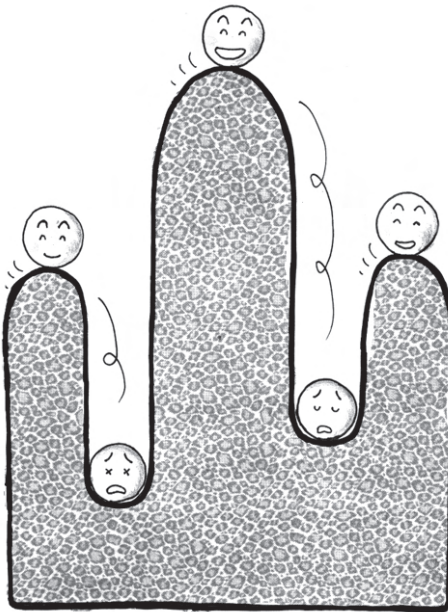
相澤 まさ子(新潟)



もう少笑

人生山あり谷あり

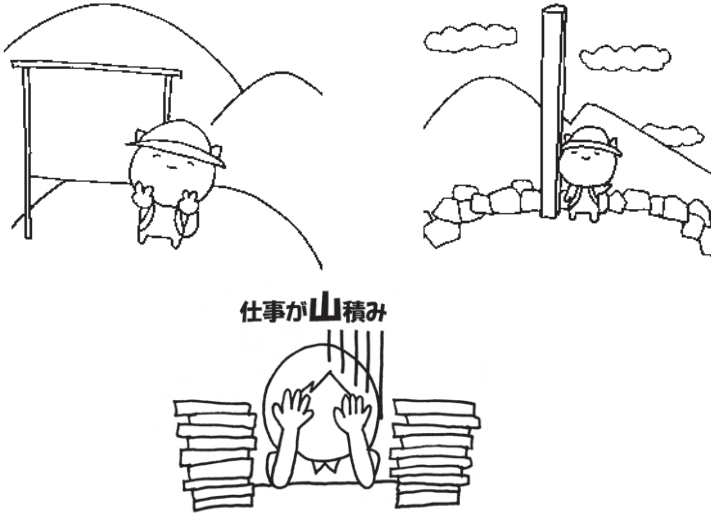
大西 英剛(兵庫)



もう少笑

山三態

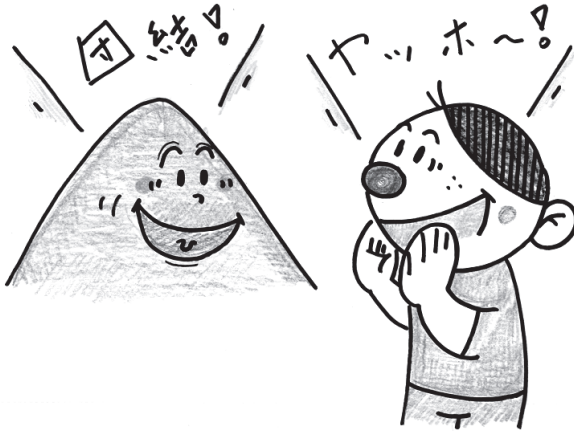
川口 のぞみ(愛知)



総務報道笑

山びり

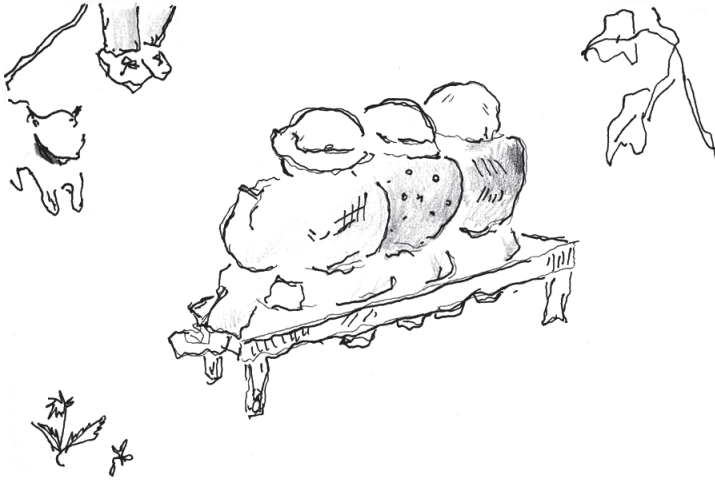
吉本 和弥(広島)



総務報道笑

迷彩色がいっぱい

和泉 まさ江(神奈川県)



総務報道笑

ひと山越えても(既発表)

大植 賢(兵庫)

「ひと山越えても」
自治ひょうご No.1478号



自治労文芸会議運営要綱

(名称)

第一条 この組織は、自治労文芸会議(以下「会」とよぶ)という。

(目的)

第二条 この会の目的は次のとおりである。

一、自治労県本部や単組の文芸サークルの創作活動を支援すること。

二、組合員(組合員の家族と元組合員を含む)に作品発表と批評の場を提供すること。

三、組合員に文芸活動に関する情報を提供すること。

(活動)

第三条 この会は前条の目的を達成するために次の事項に取り組む。

一、機関誌「自治労文芸」に関すること。

二、自治労文芸賞に関すること。

三、自治労の各種報道媒体への組合員の作品掲載に関すること。

四、「会報」等による、文芸サークルや作品の紹介に関すること。

五、文芸にかかわる講演会や研究会に関すること。

六、連合の各単組の文芸サークルとの交流、および他団体との協力連携に関すること。

七、その他、会の目的を達成するために必要な活動

(機関)

第四条 前条の活動をすすめるため、この会に幹事会と事務局をおく。

一、幹事会は年一回以上開催し、会の重要事項について審議する。

二、事務局は自治労総合企画総務局(東京都千代田区六番地1番)におき、会の日常事務を処理する。

(役員)

第五条 この会に次の役員をおく。

(1) 代表幹事(1名)

(2) 副代表幹事(1名)

(3) 幹事(若干名)

(4) 事務局長(1名)

幹事は各地連1名選出を原則とする。代表幹事は幹事の互選によるものとする。

幹事の任期は2年とし、再選を妨げない。

事務局長は自治労総合企画総務局長が担当する。

役員は会の構成員として、諸活動の企画、機関誌編集等を分担する。

(費用)

第六条 この会の活動に要する費用は、自治労本部の支出金、機関誌発行に伴う収益金、寄付金などでまかなう。

第七条 この運営要綱の改廃は幹事会の審議を経ておこなう。

(附則)

第八条 この運営要綱は2004年6月5日から適用する。

この運営要綱は2011年11月18日から適用する。

この運営要綱は2015年12月1日から適用する。

以上

自治労文芸

第27号

2017年3月31日

発行
編集

自治労総合企画総務局

自治労文芸会議

〒102-8464 東京都千代田区六番町1

TEL(03)3263-0273

印刷

株式会社 広報ブレイス

自治労出版物

のご案内

まちの
実例が
いかにある

月刊自治研 3 2017
vol.59 no.690



特集 古希を迎えた地方自治法

佐藤 寿之
[地域を交える]

自治労の自治研活動から
全国に広まった制度・政策
現在多くの自治体で実施している「こみの分別収集」
「急病者の休日・夜間診療」は、自治労の自治研活動から
実現した制度です。



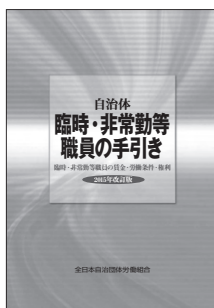
お申し込みは自治研ホームページから
<https://www.jichiro.gr.jp/jichiken/>
♪自治研 Facebook ページははじめました♪
<https://www.facebook.com/jichirojichiken>

定価◎本体762円+税
(年間定期購読料◎7,434円+税)



町村賃金
改善のために
2016年度 改訂版

編集 自治労全国町村評議会
2016年2月発行 / A5判90頁
定価 本体600円+税 (送料別)



自治体
臨時・非常勤等
職員の手引き
2015年改訂版

編集 自治労総合公共民間局 総合労働局
臨時・非常勤等職員の処遇改善と
雇用安定のための対策委員会
2015年8月発行 / A5判160頁
定価 本体500円+税 (送料別)

お申し込みは

(株)自治労サービス 自治労出版センター

〒102-0085 東京都千代田区六番町1 自治労会館6F

TEL. 03-3263-2023 FAX. 03-5213-5485

自治労のホームページからも購入できます

<http://www.jichiro.gr.jp>

幸せは、ひとりじゃつくりえない。



じちろう マイカー共済

ZENROSAI NEWS

5116A228

自動車総合補償共済

自治労共済
生協組合員
なら

契約者＝組合員で

家族の車も

団体割引 15%

主たる被共済者になれる方

- 1 組合員本人
- 2 組合員の配偶者
- 3 組合員の同居の親族*
- 4 組合員の配偶者の同居の親族*

*別居の未婚の子も含まれます。

※現在ご加入の保険（共済）の適用等級や過去履歴によっては、ご契約をお引き受けできない場合があります。

※2018年1月までの団体割引率を記載しています。



ご不明な点があれば、まずは組合にご連絡ください。

ご契約にあたってはパンフレットをご覧ください。

全労済 全国労働者共済生活協同組合連合会

自治労共済本部

全日本自治体労働者共済生活協同組合

全労済は、営利を目的としない保障の生協として共済事業を営み、組合員の皆さまの安心とゆとりある暮らしをめざしています。出資金をお支払いいただいて組合員になれば、各種共済をご利用いただけます。